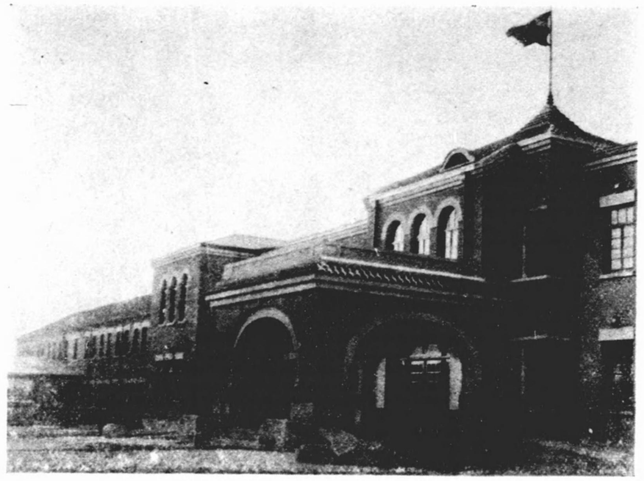
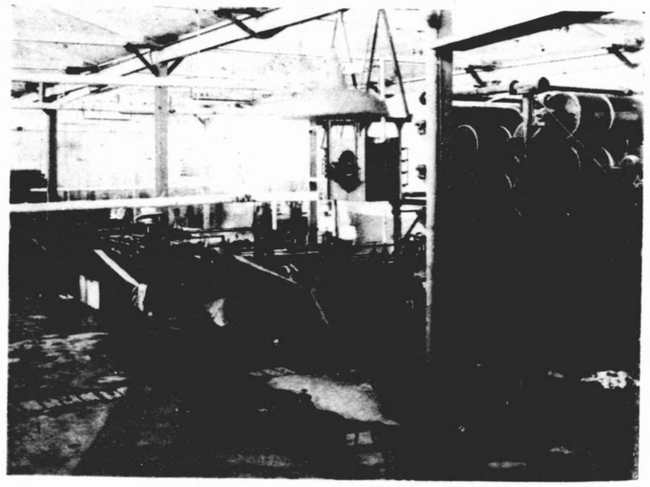
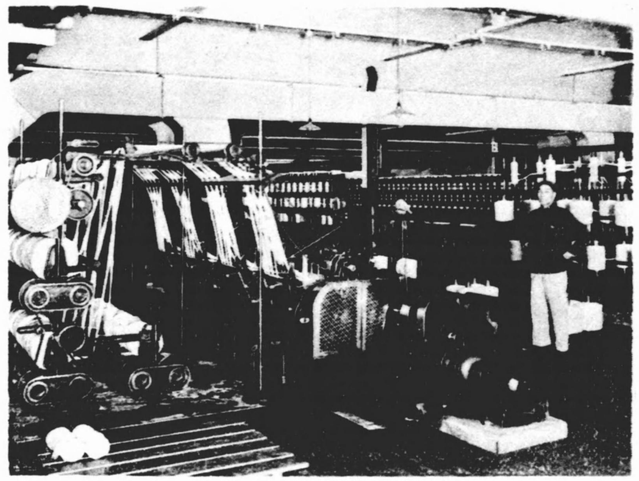


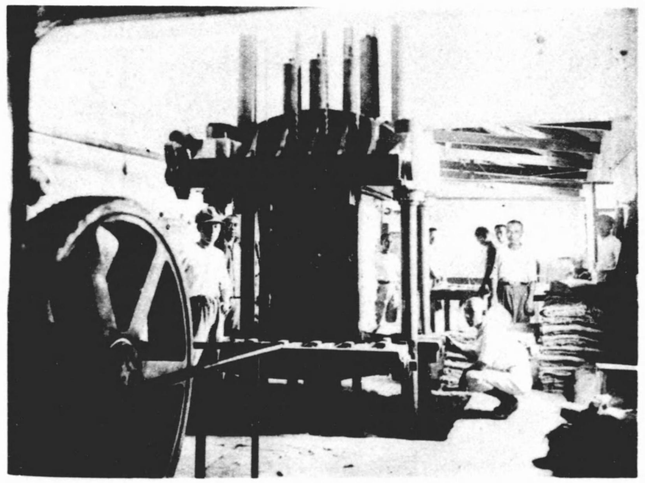
滿洲國軍政部被服本廠



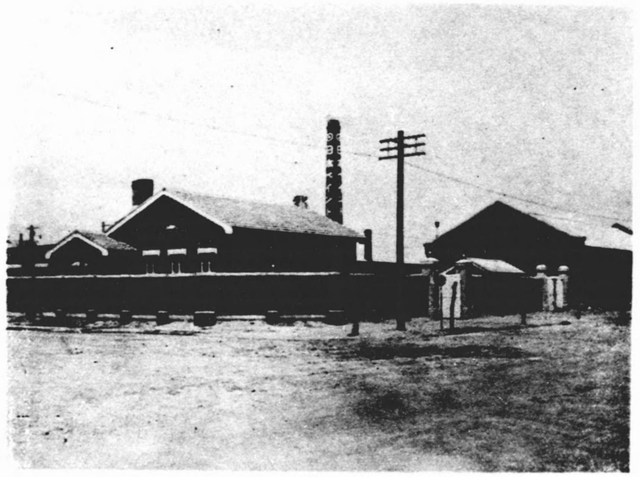
康德染色股份有限公司（工場ノ一部）



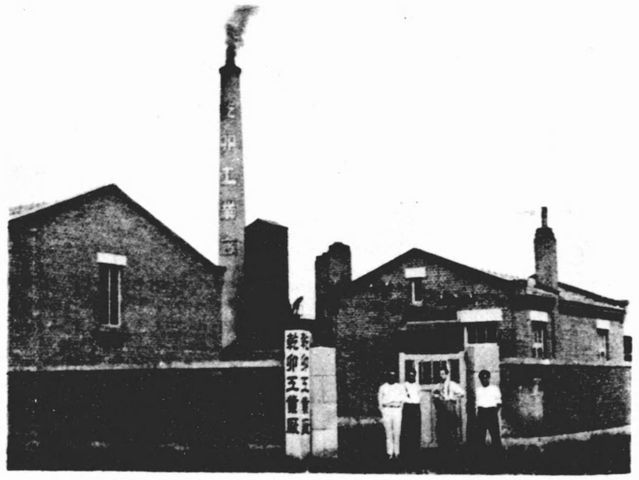
滿蒙毛織株式會社梳毛工場



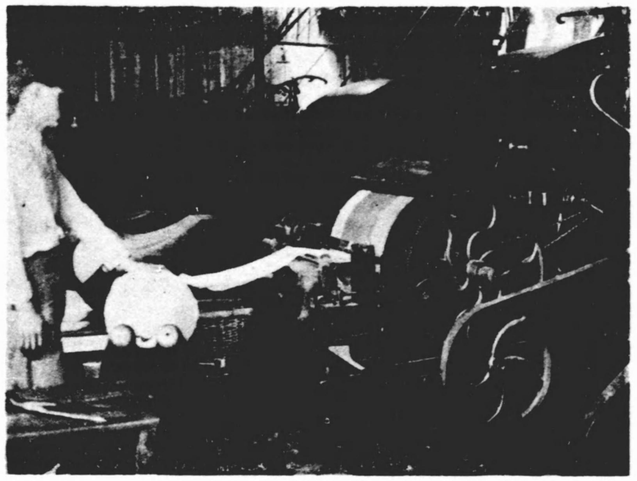
滿洲製麻株式會社（工場ノ一部）



日本ペイント奉天工場全景

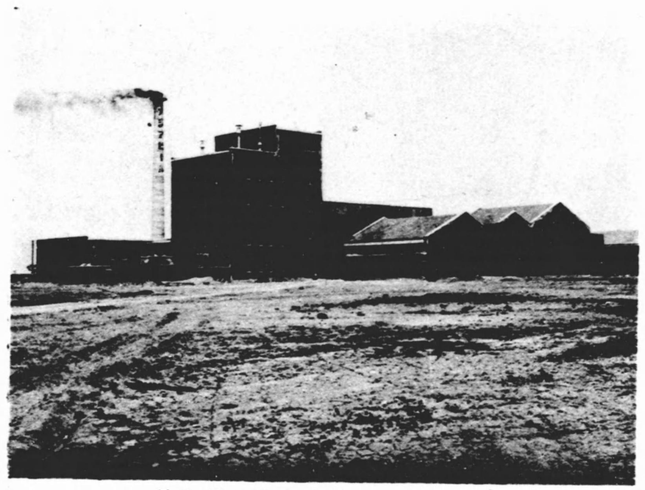


乾卯工業廠

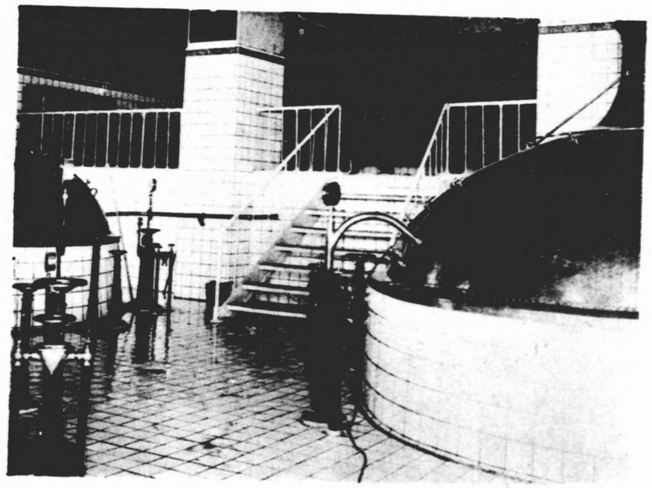


日滿フエルトト工業株式會社原料加工場

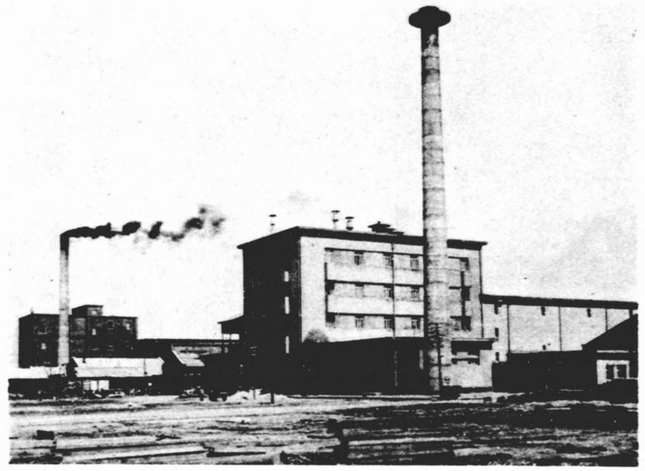
奉天紡紗廠精紡機工場



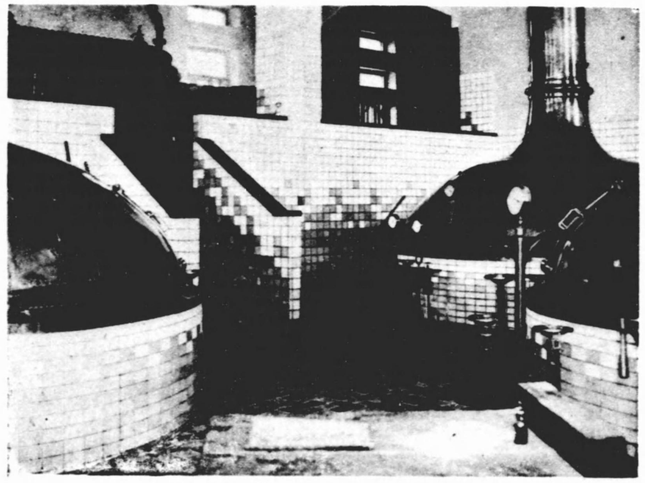
アジアビールー株式會社工場全景



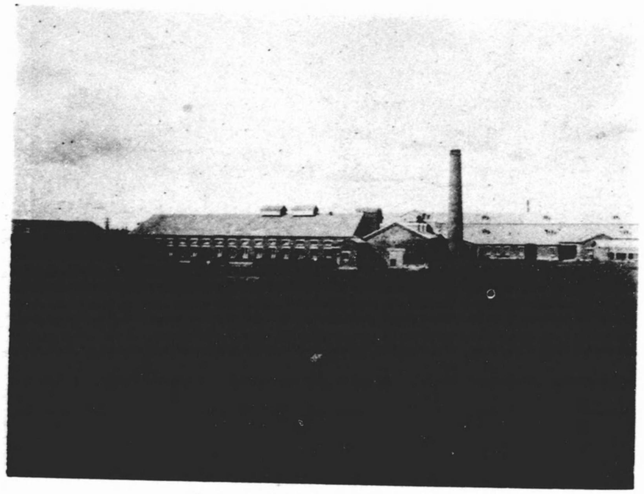
アジアビールー仕込場



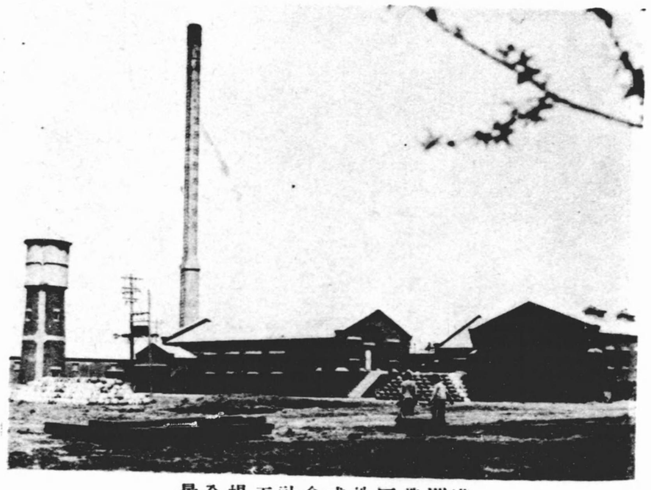
滿洲ビールー株式會社工場全景



滿洲ビールー仕込場

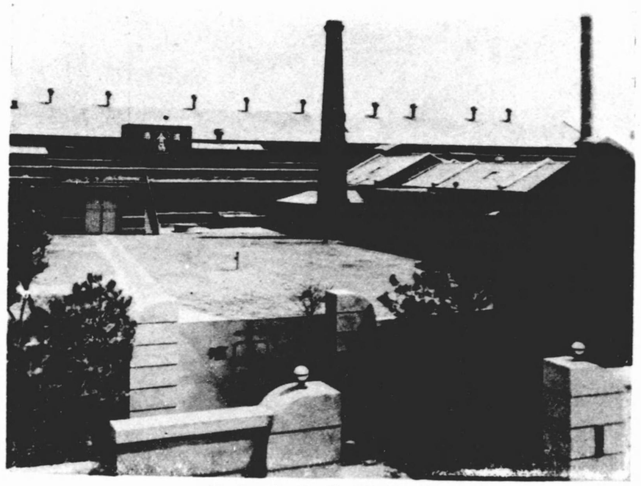


株式會社本嘉納商店工場



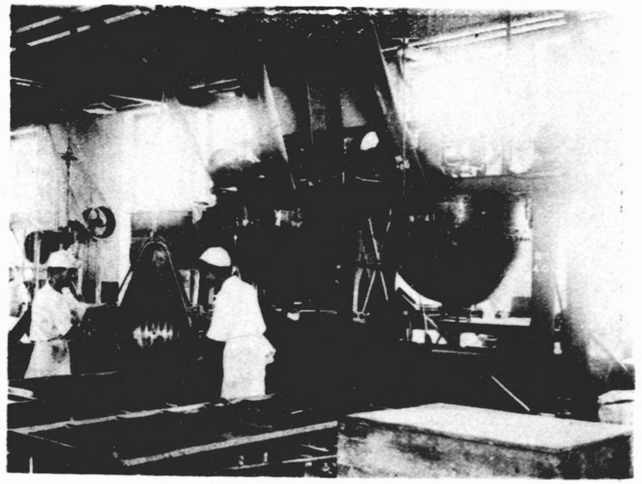
滿洲造酒株式會社工場全景

櫻屋酒造場

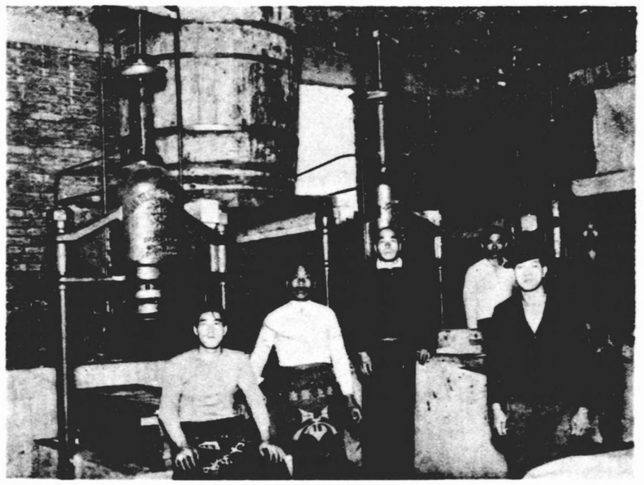


嘉納酒造株式會社

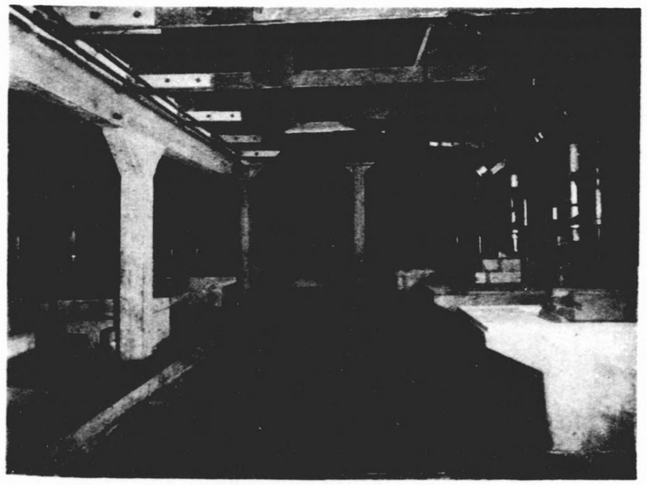
三立製菓株式會社奉天工場



明治製菓（製飴工場ノ一部）



島屋合名會社醬油壓搾工場

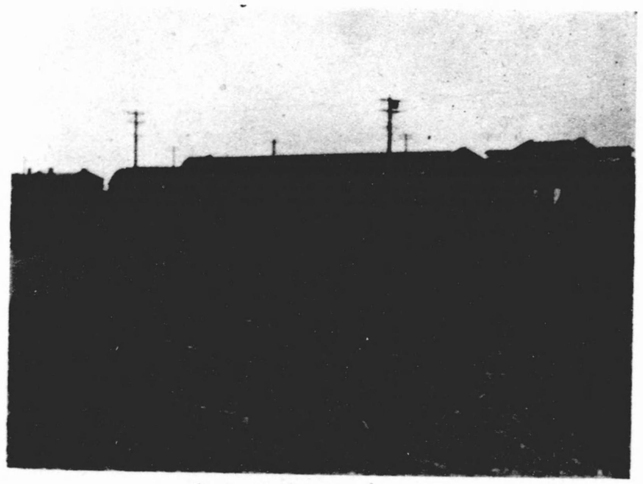


奉天醬園水壓諸味搾機工場

滿洲製糖株式會社工場全景

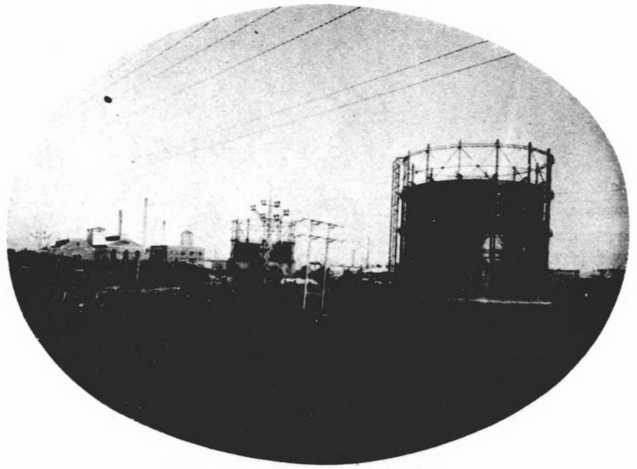
滿洲製糖株式會社結晶鋪室

（部裝包）場工天奉社會式株菓製コリグ

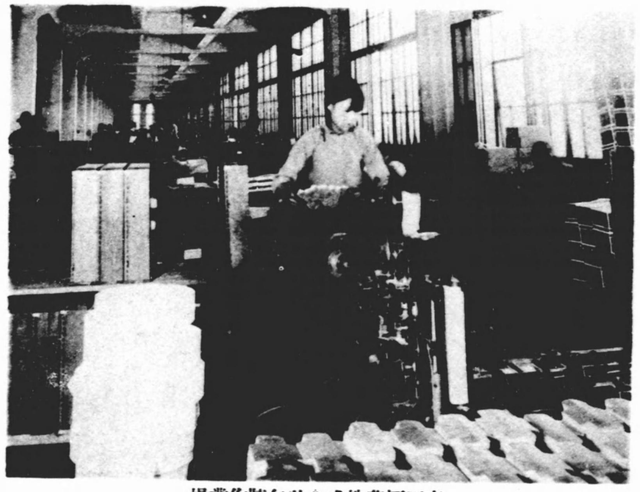


大矢組精米精粟工場

滿洲電業株式會社奉天支店

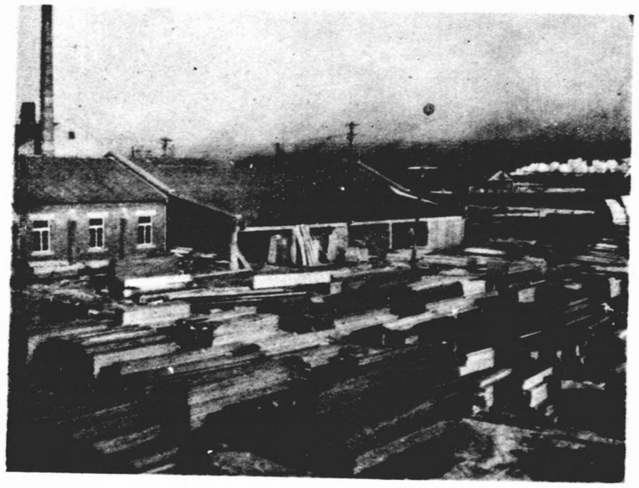


南滿瓦斯株式會社工場全景

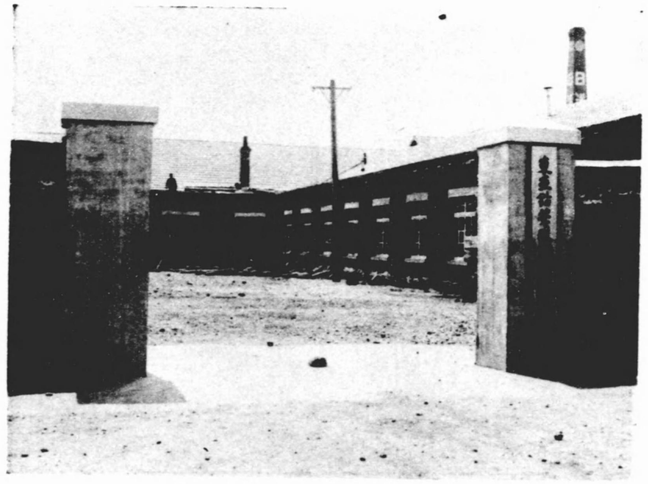


東亞煙草株式會社包裝作業場

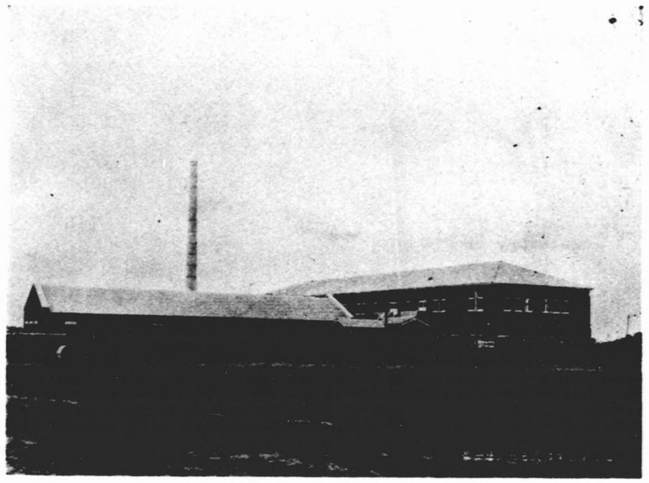
東亞煙草濕雷機工場



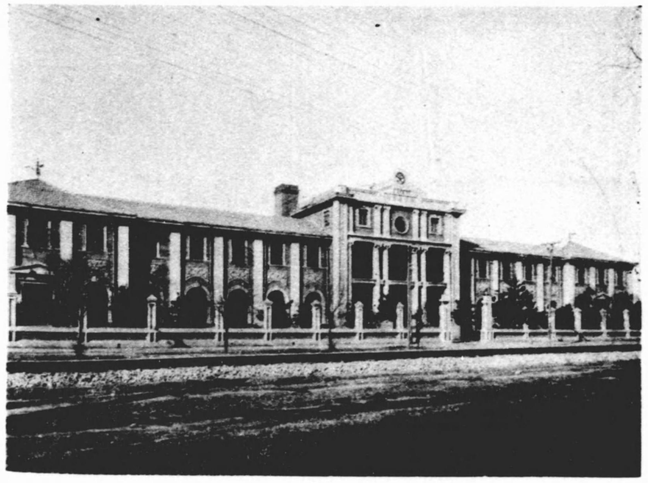
秋田木材株式會社奉天工場



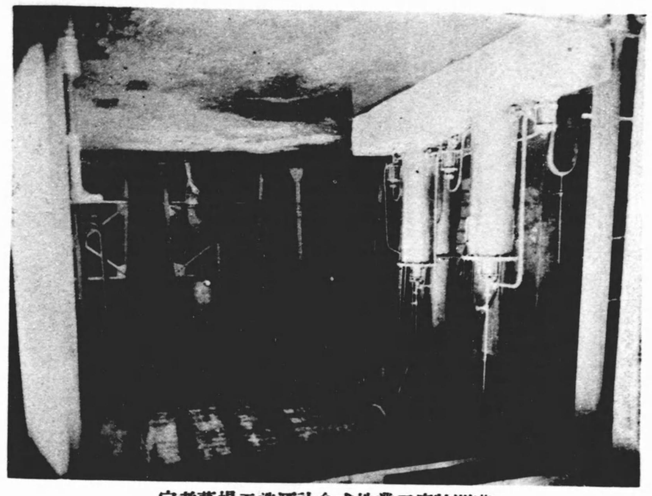
東亞鉛筆股份有限公司工場



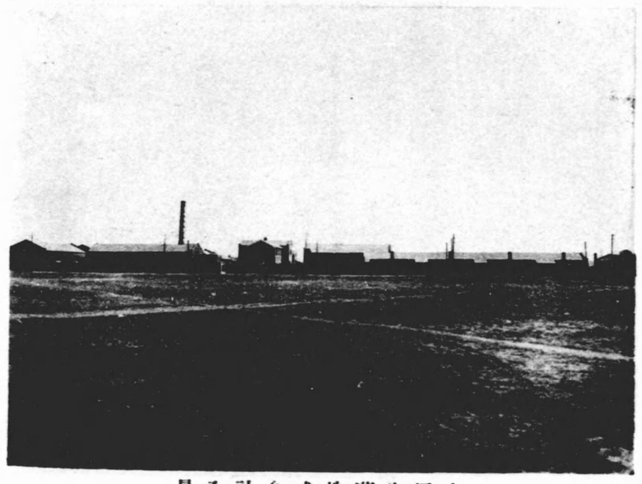
滿洲皮革株式會社工場全景



興亞印刷局



滿洲特産工業株式會社酒造工場蒸煮室



大同生藥株式會社全景

一、土　地

奉天に於ける工業用地としては日滿合辦の奉天工業土地股份有限公司が設立され四百二十萬坪の尨大なる土を經營し、その中第一期計畫事業として百萬坪の土地貸下げを行つてゐるが、內外工業家の進出目覺ましく各種工業の建設を見・最早や同地區も不足を來すべき情勢となり引續き經營地の擴張を行ひ昭和十年七月には資本金を五百五十萬圓（全額拂込）に增資した。奉天鐵西工業地區は交通上最も便利な鐵西に位し、滿鐵線に接續し原料製品の運搬に最好適の位置を占め、今や工業都市奉天の建設使命を背負ひ日滿工業ブロック線上を驀進してゐる。而して奉天工業土地股份有限公司經營地域貸付現況の概略を示せば左の通りである。

該公司經營地區全面積　九百八十四萬九千五百八十一粁五〇

內　譯

工業地域豫定面積	三、八八五、三九〇粁	商業地域豫定面積	二九七、六二〇粁
住宅地域豫定面積	二、八八二、六九七	官公署學校用地豫定地	二九八、二一〇

公園線地道路等公共用地	二、三八五、六七八	計	九、六四九、五九五坪

右面積は滿鐵附屬地の約二倍に相當するが、なほ必要に應じて現面積の倍大擴張は可能となつてゐる、而して該地區用地の貸付期限は二十ヶ年以内と定め、(更新可) この間借地人の建築を竣工した場合に限り借地券を發行不動產金融の便を計つてゐる。なほ同公司で土地買收及道路、上下水道等諸施設費に充當するため貸付料を、更にこれが補償として一時申受金を契約の際申受けるが其の規定を擧げると左の如し (單位一平方米につき)

區別	一時申受金	貸付料一ヶ月	區別	一時申受金	貸付料一ヶ月
工業地域	一圓二〇	四厘	甲種住居地	一圓五〇	五厘
乙種住居地	一、二〇	四厘	商業地	一、八〇	六厘
官公署用地	〇、八〇	三厘			

以上奉天鐵西工業地區の概要を述べた。この外工業用地は各所に散在してゐるが急激なる都市の發展によりその餘地を殘さず、又工業都市政策上より見ても今後奉天に進出する各種工場は鐵西工業地區に集中されるものと見られ、加ふるに交通の便と諸般設備の完備の點よりして全滿第一の工業區として其の全貌を現はすであらう。今滿洲各工業地の地價の比較を示せば次の通りである。

(1)、奉天鐵西工業地區

一時申受金 (地價)	一坪金一圓二十錢 (坪當り約三圓九十七錢)	
土地使用料 (一ヶ月當)	一坪金四厘 (坪當り約一錢五厘)	

(2)、新京滿洲國指定工業地區

地價每坪	國幣三圓五十錢 (條件により差異あり)

滿鐵貸付工業地區(滿鐵は全滿各地共土地場下げを爲さず)

貸付料一坪に付き一ヶ月金二厘

(3)、ハルヒン工業地區

一滿畝 (我が約一八五坪) 千五百圓内外

但工業地は國有地なるを以て永租借料 (五十ヶ年) とす

(4)、大連工業地區

一坪につき 最高 四十圓、最低 五圓

一、勞　力

一、滿洲に於ける工場勞動の沿革

滿洲に於ける工場勞働者は內地人、朝鮮人及び滿支人に色別出來るが、其中約九〇%以上を占むるものは支那人卽ち河北、山東省民である。何故滿洲勞働者が河北、山東省民で占めて居るかと云ふと、嘗て滿洲旗人と云つて日本の旗本に類する人種が北京に在住して居つたところ、種々の事情より滿洲に歸鄉せしめられ土地其の他の不動產を支給して農業拓殖に從事せしめられたのを嚆矢として引續き山東、河北民が農業開拓の爲入滿し來るに至つた。日淸戰爭後、ロシアの鐵道建設其の他滿洲工作事業に三、四十億の資本が投下せられ所謂滿洲景氣を示現したる事と、偶々山東省地方の洪水及び軍閥の强制による省民の貧窮とが益々同地方の住民を滿洲に誘致せしむる事になつたのである。

二、勞働者の出入狀況

然らば之等の山東、河北の勞働者は年々何れ位入滿して來るかと云ふと、是に就て大東公司奉天事務所にて之が監督に當り入滿許可者には各々査證を支給してゐるが、昭和十年度以降の査證支給者及び離滿者を示すと次の通りである。

山東省河北省民入滿離滿者數

年度別	入滿者	離滿者	差引滿洲に留まるもの
昭和九年	六九〇、九二五名	三九四、五二四名	二九六、四〇一名
同　十年	四四二、六六七	三三三、五八一	一〇九、〇八六
同　十一年	三六四、一四九 （內奉天來住者　一〇二、三〇二名　二八%）	四六、四一三名　三三%）	—
同　十二年	三月末迄　一一七、九七六	—	—

大體滿洲國の移民改策は日本人は之を奬勵し朝鮮人は之を統制し支那人は之を制限するといふ方針であるが、右の山東河北勞働者の入滿狀況を見ても此の政策の一端が現はれてゐる。而して入滿者から離滿者を差引いた滿洲に留まるものは九年度は二九六、四〇〇名より十年度は一〇九、〇八六名に減少を示してゐる。尤も昨年度以來の分は尙不明であるが前記移民政策と照合すれば此の數の漸次減少に向ふ事が窺はれる。

次に之等奉天省來住勞働者の就業別の割合を見ると、

奉天省來住勞働者職業別比率表

職業別	昭和十年度	比率	昭和十一年度	比率
農業	一六、四七三名	一一、三%	一八、三四九	一七、九%
林業	一、〇八八	〇、七	一五	—
漁業	三一三	—	五五二	〇、五
鑛業	二、七九五	一、八	八、三三〇	八、二
商業	二九、七四五	二〇、四	六、五四四	六、四
土木建築業	三〇、七九九	二一、一	二〇、八九〇	二〇、五
製造業	二五、四九九	一七、五	三八、二六六	三七、四
運輸交通業	一二、六九八	八、七	三、二一五	三、〇
雜役其他	二七、〇〇三	一八、五	六、一九〇	六、一
計	一四六、四一三	一〇〇、〇	一〇二、三五一	一〇〇、〇

昭和十年度は奉天省來住山東省民の中製造工業に從事したものは、全体の一割七分五厘に過ぎなかつたが、昨年度は實に三割七分四厘と增加し、來住者の職業中最も多く從て彼等の製造工業に占むる地位も亦重大と云はねばなるまい。

三、勞働者現在數

次に昨年末現在工場勞者五名以上を使用する四三八工場に就て示すと次の通りである。

男女國籍及工場地域別勞働者數

工場地域別	勞働者數 日本人 男	日本人 女	鮮人 男	鮮人 女	滿人 男	滿人 女	外國人 男	外國人 女	計 男	計 女	計 男女計
鐵西工業區	三三六	二	九三	—	二、四四三	六五	—	—	二、八四〇	九五	二、九三五
附屬地	七〇六	二三	二六八	一	九、八三三	三〇三	一	—	一〇、八八六	三三六	一一、一三五
其他地域	一、三一六	四二	二四六	一四四	一八、三〇四	二、五二三	二	一	二〇、〇四四	二、四三三	二二、四七七
計	二、五六八	九七	六〇六	一四四	三〇、五六八	二、九〇八	一〇	二	三三、七四二	三、一四三	三六、八八四

註　鐵西及附屬地工場勞働者は當會議所調、其の他工場勞働者は大東公司奉天事務所調

之で見ると勞働者總數三六、九一四名にして此の中滿人勞働者は實に三三、五〇六名に達し總數の九〇、八%に及んでゐる。奉天市以外の分の統計資料は持合はさぬが大體滿人勞働者の占むる割合は此の程度乃至それ以上であらうと思ふ。尤も最近鐵西工業地區に於

ける工場の發展其の他各地工業地區の隆盛に赴く關係上日本人乃至鮮人勞働者の近い將來に於ける增加も容易に豫想されるが、併し乍ら後に述べる賃銀關係其の他の特殊事情よりして滿人の占むる地位は依然たるものであらう。

尙一工場當勞働者數を前記地域別に見ると次に示す通りである

一工場當地域別勞働者數

地域別	調査工場數	一工場當勞働者數	地域別	調査工場數	一工場當勞働者數
鐵西工業地區	二九	一〇三名	附屬地	七〇	一五九名
其の他	三三九	六七	計	四三八	八四

鐵西工業地區及附屬地工場は大部分日本人經營の新式機械工場であつて、其の一工場當勞働者數の割合の多いのは肯かれるが、其の他工場卽ち商埠地並びに主として城內を中心とする地域の工場（大部分滿人經營家內工業的工場）に於て其の單位勞働者の比較的多いのは奉天造兵所、滿洲航空工廠、中央造幣廠、關東軍野戰兵器廠の含まれるが爲であつて之を除いた一工場當人員は四五名弱で其の工場の規模も寬はれる。

四、勞働者賃銀

勞働者賃銀に就ては昨年來每月當會議所に於て滿鐵經濟調査會の依囑を受け在滿勞働者の人員賃銀其の他詳細なる調査を行つてゐるが、本年三月末現在に於て回答に接したる十七主要工場の賃銀に付き述べよう。先づ滿支人本工男の基本給を見ると賃銀最高二圓三〇錢、最低二〇錢、平均六七錢六厘となつてゐる。賃銀額を各平均額に付いて二〇錢より四九錢迄をC級、五〇錢より九九錢迄をB級一圓以上をA級とするならば、A級に屬する工場は僅か二、B級に屬する工場十一、C級に屬するもの五と云ふ割合を示し、五〇錢から一圓までの工場が六割一分で最も多數を占めてゐる。之に附屬給を加へたる實質賃銀額平均に就て見ても大體同樣の割合である。

次に是を事業別に見ると次の通りである。

滿支人男本工基本給、日給、事業別一覽表

業種別	賃銀 最高	賃銀 最低	賃銀 平均	業種別	賃銀 最高	賃銀 最低	賃銀 平均
金屬機械器具工業（イ）	一、四五〇	一、四〇六〇	一、四九五	金屬機械器具工業（ロ）	一、四九二	一、四二四	一、四七〇

	(ハ)	二、三〇	、四〇	、七九	(ニ)	二、二三	、五一	、九五
	(ホ)	一、八〇	、三五	一、〇八	(ヘ)	一、五〇	、八〇	一、〇〇
	(ト)	二、〇〇圓	、二〇	、七九	平均	一、八九	、四八	、八九
窯業		一、二〇圓	、五〇圓	、八五	紡織工業(イ)	一、〇四圓	、二七圓	、四五
	(ロ)	、六五	、三〇	、三五	平均	、八四	、二八	、四〇
食料品工業(イ)		、五〇	、五〇	、五〇	(ロ)	、七三	、四〇	、五五
	(ハ)	、四三	、三三	、四〇	(ハ)	、五三	、四〇	、四六
	(ホ)	、六〇	、四五	、四五	平均	、五六	、四二	、四七
化學工業		一、三五	、四五	、五〇	雜工業	、八四	、四〇	、六〇

此の表は調査工場の少數なる爲必ずしも之を以て賃銀支拂高の全般を知る事は出來ないが併し乍ら次の事は推定出來ると思ふ。即ち、全體を通じて最高及び最低の賃銀を取るものが金屬機械器具工業の中に含まれてゐると云ふ事である。此の事は容易に肯かれる事であつて事變後滿洲經濟が先づ重工業の發達を促したるに依る事、併せて此の種工業が一般に比し其の操作困難とされ、且其の能率の如何が特に重要視されるに因るものである。其他の諸工業に就ては特に論ずべき事もなく、且又此の小數工場の總計を以て妄りに批評を加へる事の危險を感ずる譯であるが、兎も角此の滿支人勞働者が大體日給五〇錢から一圓までの低賃銀を以て作業してゐると云ふ事は他國で見られない現象であると同時に、亦滿洲工業界の持つ一利點とも云へる。尤も彼等の勞働能率の上から見ると其性格等に因る種々の缺點もあり之等の矯正も一つの問題であるが、何れにしても賃銀の極めて廉價なる事は先づ擧ぐべき强味であつて彼等の滿洲に於ける勞働者の九割以上を占むる事當然の結果であり從て之に關聯して日本勞働者の滿洲進出問題も一考されなければならない事である。

次に滿支人勞働者の出來高拂賃銀を見る、現在此の制度を採つてゐるのは前記十七工場中僅か四工場であつて然かも之のみを採用してゐる譯でなく日給拂制度と併用してゐるのである。其の工業種別は金屬機械器具工業三、紡織工業一であつて最高二圓七八錢、最低二〇錢平均八三錢と最高最低の差は日給拂の場合より大きく又平均賃銀も大體に於て日給拂より多額である、是は勿論能率如何に基く本制度の持つ特徴であるが、後述する滿支人特に山東省民の性格よりして本制度のみの採用とは行かなくとも、之を併用し以て其の缺

を補ふ事にし度いものである。

所で奉天に於ける日本人勞働者の賃銀は如何かと見ると次の通りである。

事業別日本人男本工基本給、日給賃金一覽表

業種別	勞働賃銀 最高	最低	平均	業種別	勞働賃銀 最高	最低	平均
金屬機械器具工業（イ）	四五、三〇	四二、〇〇	四二、七〇	金屬機械器具工業（ロ）	四五、五二	四一、八二	四三、四〇
（ハ）	五、四〇	一、〇八	二、四六	（ニ）	三、二五	一、〇〇	二、五〇
（ホ）	三、三八	、八六	一、八六	平均	四、五七	一、三五	二、五八
窯業	三、〇〇	一、〇〇	二、〇〇	紡織工業	二、七〇	一、〇〇	一、六五
食料品工業（イ）	二、二〇	一、三六	一、五九	（ロ）	二、六七	、八六	一、三九
平均	二、四三	一、一一	一、四九				

即ち十七工場の中日本人勞働者使用工場は九工場であるが、其の支拂賃銀の最高は金屬機械器具工業の五圓五二錢、最低は同工業外二工業の一圓で矢張り金屬機械器具工業が比較的優遇されてゐる事が分る。之を各工業平均に採つて見ても最高は金屬工業の二圓五八錢最低は食料品工業の一圓四九錢となつてゐる。然らば日本人勞働者は滿支人に比し如何程高い賃銀を取つてゐるだらうか、前記の表から算出して日本人及び滿支人勞働者の賃銀を比較して見ると金屬機械器具工業では日本人の賃銀は滿支人の二、九倍、窯業では二、三五倍、紡績工業では三、七倍、食料品工業では二、九八倍と大體三倍前後の賃銀を取つてゐる事になる。

以上は日本人經營の主要工場に就ての調査であつて尙滿人經營の工場の調査を附記し度いのであるが、之は所謂土着家内工業に屬し詳細の調査は困難なのであるが之に付き大東公司奉天事務所で三二六工場の賃銀を調べたものによると、最高一圓より最低二〇錢の賃銀を支拂つてゐる工場が大部分を占めてゐる。併し勞働者の使用法、賃銀支拂法等を研究してゐるのは日本人經營工場であるから是等工場の模樣を述べる事に依て賃銀其の他の勞働事情を知り得ると思ふのである。

尙參考迄に主として土建關係の一般勞働者賃銀三月末現在を示せば次の如くである。

五、勞働能率上より見たる滿支人勞働者の性格及特異性

勞働賃銀（一般勞働）

昭和十二年三月末日調（金建）

職名	日本人 最高	日本人 並	日本人 最低	滿洲人 最高	滿洲人 並	滿洲人 最低
並夫人	3.00	2.50	2.00	.80	.60	.50
高人夫	3.50	3.00	2.50	1.40	1.30	1.20
土工	3.50	3.00	2.50	1.00	.80	.60
石工	4.00	3.50	3.00	1.80	1.60	1.40
煉瓦工	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
鍛冶工	4.00	3.50	3.00	1.70	2.50	1.30
左官工	4.00	3.50	3.00	1.80	1.60	1.40
塗工	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
木挽工	—	—	—	1.70	1.50	1.30
木工	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
指物職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
墨職	4.00	3.50	3.00	—	—	—
建具師職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
經師職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.80
屋根職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
硝子職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
鉄工職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30
鑄物職	4.00	3.50	3.00	1.70	1.50	1.30

以上に述べた通り滿洲に於ける工場勞働者の大部分は滿支人を以て占めてゐるのであるが、彼等は異國民たるが故に日本人には種々解し難い性格を有し從て彼等を使用し生產上の能率を擧げるに就いても仲々の問題があると考へる。尤も此の方面の研究は專門

的に行はうとすれば到底本稿に於て論ずるべき性質ではないが、大體常識的に知ると云ふ意味に於て少し述べて見たい。

前述のやうに滿支人勞働者と云つても其の大多數は河北、山東民であるのだが、彼等は滿洲土着民に比し大體に於て眞面目である。之は彼等が最初滿洲の地に第一歩を印した目的が農業開拓にあつた事からして肯かれる事である。一般に土着勞働者は、衣食の糧を得さへすれば良いと云ふ考へで、至極退嬰的な思想を持つてゐると謂はれて居り、從て滿人勞働者は悉く左樣に考えられてゐるのであるが、此は決してさうでない。兎に角金を貯へて故郷に送金する事を唯一の樂しみにしてゐるのであつて、從て勞働時間等は問題にしてゐない。又內地で屢々見る勞働組合其の他の勞働問題發生の可能性もない。之は恐らく今後も其の發生を見ないのではないか、若し其の問題の發生を可能ならしむる事實があるとすれば、個々別々に其の工場から離反して他工場に移るか、又は經營不況とか農村疲弊の爲勞働者が過剩になつて、他工場にも收容出來ないと云ふ場合であれば、故郷の山東、河北へ歸つて了ふのではなかからうか、此の點日本及歐米諸國の勞働者に比べて甚しき特異

性を持つてゐる。併し乍ら彼等が應用の才乏しく技術的に比較的精密な作業には不向きである事は、一般工業家の齊しく認める所であつて、如何に賃銀が廉くとも能率が上らないから結局差引零であり、寧ろ高給の勞働者を使用した方が有利な場合がある向も多い。是は筆者が奉天の諸工場に就て聞いた意見であるが、兎も角各種工場が現實に彼等滿支人を使つて作業を續けてゐる事からして此の缺點は必ずしも絶對的のものでなく、教育と習練如何によつて、或程度迄矯正し得られるものであり、且又賃銀の非常に低廉なる事が他の缺點を補ふに足るものであると云ふ事を證して居ると思ふ。

もう一つ別の缺點と目されるものは彼等が毎年主として舊正月其他の飾句に歸鄉するといふ事である。是は勿論工場作業の繼續性から見て不利益な事であつて日本にても大阪を例に取つて見ると、近郊の勞働者より冲繩、鹿兒島、新潟等の方面のものが比較的に成績優良であるのは右の歸鄉關係に基くものであらう。此の移動關係を同じく大東公司の最近の統計に依て示さう。但し次の表は山東省民勞働者一、六七九人を全滿に就て調査せるものである。

山東省勞働者歸鄉割合表

來滿後歸鄉迄の期間	割合	來滿後歸鄉迄の期間	割合
一年以內	一八、一一%	九年以內	二、八〇%
二年〃	一〇、八四	一〇年〃	三、五二
三年〃	一八、五八	一一年〃	二、〇三
四年〃	一九、五九	一二年〃	〇、七一
五年〃	七、二一	一三年〃	〇、二〇
六年〃	四、九四	一四年〃	〇、一二
七年〃	四、八二	一五年〃	〇、三〇
八年〃	二、八〇	一五年以上	三、四三
		計	一〇〇、〇〇

之を事業別に見るに次の通りである。

事業別山東省勞働者歸鄉割合

事業名	割合	事業名	割合
農業	一五、三七%	製造工業	二五、六一%

林業	〇、三〇	建築業	五、六六
漁業	〇、三〇	運輸交通業	三、七五
鑛業	二、二〇	雜	一二、二一
商業	三四、六〇	計	一〇〇、〇〇

更に之を省別に見やう。

各省別山東省勞働者歸鄉割合

省名	割合	省名	割合
奉天省	二八、五三	浙江省	一五、五四
關東州	二〇、一九	其の他	二二、〇四
吉林省	一三、七〇	計	一〇〇、〇〇

之等の表を見るに、來滿してより四年以内に歸鄉するものが全體の六七、一二%で一、六七九名の中一、一二七名の大部分を占めてゐる。事業別に見ても商業從業員に亞いで二五、六一%と全體の四分の一以上が歸鄉組である。又全滿の中心奉天省内に働くものが一番歸鄉する者多く二八。五三%である、之等の歸鄉時期は舊正月、仲秋及び端午節句等であるが、舊正月が一番多いやうである。是は作業の繼續上から見て其の間、適當な緩和策に就て研究すべき題目たるを疑はない。

六、熟練勞動者養成機關

熟練工の養成問題に就き本年三月二十四日、當會議所に於て奉天工業家の座談會を催した其の時の議題は次の通りである。

一、熟練工養成に關する件

二、見習工募集並養成に關する意見

三、成人職工採用と養成職工の利害得失並に之に對する意見

1、成人職工採用の利害得失

2、養成職工の利害得失

四、除隊兵採用に關する意見

五、勞働能率增進に關する意見

六、工場管理及能率增進に關する意見

養成機關としては奉天には見るべきものはないが、工業家としては日常作業中自然に技術の習得をさせて居る模樣である。併し乍ら現在熟練工が不足してゐる事は事實であつて日本內地に於ける熟練工爭奪は新聞紙の報ずる通りであるが、最近解氷期に入り朝鮮に於ても土建工事の活況より其の方面の熟練工を要求し、國境を越へて入鮮する者多く、さらでだに斯の種勞働者の缺乏に更に拍車を掛ける結果になつた事に就ても、實際上の技術の習得は亟も角として何等かの養成機關を奉天に設ける必要ありとの結論に達したのであつた。

現在滿洲には大連に南滿洲工業專門學校があり工業實務學校を附設して此の要望を充してゐるが奉天には此の施設を見ず少なく共乙種程度の工業學校の設立を要望されてゐるが差當つての機關として青年學校に工業方面の實際教育を施す必要が叫ばれてゐる。尙參考迄に滿洲航空株式會社航空工廠に於て施行してゐる此の種養成機關に就て一言紹介しやう。

同廠では高等小學校卒業程度の勞働者を收容し之を日本人と滿人に區別し、修業年限は其に三ヶ年とし、在學中の滿人に對しては强制的に支給額の一割を貯蓄させ、卒業後三年の義務就業年限內に他に移轉した場合には沒收する。宿舍手當は自活方法を採り、日本人の見習工にのみ支給する。而して會社手當は水道と建物のみで他は自辨せしめ、疊十七疊に五人を宿泊せしめ冬季にて大體每月一五圓夏季にて十二圓位にて生活して居る模樣である。學科內容は大體青年學校のそれに倣ひ、一年級に每日一時間工場用語を教授し三年級より各作業過程に付き部分的に知習得せしめる。尙滿人には特に精神教育が强調されて居り之等の費用は年六百圓見當を要する。

應募狀況は昨年度日本人五六名の應募者に對し採用二〇名、本年は六〇名應募の見込にて採用數は前年と同樣である。滿人の方は昨年度四二〇名の應募の中四〇名採用し、本年は六〇〇名の豫想であるが、採用は矢張り同樣である。右のやうに嚴選方針を採つてゐるが大體成績良好の由である。

三、動力及燃料

一、電　力

奉天に於ける日本人側及滿洲人側の諸工場は、滿洲電業股份有限公司より電力の供給を受けてゐる。奉天の如き世界に比類のない石炭價額の低廉なる土地に於ては自家發電が有利とも考へられるが、撫順炭礦に於ける發電原價が低廉なるにより、發電機の購入費、設備費石炭の消費量から推して見ると、撫順發電所の電力を供給する滿洲電業股份有限公司の電力料金が低廉であるため、自家發電は採算上必らずしも有利ではない。滿蒙毛織株式會社、奉天造兵所の如く多量の電力を使用する工場に於ても又事變後設立される諸工場に於ても自家發電に依るものなく總て該公司より電力の供給を受けてゐる。撫順炭礦發電所は年々規模を擴大し、一昨年は鞍山の昭和製鋼所に供給するため五萬キロの新發電所を設置したが、將來アルミニウム工場が設立されれば多量の餘剰電力を生ずるから、奉天への供給も潤澤となるべく豫想されてゐる。

電氣料金は左に示す如く滿鐵沿線附屬地（金建）と奉天城内（國幣建）の二つに分れてゐるが併し近き將來料金を均衡せしむることになつてゐると謂はれてゐる。以下電氣料金を示せば次の如くである。

イ、滿鐵沿線附屬地

A、總量燈料金（晝夜間供給）

(1)、準備料金

燈數	一燈一ヶ月料金
二十燈迄の分に對し	金十三錢
二十燈超過五十燈迄の分に對し	金十一錢
五十燈超過の分に對し	金八錢

(2)、電力料金

一燈一ヶ月平均使用量	一キロワット時につき
六キロワット時迄の分に對し	金十一錢
六キロワット超過十五キロワット時の分に對し	金九錢
十五キロワット時超過の分に對し	金七錢

B、一般電力料金（晝夜間供給）

(1)、準備料金（低壓）

契約容量一馬力又は一キロヴオルトアンペア一ヶ月金一圓五十錢

(2) 電燈料金（定額）

一ケ月電燈使用量	一キロワット時につき
一千キロワット時迄の分に對し	金三錢四厘
五千キロワット時超過一万キロワット時迄の分に對し	金二錢八厘
一万キロワット時超過二万キロワット時迄の分に對し	金二錢六厘
二万キロワット時超過の分に對し	金二錢四厘

(3) 電燈を以て電力を使用するときは前二號より算出したる料金合計額を五分引す

ロ、美天境内

A、電燈料金（晝夜同供給）

(1) 電燈料金

燈數	一燈一ケ月料金
二十燈迄の分に對し	圓弗十三錢
二十燈超過五十燈迄の分に對し	十一錢
五十燈超過の分に對し	八錢

(2) 電力料金

一燈一ケ月平均使用量	一キロワット時につき
六キロワット時迄の分に對し	圓弗十五錢
十六キロワット時超過五十キロワット時迄の分に對し	十三錢
五十キロワット時超過の分に對し	十二錢

B、一般電力料金（晝夜同供給）

(1) 電燈料金（定額）

契約容量一馬力又は一キロワットアンペア一ケ月金一圓五十錢

(2) 電氣料金（定額）

一ケ月電燈使用量	一キロワット時につき
一千キロワット時迄の分に對し	圓弗四錢六厘
五千キロワット時超過の分に對し	四錢
一万キロワット時超過の分に對し	圓弗三錢八厘
二万キロワット時超過の分に對し	三錢六厘

(3) 高壓を以て電力を使用するときは前二號より算出したる料金合計額を五分引す

（註）契約容量五十馬力又は五キロワットアンペア一以上の高壓電力の料金は別に協定することあるべし（附屬地域内共）

滿洲に於ける電力價を日本のそれに比較すれば何れの土地よりも安價であり、日本各地に於ける一キロワット當りの單價は東京六錢五厘、大阪五錢四厘、名古屋四錢、神戸四錢八厘、廣島四錢八厘、福岡五錢、京城四錢七厘、釜山四錢七厘で、滿洲主要都市の三錢四厘に比較すれば何れも比較にならぬ程高價である。日本に於ける大工業にて多量の電力を使用するものは何れも電力會社と特別の契約を結び、一ヶ月五萬キロワット乃至十萬キロワット以上を使用する場合に於ては、二錢四厘乃至三錢内外の料金にて電力を買受けることが出來るが、滿洲に於ても大工場にて月五萬キロワット以上使用する場合は、二錢五厘内外となり、紡績會社の如く常に十萬キロワット以上の電力を使用するものにあつては二錢内外で供給を受けることが出來ると謂はれて居り、遙かに日本朝鮮に比して低廉である

滿洲に於いても奉天は指呼の間に撫順を望み電力の供給豐富にして、しかも供給の便は遙かに大連、新京を凌いでゐる。尙滿洲電業股份有限公司に於ては奉天鐵西工業地區の將來の發展を豫想し、これに備へるため現に鐵西工業地區に敷地の豫約をなし、一大變電所の設置を計畫し、工業家に低廉なる電力を供給すべく準備中で本年度中には實現される模

樣である殊に最近新聞紙の傳ふる所に據れば右、設備完成迄一時便法として不取敢鐵西工業家に對し特別低廉料金を課する事に決定た模樣である。

二、石　炭

奉天に於て消費される石炭は滿鐵系の撫順炭、本溪湖炭、煙台炭及牛心台炭と滿洲炭礦系の北票炭、西安炭及八道壕炭がその主なるものである。

一昨年迄北票、西安各炭は夫々獨自の販賣權を有し總入市高の約二割を占め滿鐵關係撫順炭、本溪湖炭、煙台炭の地盤に相當喰入つてゐたのであるが、一昨年四月全滿炭業統制委員會の決議により西安、北票等滿洲炭礦系石炭の販賣は全部滿鐵奉天營業所に委託される所となり、又煙台粉炭の有力なる敵として月々五、六千瓲の入市高を示しつつありし牛心台炭も同年十一月その出炭全部を滿鐵が買上ぐることに決定を見、ここに奉天に配給される石炭は全部滿鐵奉天營業所の獨占する處となつた。

但し近年の急激なる需要の增加は必然的に石炭の供給不足を來し昨年度は西安、北票、八道壕等滿鐵系石炭は夫々地元への供給で一杯となり、奉天にまで輸送するの餘裕全く無

く專ら撫順炭を以て賄はなければならない現狀であつた。

然し乍ら冬季需要旺盛期に於ては撫順炭すら供給難を來すべく豫想され、斯くて滿鐵商事部に於ては工業用としての撫順炭の供給を絶つこと絶對なからしむる樣、家事採煖用としての撫順炭の供給を加減し、其の代用として專ら煙炭、煉炭の使用を奬勵し、以てこの未曾有の石炭饑饉を切拔ける方針である。尙特記すべきは石炭及び鐵材一切の消費統制を行ふ現地から昨年十月滿鐵會社商事部から切離して日滿商事株式會社が獨立したことである。

一日滿商事株式會社は前述の通り滿鐵から獨立して、資本金一千萬圓(拂込六百萬圓)の特殊會社となり、右の配給統制を行ふ上にも十分の研究を行ひ、適切妥當な方法を採る事と思はれ、殊に其の扱ひ品が石炭鐵材の如き重要產業統制法に第一次的に含まれるものである以上、滿洲國當局と協力して大局的から之を行ふべきは當然であらう。勿論之が完璧を期するには、日本內地の同業者方面とも密接な協調を採らるべきであらうが、此の點も漸く軌道に乘りつゝあるやうに見受けられる。

從て之は從來の滿鐵商事部の行へる營業政策を更に强化し延いて日滿間の供給上のフリクションを除き、滿洲全體の消費配給を行ふのであるから、石炭の需給上にも劃期的の効果を見る事になつた譯である。

(1)、工業用としての撫順炭

各種工業の發達により石炭の需要は益々增加する傾向にあるが、工業用としては先づ製鋼用として特殊の用途に使用される本溪湖炭を除いては撫順炭に匹敵するものなく、殊に奉天の如く指呼の間に撫順を望み、石炭の供給も潤澤で且つ價格も低廉である都市に於ては、撫順炭に優るものは絶對にない。

原動力用としての石炭は常に火力を同一熱度に置かしむることが最も重要なことであり之れには常に同一性質の石炭を多量に貯藏して置かねばならない。多量の石炭を貯藏するには價格をも考慮せねばならないから、以上の諸點より考察してストックが常時豐富であり價格の低廉な撫順炭が最も能率的である。

茲に工業家の注意を喚起して置きたいのは撫順炭のみにてもその品質、形の大小により

多數の炭種に區別され種段も四、五圓程度より八、九圓程度迄となつてゐるのであるからして、石炭を購入するに當つては須く品質、價格等充分研究されたる上、如何なる石炭が最も適當であり且つ採算上有利であるかと云ふ點をよく吟味し、誤りなき慎重に選擇されて度い事である。

(2)、奉天市場に於ける消費量

玆に奉天に於ける過去の總需要量に付昭和四年以來の實績を示せば次の如くである。

	日滿商會分	滿鐵奉天營業所分	それ以外のもの	合計
昭和四年度		四七三、〇〇〇噸	二六九、〇〇〇噸	七四二、〇〇〇噸
五年度		三九二、〇〇〇噸	五八七、〇〇〇噸	九七九、〇〇〇噸
六年度		三〇四、〇〇〇噸	二五九、〇〇〇噸	五六三、〇〇〇噸
七年度		五四二、〇〇〇噸	二〇九、〇〇〇噸	七五一、〇〇〇噸
八年度		六八六、〇〇〇噸	二六八、〇〇〇噸	九五四、〇〇〇噸
九年度		七二二、〇〇〇噸	二二五、〇〇〇噸	九四六、〇〇〇噸
十年度		八五六、〇〇〇噸	一四〇、〇〇〇噸	九九六、〇〇〇噸
十一年度	六三九、〇三八噸（十月以降のみ）七	二九七、三四八、〇二二噸	三三、二三四、〇〇〇噸	九六九、六二〇、〇九〇噸

(3)、用途別

昭和四年以來滿鐵奉天營業所に於て取扱つた石炭を用途別に示せば次の如くである

用途別	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
諸工業	一二五、四八六、四〇	二二二、一八四、七〇	二七四、一〇一、四五	二九三、九八一、二
鐵道	一三三、二八九、〇〇	一二九、二三六、〇〇	一一一、八二二、〇〇	九二、六一五、〇〇
電氣	二二、八一六、〇〇	三五、二一〇、〇〇	三七、四六五、〇〇	二三、一一一、〇〇
瓦斯	六、〇〇五、〇〇	七、四三〇、〇〇	一〇、一五二、〇〇	一一、八七〇、〇〇
家事	一九七、四〇一、三〇	二三七、六七六、三〇	二五一、〇七六、五〇	三七〇、八三三、六八
官衙	五六、三一五、二〇	五三、九四七、三〇	三六、五四四、五〇	六三、八〇五、五〇
合計	五四一、三一二、九〇	六八五、六八四、三〇	七二一、一九二、六〇	八五六、二二二、三〇

昭和十一年度は諸工業を二十二種に分ち次の通り示した

(A)諸工業

鉄鋼	二、二五五、六六噸
機械器具製造（武器を含む）	八六、六三二、八三噸

(ア)
繊維　三五、二〇一
雑貨　一、三〇、〇〇〇
計　一、六三、五〇〇

(イ)
繊維　一、一、六三、七五
雑貨　一、九一、五四
計　三四、五七一、五八

(ウ)
繊維　一〇、五六三、五二
雑貨　二二、一一一、〇〇
計　六九、五〇〇、八二

(エ)
繊維　二八、七三、九六
雑貨　四二、八一、〇〇
計　七、二、一九、五〇

(オ)
繊維　六三、一一、九
雑貨　四〇、八三、三五
計　一〇、九一、三、五〇

(カ)
繊維　四〇、四〇、〇〇
雑貨　七四、一〇、〇〇
計　一、五二、四五、四一

(キ)
繊維　一、一、三八、〇〇
雑貨　三二、一、三、五六
計　一、六〇、二、五〇〇

(ク)
繊維　日本
雑貨　清酒
計　石炭
繊維　灰
雑貨　瓦
計　紡績
雑貨　絹
計

(ケ)
繊維　一、九一、三、五〇
雑貨　四二、八一、〇〇
計　二八、七三、九六

(コ)
繊維　六三、一一、九
雑貨　六九、五〇〇、八二
計　二二、一一、六三、五二

(サ)
繊維　一、一、六三、七五
雑貨　一、九一、五四
計　三四、五七一、五八

(シ)
繊維　一〇、一七三、九〇
雑貨　一八、八九、六〇、三
計　一、三九、八二、七四

(ス)
繊維　四、六二、〇、三
雑貨　一、三九、八二、七四
計　八、九二、七七

(セ)
繊維　五四、五〇
雑貨　五〇、〇〇
計　三四、五七一、五八

明治三十九年、日本は戦後経営と称して、内外共に多事多難の時代であつた。

戦後、日露戦争は、日本の国運に大いに影響を与へた。

戦後、……外債募集の……

戦後、……米国資本家の……

戦後、……

戦後、……

戦後、

(B)本溪湖炭　切込　八圓八〇錢　洗粉　一〇圓一〇錢　小塊　一二圓〇五錢　洗粉　九圓六〇錢

(C)煙台炭　切込　六圓三〇錢　粉炭　五圓八〇錢　煉炭　八圓六〇錢

(D)牛心台炭　一號粉　七圓四五錢　二號粉　七圓一五錢

(E)八道壕炭　切込　五圓六〇錢

(F)阜新炭　切込　七圓一五錢　塊炭　八圓六五錢　粉炭　五圓六五錢

總鈷貯炭場は奉天中央貯炭場の三拾錢高、落陽貯炭場は奉天中央貯炭場の五拾錢高也（但し撫順炭に限る）

右公定値段也

(5)、日滿商事の販賣法要項

(A)指定販賣―一定の販賣人を指定して、とれを經由して一般市場に販賣す

(B)直接販賣―一回三〇瓲以上年額三〇〇瓲以上の直接需要者にして直接購入を希望する場合は現金にて販賣す

但し(イ)、共同販賣は認めず

(ロ)、右取引に對する相當額の保證金の差入れある場合は後拂ひにても販賣す

(C)割引條件―直接需要者にして年額一、〇〇〇瓲以上の購入者に對し一定額の割引をなす

四、水

一、奉天の水質に就て

從來工業に於ける一の不可缺要素たる「水」は奉天附近に於てカルシウム、マグネシウム、クロール等を多量に含み、水道鐵管やボイラー等を腐蝕する事甚だしく飲料水としては勿論、一航工業用としても極めて不適當なりと指摘され或一部よりは奉天市將來發展の基礎を工業に置くべしとする主張の如き甚だしき暴論なりと論斷されるに至つたが、昭和七年夏、企劃された奉天大都市計畫に依り、鐵道西部一帶が工業地帶として決定されるに及び、當局は遠藤隆次理學博士並に外山四郎理學士等の滿洲地質學界の權威者をもつて奉天附近特に鐵西區に於て工場用水の發見に當らしめた結果、遂に「鐵西地帶に於ても地下

百米突内外を掘進せる部分より地下水を採取するならば、硬度低き工場用水を採取し得る」と云ふ結論に到達し、こゝにはじめて奉天發展の基礎を工業に求むると云ふ主張が保證され確約されるに至つた。すなはち、兩氏は奉天の地形並に地質に就いて研究を進めた結果、附屬地商埠地及び城内を包含する所謂大奉天の基盤は、渾河の沖積層によつて構成せられ、其の高低は附屬地の中心より城内の中心に結ぶ一線を最高地として、その線より南及び北に向つて次第に低くなる傾向をもち、他方また全體として大奉天市街は、西方より東方に至るに從ひ漸進的に地形は高くなると云ふ事を明らかにすると共に、大奉天附近の地下水は主として渾河及び其の支流と見做される新開河の潛流であつて、水量豐富、動水傾斜の方向は東方から西方に向つて流れ、地質は地下百三十米突以上を掘進するも僅少の礫を伴ふ砂層に依つて構成せられ、僅かにその間一米突乃至數米突の粘土が數層介在するに止り、而も沖積層中の砂礫は主として渾河の流域に分布する花崗石から導かれた石英粒で、此の石英粒層は自然的濾化裝置となつて地下水を濾化するために奉天の地下水は衛生的見地よりするも適可なりと確認するに至り、試驗の結果もまた滿洲で最良の水と稱せられる大連機關區井水に比し些かの遜色もない事が判明した。奉天附近八ヶ所の井水、滿鐵大連機關區、蘇家屯驛給水所及び撫順大官屯給水所の井水分析表を比較して見ると、硬度は城内中心部を最高として、之より離れるに從ひ低く、一般には西南部が高く東北部は低い、更に鹽素量は城内中心部に最多で之より離れるに從ひ漸減する傾向にある。以上述べた諸點より觀察すれば水に關する限りに於て工業地奉天の將來は實に多望といふべきである。

以下奉天に於ける水質分析を示せば次の如くである。

A、附屬地水道水分析表（一立の水を分析せるもの）

水温	八度	硫酸	四〇、〇以下
色度	無色	亞硝酸	不檢出
濁度	透明	アンモニヤ	不檢出
臭味	なし	過マンガン酸カリウム消費量	〇、三二六
反應	弱アルカリ性		
鹽素	五四、五〇	蒸發殘渣	三、四二

B、滋西地帯鑿井水分析表（一立の水九分析せるもの）（昭和九年八月調）

イ、清洲製造株式會社

調色	水
臭	温度
反	十二
味	無
濁	色
度	度
透	明
明	度
少量浮遊沈澱	無色
明	度
反	十二
味	無
臭	色
調	度
温	度

ロ、清洲食塩株式會社海岡

調色	水
臭	温度
反	十二
味	無
濁	色
度	度
透	明
明	度
少量浮遊沈澱	無色
明	度
反	十二
味	無
臭	色
調	度
温	度

硬度	二、一六〇mg
反	弱アルカリ性
味	無
臭	無
調	色
度	明
透	明
明	度
少量浮遊沈澱	無色
明	度
反	十二
味	無
臭	色
調	度
温	度

硬度	五〇、〇以下
硬度	四、五三
硬度	一九八

備考　蒸発法は水一リットル中に含有するミリグラム数、鹿頭素指数は水一立方センチメートル中の素指数

ハ、清洲製造株式會社

臭	味
反	浮遊アルカリ性
濁	透明
調	色
色	無
水	十
温	度
硬	五、〇〇〇mg
硬	五、六〇〇mg
硬	〇、三一六mg

C、城内及西浜地水源分析表

臭	味
反	浮遊アルカリ性
濁	透明
調	色
色	無
水	十
温	度
硬	五、〇〇〇mg
硬	五、〇六〇mg
硬	〇、三一六mg

1 井戸の深さ	小河治水源地	小河治水源地	小河治水源地
2 井戸の種類	鑿井 (No.34) 上層	鑿井 (No.3) 中層	鑿井 (No.3) 下層
3 井戸の場所	15.16m	27.8m	27m

硬度	五〇、〇〇〇mg
硬度	五、六〇〇mg
硬度	〇、三一六mg

17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	18	19	20	21	22	23	24				
亞	アンモニア	臭	味	反	濁	色	水	氣	天	井戸掘	井戸の深さ（m）	井戸用途	井戸の周囲狀況	硝	カメレン消費量	硬	度	蒸	發	殘	渣	大	腸	菌
硝	亞硝酸アンモニア				酸度		溫度（C°）		溫	宮前寫時				酸		硬	度	蒸	發	殘	渣	腸	菌	群
(−)	(−)	(−)	(−)	堪アルカリ性	0°	−°	10.4°C	22.0°C	晴	14/5 一九三四	1.5m（中程し上蓋より）	飲用	堪れ北周囲おと井戸蓋り所と道伸に手伸縮五坪百巻て清米て產蓋貰	(+)	1.90 mg	22.0 mg	33°	1.78 mg	0	0				飲用ニ適ス
(−)	(−)	(−)	(−)	堪アルカリ性	0°	−°	10.4°C	22.0°C	晴	14/5 一九三四	1.5m	飲用		(+)	1.37 mg	22.0 mg	32°	1.52 mg	0	0				同上
(−)	(−)	(−)	(−)	堪アルカリ性	−°	2°	10.2°C		晴	14/5 一九三四		飲用		(+)	2.30 mg	14.5 mg	32°	1.50 mg	0	0				同上
(−)	(−)	(−)	(−)	堪アルカリ性	0°	−°	10.2°C	28°C	晴	14/5 一九三四		飲用		Schwach Positiv (+)	1.36 mg	21.0 mg	32°	1.50 mg	0	0				同上

從て今後設置するべき各種工業使用水の採取は

（イ）奉城内附近の十五米内外の深さを有する井水と百米内外の深さを有する井水との前掲表に示すが如き顯著なる對照を參考とし、深さ百米内外の井水を以てすれば、當に工場用のみならず、飲料水として甚だ快適で、滿洲で最も良好なりと指稱される大連機關區蘇家屯給水所のそれに優るとも劣るものでない。

（ロ）奉天城内外にある百米附近の深所から汲み出す水は、P・H が七以上で、含有され

てゐる。酸素、無水硫酸、石灰、苦土等が少く、硬度が小で工場用水として最適である。

（ハ）奉天城内外の深淺兩井水の對比研究と、大奉天市街地附近動水傾斜の方向を考察するとき、現在の奉天驛附近、又は鐵西に於ても、百十五米以上の深さを有する井戸を掘鑿し、水止めを完全にして深所の水のみ汲出す時工場用水とし又、汽鑵用水として快適なものを多量に採取し得る。

（ニ）鐵西所在滿蒙毛織會社の七米の深さを有する井水と城内方面に於ける十五米内外の深さを有する井水とを比較するとき、前者は後者より遙かに良好であるも、後者の如く比較的惡質の水は、淺處より出す地方でも、百米内外の深處よりは工業用水として決適な水を出すことを思へば、淺處よりすら比較的良好の水を出す鐵西附近に於て百米以上の深處より出る地下水が工業用水として決適な事は容易に想像し得る等の理由と、更に奉天市街地動水傾斜の方面とより皇姑屯附近、鐵西および南方攬軍屯、いづれの方面よりするも豐富容易であると思はれる。

二、水道料金

奉天に於ける上水道は附屬地は滿鐵會社の經營にかゝり、城内及商埠地方面は奉天市公署の經營に依るものにして其の水道料は示す如くである。

イ、滿鐵附屬地料金

種別	料金	單位	最小限度
湯屋營業	金六錢	一立方米一ヶ月	百立方米
噴水、瀧、泉、池、庭園其他娯樂用	金三十錢	同	二十立方米
工業用	金十五錢	同	二十立方米
船舶工事氷滑其他一時使用に供するもの	金二十錢	同	船舶工事其他十立方米五立方米
其他のもの普通炊事用	金十錢	同	六立方米

ロ、奉天市公署水道料金

（イ）給水料金

種別	單位	料金
湯屋營業	六〇立方米迄一立方米を增す毎に	國幣六、〇〇〇同〇、〇八〇
前號以外のもの（防火用を除く）	八立方米迄一立方米を增す毎に	同一、二〇〇同〇、一二〇

私設消火栓　演習の爲め使用したる場合一栓に付一分毎に　同　三、〇〇〇

（ロ）手數料

量水器試驗手數料

一個一回に付　二〇粍以下　三、〇〇　七五粍未滿　五、〇〇

七五粍以上　一〇、〇〇

給水工事新設增設々計手數料

一線又は水栓　一個に付　國幣　二、〇〇〇

一栓を增す毎に　同　〇、五〇〇

（但し設計前に於て之を徵收す）

水道料金は公共用其他特殊の事情にあるものは割引されてゐるが普通料金は使用の多少に依り割引する事なく一律に一立方米單位で計算してゐる。而して奉天に於ける工業用水道料金は日本の大都市に比較すると（東京九錢三厘、大阪八錢八厘、名古屋六錢一厘、京都五錢五厘）相當高價であるが現狀では止むを得ない。

五、工業資源

奉天を中心とする各地方に如何なる工業原料を生產するか、先づ工業原動力たる石炭に就ては前章に於て屢々述べた如く撫順、煙台、本溪湖等の炭田を附近に據へ最も有利な立場にある。此項に於ては製品原料に就いて述べよう。

奉天は奉山、奉吉、滿鐵本線、安奉線集中し、各沿線は農產物の主要產地であり、これ等の農產物を原料とする工業は必然的に奉天に發展性を持つものであると思はれる。

一、農產物

（イ）大豆、奉天省に於ける大豆の主要產地は遼陽、海城、開原、復、莊河、東豐、西豐、西安、柳河、昌圖、懷德、梨樹の諸縣であり、主なる品種は黃豆の部では金元豆、白花子、奉天は白眉、四粒黃、四平街白花、小黑腈等で青豆の部では奉天青皮、大粒青、鐵莢青豆があり、黑色大豆では公主嶺丸形黑實、黑皮、青央、鐵莢豆子等がある。

（ロ）高粱、大豆に次ぐ主要農產品であり、奉天は作付收量に於て全滿の過半數を占めて居る。主要產地は遼陽、奉天、大石橋、新京、公主嶺、開原、四平街、鐵嶺等であり、高粱は工業用として燒酒製造に供されて來たが、將來は釀造原料として用ひられるであらう。

（ハ）粟、奉天附近に於ける粟の主要產地は瀋陽、遼陽、東豐、昌圖、懷德の五縣である。

粟は農民の食料となる外、黄酒の酒造原料にもなる。之に糯と粳とがあり、白色、粒、黄色粒、紅色粒、黒色粒の四種があつて黄色粒が大部分を占めて居る。

（ニ）玉蜀黍、玉蜀黍も奉天省は全滿の五割九分餘産し高粱、粟に次ぐ主要な食料品である。亦製粉され、酒の原料となる。玉蜀黍は比較的其の栽培が極限され北滿や南滿の北部に少く、南滿の熊岳城以南地方、安奉線の南部及東豐、西豐、西安の諸縣地方に多い。

（ホ）煙草、在來種は品質劣惡であるが從來滿鐵が奬勵策を講じ、本年より産業計畫第二年度に入り種々の增産が講ぜられて居るので、最近はアメリカ種黄色煙草が多く、品質良好、鳳凰城を中心とし瓦房店一帶にも栽培し十、五六萬貫を産出し奉天省で百五十萬貫を産して居る。

（ヘ）青麻、低濕の地に好適にして奉天省の遼陽、錦州、牛莊の諸地方を各産地として居る。纖維は輸入黄麻と混合して麻袋の原料となる。草丈は七八尺より一丈に及ぶものもある。

（ト）荏、最も乾性の油を搾取する作物で到る處小面積に栽培されて居るが、奉天以北に殊に多くこの植物より取つた油は藥用、塗料工業用、燈用に用ひて居る。

（チ）大麻子、主要産地は遼源、通遼、洮南、彰武の地方である。種實よりは工業用に供せられる大麻子油を搾取する。

（リ）棉花、由來南滿洲南部一帶の地は氣象より觀て棉花栽培には好適地で遼陽を中心として昔から數萬町歩に至る棉花栽培の行はれて居る事實があり、將に進展せんとする滿蒙に於ける産業上重要なる問題である。月下棉花は遼陽以南滿沿線一帶を生産地とし奉山線、錦、錦西、北鎮、義、黒山の諸縣に普及されるに至つた。

二、畜　産　業

滿洲の農家で牛、馬、驢等の役畜を少くとも三、四頭有しないものはなく豚、鷄は副業として其の用途は頗る多く、亦最近は養兎事業の有望なるを唱道されて居る。毛皮の取引市場として有名な洮南は札薩克圖、圖什業圖、札來特、東烏珠穆泌の東蒙主要産地を背後に據へ、各種毛皮類の中心集散市場となつて居る。而してこれ等の商品は四洮線により奉天へ輸送されて居る。

滿洲に於ける皮革は滿洲アブのため其の表面に小さな穴を生し不良なるも將來は改良されるであらう。

三、鑛　業

石炭三十億瓲、金三百五十萬瓲の埋藏量を有すると云ふ滿蒙は、滿洲國の建國によつて鑛山熱旺盛時代を出現せんとして居る

滿蒙が我國の生命線たる以上この豐富にして多種なる鑛產に對し犧牲を拂ひ努力を以て開發すべきであるが前途蓋し多忙であらう。

鑛業資源としては石炭を始めとして砂金、金鑛、鐵鑛、硫化鐵鑛、鉛鑛、銅鑛、マンガン鑛、コークス、油母頁岩、原油、マグネサイト、耐火粘土、滑石、石灰石、石綿、大理石、硅石、長石、方解石等である。石炭に付ては屢々述べた處であるから此處にては略す

(イ) 金鑛、鑛產中急激に世人が注目して居るのは金及砂金である。產地は主として北滿殊に松花江流域であるが、滿洲は大小に拘らず到る處に產出される。全體として埋藏量三百五十萬瓲と推定されて居るが、奉天省の鑛區として知られて居るものに鐵嶺の更柴何堡があり、更に鴨綠江上流の寬甸縣は太古より著名な金鑛地帶で、同鑛脈は鴨綠江を越えて對岸朝鮮の昌城に及び東邊道地帶中最も有力な金鑛地帶と云はるるも、奉天への搬出は交通上不便多く有利でない。

(ロ) 鐵鑛、滿洲の鐵鑛は各種鑛產中重要なものの一つで產地は遼陽縣鞍山、弓張嶺一帶本溪縣廟兒溝を始めとし鴨綠江東北部沿岸、安奉線並に關東州に散在し埋藏量は大體本溪湖七千四百二十七萬三千瓲、鞍山四億一千三百七十四萬瓲であると云ふ。世界の埋藏量は各國何れも十億瓲以上我國は朝鮮を合せて漸く五千八百萬瓲、今後十ヶ年も立ては文字通寸鐵も帶びないと云ふ心細い狀態である。此の時滿洲の鐵鑛は日本にとり重要なる資源である尙錦西附近にも含有七〇%の含鐵量を有する。

(ハ) 銅鑛、奉天省の盤嶺が鑛石を出すのみである。

(ニ) 鉛鑛、鑛脈、鑛塊として地上に露出して居るもの多く十數ヶ所に及ぶ奉天省靑城子から年千五百瓲を產して居る。

(ホ) 菱苦土鑛、利用の範圍極めて廣く其の鑛量と品質を以てせば將來滿洲に於ける大工

業の一となる可しと云はれ鑛床の雄大なる點に於て世界に比類ないものであり主なる產地は官馬山（大石橋驛の東約五粁）牛心山（大平山驛の北東約二粁）白虎山（大石橋驛の東北約八粁）滑石嶺（大石橋驛の南東約二〇粁）麻峪（大石橋驛の東南約二四粁）で厚さ二米乃至二百米の厚層をなして存在し其の埋藏量は平地以上の分のみでも數億瓲を下ることなく實在數量に至つては多量に達するであらう、其の利用方法はリクノイド、金屬マグネシューム、炭酸マグネシューム、硫酸マグネシューム、輕燒マグネサイド、白色苛性マグネシア等である。

（ヘ）滑石、滿洲產滑石は日本內地消費量の殆んど全部を供給する點に於て滿洲礦產物中重要な一つである、滑石の用途は白粉の原料に用ひられて居るが各種工業の發達に連れてこれの利用の途が研究され重要な工業原料礦物の一つである、主なる產地は聖水寺（大石橋の東方十二粁）大嶺（分水驛の東方十二粁）宗家堡子（海城驛の東方二十一粁）孑峪（海城驛の南方山道二十三粁）麻峪（海城の東方二十八粁）馬家堡子、揚家甸子（共に海城の東南約二十六粁）で其の用途は製紙、製糸、織物各工業用、化粧用、ゴム工業用である

（ト）油母頁岩、產地は撫順、炭層の全表面を蔽ひ東西十一里南北十一里この埋藏量五十三億瓲と稱せらる。

（チ）天然曹達、南滿には大してないが蒙古方面には相當あり、交通の發達に伴ひ有望な運命を持つて居る。

（リ）耐火粘土、滿洲に於ける耐火粘土は二疊石炭紀夾炭層の一部をなし一般に石炭の直下に於て發掘されて居る。卽ち煙台炭鑛、復縣五湖嘴炭坑に產し、品質は內地產に比して遙かに優良且其の埋藏量も莫大である。

（ヌ）苦灰石、苦灰石の分界は可成廣範圍に亘つて居る關東州及奉天省海城、蓋平兩縣下に產出し、現在に於ては原鑛のまま八幡製鐵所を始め內地各工場に輸出せられ將來有望視されて居る。

（ル）石灰石、關東州のみでも極めて廣區域に發達し、採掘が容易なので盛に採掘され土木建築小野田セメントの原料に用ひられ安奉線火連寨、本溪湖のものは鞍山、本溪湖製鐵の原料に使用され、安奉線通遠堡產は安東に搬出され製紙原料に供せられて居るが石

灰製造、窯業原料として消費される數量は尠くない。

尙之に關聯して滿洲國の產業五ヶ年計畫にして上地資源の增產も考えられてゐるが之が詳細は不明であるが大體の所は總論の產業改策の處で觸れて置いたから此處では省略する

六、交　通

交通の便否は生產工業に對し極めて重大なる關係を有することは說明を要しない所で、原料の蒐集と生產品の販路に重大なる役割を演ずるもので、水陸運輸の何れかを持たぬ地帶に大工業都市の實現は絕對不可能なことである。言ふまでもなく奉天は鐵道四通八達の要點にあり、南は大連、營口、安東の各港を扼して船便に聯絡し、鐵路安東を經て朝鮮全土內地間と通じ、又數時間にして大連に達し此處を起點として日本及各國間と通じる各汽船會社の定期航路と連絡し、西は奉山線を以て山海關より天津、北平、北支那に至り、東は奉吉線によりて吉林及北鮮と通じ鐵道沿線の廣大なる背後地を控へ又これより吉敦、吉海、圖門各線と結び奧地產業開發に資し、北は滿鐵本線により新京に達し、こゝより京濱線と結び遠く北鐵線に合して露領シベリヤを經由して歐米に通じてゐる。尙朝鮮の吉州より合水を經て國境惠山鎭に向ふ新線が、滿洲國長白に渡り鴨綠江に沿ひて臨江に向ひ、やがて通化を經て奉吉線營盤に出る計畫線が實現の曉には、吉州より奉天を經て熱河の承德を一目に見るとき、北緯四十一度線より四十二度線を弓狀を描き奉天はその中心を爲す。この場合奉天と裏日本の交通も至便になり、奉天は滿洲國南北交通の中心點と、安奉線奉山線を經由する朝鮮並に北支に通ずる東西線の中心たると共に、上記新線の實現は他の重要線路に比し遲るゝ事あるとも將來に於て實現可能のものにて、既に朝鮮側に於ては着々工事を進めて居り、滿洲側に於ても舊奉天省の資庫と言はれた東邊道の資源開發の爲めと現に尙最も困難とせられてゐる同地方治安工作のため必要なことであるので、同新線の早晩實現は疑はれない所である。殊に最近滿洲國產業五ヶ年計畫事業の一として通化を中心とする、東邊道一帶の資源開發を目的とし一大重工業地帶の建設を目論み目下着々進行せしめられて居り、本線の開通と相俟つて奉天の背後經濟範圍を擴大する事にする。只惜むらくは水運のないことで、これに影響される工業も尠くないであらうが、奉天商工會議所に於ては早くもこの點に着目し、運河開鑿計畫を提唱し、既に今日では最早その必要性

は充分各方面より認められ、實現は唯時日の問題として殘れるに至つた。而して當所の提唱する運河計畫は次に示す通りで、これが實現の曉には滿洲に於ける工業家の裨益するところ尠くないであらう。

撫順營口間の運河開鑿

奉天商工會議所では、昭和九年九月十二日議員會の決議により「滿洲の經濟開發の爲め各地に廣く運河を開鑿することを要路に建議するの件」を十月六日新京で開催せられた全滿商議聯合會に提案し、大多數出席代表者の贊成支持を得て可決せられ、此の重要な經濟時事問題に付て第一矢を放つた。しかし此問題は我奉天商議としては今に始つた問題でない昭和八年八月廿六日附で要路に提出した「奉天の興業振興策に付建議」の中に「奉天を工業地たらしむるには舟運の便を要する」ことを建議し、工業地としては鐵道、水運の兩者に依存するに於て始めてその眞價を發揮し得べし、然るに現狀の如く單に鐵道運輸の外なきに於ては生產原價の低廉を期すること至難に屬すとて、舟運の重要なることを力說したのに始り、九年六月廿八日に「舟運に關する再建議」として更に運河開鑿の即時斷行を懇請した續いて我奉天に關係する地域の運河開鑿が技術的、經濟的兩方面に於て事實可能なりや否やに付て愼重に調査中であるが、實行可能でしかも極めて有望なことであることの確信を得て、玆に全滿商議聯合會の機會に第一聲を擧げた次第である。幸ひにも全滿商議の力强き決議を得たので愈々其實行促進に努力することになつた。

滿洲各地では運河開鑿の必要なることは夙に呼ばれて居り、採算可能のある地方が尠くく、漸次其氣運に向ひつゝあるを認められるが、中にも最も可能性があり亦必要に迫らなれて居るものは我奉天に重大な關係のある撫順、營口間の運河である。

撫順、營口間の運河に付ては撫順炭礦、鞍山製鐵所、滿洲國交通部及國道局、滿洲經濟調査會、滿洲電業公司等に於て調査を進められて居ると聞くが、最も信據し得る一說を述べて參考に供する。

撫順より渾河に沿ひ（舊河川は排水に利用し運河は別に開鑿す）奉天を經て遼河本流營口上流九十キロの地點に到る距離約六十キロで、落差は撫順營口間六十四米、營口奉天四十二米九（參考琵琶湖大阪灣八十五米、ハルビン百四十七米、鄭家屯百十五米）で營盤の

上流山峽に二、二七方里の大ダムを築造して水源地とし、增水減水時の調節を計り四米半の水閘十五箇所を設け（參考獨逸ホーヘンツォルレン運河はエレベーターを以て壹千噸の船を四十米近く上下せしめて居る）五百噸のライターを運航せしむるには深さ二米半、巾水底二十米、米水面三十米、用地巾六十米を要す、此の運河は前にも述べた通過運河に非ずして輸送運河であるから必ずしも大汽船を通ずるの必要がない、而して一ヶ年の中八ヶ月の運航が可能である。（營口結氷平均十二月四日解氷平均三月十九日）ライター二隻を百噸の汽船を以て曳航する程度の設備とし、水源地、土工費、護岸費、水閘費、船溜費、其他一切の設備と船舶費を合して僅に三千萬圓で可能であると云ふ確實な計算が出來上つてゐて、工事凡そ五ヶ年を要すと謂ふ。輸送貨物は撫順の石炭を主として鞍山の製鐵及鐵鑛原料品、奉天附近の特產物に營口の製鹽輸入雜貨を合すれば四百萬噸以上は容易で運賃は現在の四分の一としても壹割五分以上の利益は確實であると謂はれて居る。

此の他にダム利用の水力發電、沿線の水田開發、治水策、非常時輸送路の安全性と輸送量の伸縮性、海運との連絡の利便、工事に依るインフレーション政策等副產的利益は數へ切れない程あるが、特に上海方面のクリークの例に依ると、軍事上地方防禦の上に偉大な効力があるのみならず、治安工作の上には地域を劃するに非常に有力である。其他軍事上より特に緊要な施設であると聽いて居る。以上の見地から滿洲國並に指道方面では特に撫順、營口間運河は滿洲國開發に必要なる施設として單に經濟調査と云ふ意味で無く、可及的早く實現さし度き意圖を以て其調査を進めて居られると確聞した。斯くて當會議所が夙に冀望して居る新交通路が意外に早く開かれるのではなかろうかと思はるのであつて、奉天に汽船の煙の上るのは決して夢の樣な事ではない。

他に水力電氣を基礎とした鐵嶺―營口間主として山地附近通過の三千噸の汽船を運航せしめ得る運河の新計畫も別に發表されて居り、以上兩說は技術的の問題で玆に其の可否を論ずることは避け度いが、運河必要論は之れにより一層熾烈になつたことは事實である。

斯くて奉天は現在並に將來共滿洲第一の交通の要路たることは疑を入れない。

尙工業條件としては上述の外、內國稅、外國關稅、氣候、金融等が考慮さるべきであらうが、是は寧ろ金融編、商業編、觀光編にて詳述する事であるから此處では省略する事に

する。只內國稅に付いては當會議所で、昭和十一年七月發行の滿鐵附屬地に於ける諸稅令（奉天經濟調査彙集第十六輯）同じく十年十一月發行の「滿洲國營業稅關係法規及び滿洲國地方稅關係法規」（同彙集第十二輯）及び同じく十一年十月發行の「營業稅座談會質疑應答要錄」（同彙集第十八輯）を參照されたく、外國關稅に付いては同じく九年十二月發行の「滿洲國現行輸出入關稅々率表」（同彙集第三輯）を參照され度い。

三、奉天に於ける諸工業

以上を以て總論及び奉天の工業條件を終り、次に奉天に於ける諸工業を金屬機械器具工業（車輛工業を含む）窯業、紡織工業、化學工業、釀造業、食料品工業、煙草工業及び雜工業の順を逐つて述べやう。斷つて置くが以下大體全ての主要工場を紹介した積りであるが其の內容說明に精粗の嫌あり或は調査洩れもあるかも知れないが編輯を急いだ都合上此の程度に止めた次第である。

一、金屬機械器具工業（車輛工業を含む）

奉天に於ける斯の種工場は現在調査し得る範圍內だけで三八工場あるが此の投資額は約二千九百萬圓、生產額（昨年度）二千二百萬圓（滿洲航空工廠の分を除く）であつて總工業投資額の二割九分餘、同生產額は同じく二割二分六厘を占め當奉天工業中斷然たる最優位を占めてゐる。是に後述する新設計畫中の工場乃至工場建設後未操業のものを合算すればの其旺盛振りは割目に價する。次に各種工場の內容一般を紹介しやう。

一、金屬工業

奉天に於ける金屬工業工場の主要なるものに就て紹介すると次の通りである。

大連機械製作所奉天工場

一、所在地　支店奉天西塔大街三丁目　本店大連市台山町二三番地
二、資本金　貳百萬圓
三、社長　高田友吉
四、創立年月　大正七年五月
五、工場沿革　同工場は鑄鐵管製作專門工場にて大正七年五月創設せられ、爾來終始一貫製作專門に從事し、之が幾多の試練期を經過し常に技術の研究と施設改善に努力し、近時各種工業の

促進に進れ本業者間の協業的合理化の見地より協同組織的性格大に傾きの低廉なる資材等の必要を生はるるも、圓滑では眞に本業の指導之に成功し一般の好成績を挙げるる。

尚同社の原料は全滿洲産にして鋼鉄、薬品に及び其の内地品と競爭新就し、全滿洲産下現設備等の大半を供給してゐる。

六、生産種目　真鍮機械部品、附屬就測器類一式（水道、瓦斯用）　鋼木鋲（桁、火柱等鋲類一式）
其他各種機械製品一式

七、工場一ヶ年製産高　三、〇〇〇瓩

八、工場從業員　一五〇名

九、工場敷地　四、〇〇〇坪

合資會社滿洲工作所

一、所在地　本社鞍西工業地區　分工場　吟浦鎮　出張所　四平街、錦縣

二、代表者　弓場幸太郎　工場長小谷安之助

三、創立　昭和九年四月

四、設資額　五十萬圓

五、生産種目　工作機械器具及び其他機械器具類、鑄物、鍛造、鍛柱、流孔管、鋳造、鋳造機部分品、鋳物以外の金屬製品

六、年産出高　約九十八萬圓（昨年度）

七、職工　日滿人二五八名

八、工場沿革　昭和七年奉天市に工場設立し、同九年新に鞍西工業地に新築し、同時に吟浦鎮に分工場を設立した。因に工場敷地面積三、〇〇〇平方米である。

滿洲機械股份有限公司

一、所在　奉天西區北三條四十番地

二、本支店　右と同じ、但し必要に應じ内外主要の地に支店を置く

三、資本金　參百萬圓

四、代表者　重本貞三　重工業株式會社常務取締役　仲藤重三　本社重本　寺山清二

五、事業種目　イ、汽罐、汽機、内燃機其他一般機械、製造業に關係打物其他の鑄工製品の製造、修理及賣
ロ、電氣機、電動機、變壓器其他一般電氣器具
（但計量法又は計量法に基き施せらるる命令に規定した計器を除く）の製造、修理及賣
ハ、各種機械の製造、修理及賣

二、前三項に掲げたるもの以外事業

六、一ケ年に於ける販賣金額　百五拾萬圓

七、使用人數定數　職員　二十名（三菱重工業株式會社より轉勤）

職工　日本人五十名　（右に同じ）

滿洲人二百名　合計　二百五十名

中山鋼業所

一、所在地　奉天浦三路十三番地

二、資本金　七拾萬圓

三、代表者　中山悟治

四、組織　二事業部

五、事業種目並生產品目　面取引手淺板、鐵丸釘、鉄筋鐵線、リベット、ボールトナット

六、一ケ年生產額　鐵金　二、二〇〇、〇〇〇圓

鐵丸釘　三六〇、〇〇〇

鉄筋鐵線　七〇〇、〇〇〇

鉄　一〇〇、〇〇〇

七、使用人數　職員　一四名　傭員　一一名　職工　二三五名

八、マーク　三星印、鐵線印

九、沿革　同所は大阪中山製鋼所中山悟治氏の朝鮮進出により、内鐵金工場は昭和八年九月より工事に着手し翌九年五月より作業を、鉄筋工場は九年十月より工事に着手し翌十年二月より、釘工場も同年四月より、鉄線工場は十一年一月より、何れも開始し今日に至つてゐる。

株式會社滿洲工廠

一、本社所在地　奉天紫町十六番地

二、工場所在地　奉天大東區大東門外

三、支店所在地　大阪支店　大阪市東區伏見町弥二郎村ビル四階

四、出張所々在地　大連出張所（大連市常盤町十六番地）　撫順出張所（撫順東九條通五六番地）　新京出張所（新京大經路第一區四段三七）　哈爾賓出張所（哈爾賓外國三道街七九）　天津出張所（天津法界二一號路治安大街八號）

五、資本金　四百八十萬圓

六、代表者　取締役社長　山本虎正

	奉天紡織株式會社
七、組織	株式會社（日本法人）
八、事業種目	綿糸、綿布、綿花類、毛織物、羊毛類、綿糸類並綿織品及毛織物類、穀物、穀粉並粉類、化學、醫薬並醫療用器具類、各種機械器具、車輌及附屬品類、各種電氣機械器具並電氣工業、車輌及其附屬品類、各種機械器具、車輌及附屬品類、各種鑛物並鑛物製品、鑛山並其他工作物類、鉄道工業、鑛業工業、スチールチャンネル
九、一ヶ年生産額	参千萬圓
十、使用人數	日本人職員　二五〇名
	支人職員　一、五〇〇名

同社は滿鐵傍系滿鐵子會の所有せるものが其の後滿鐵の手に移りしものを滿鐵從業員並土地建物等滿鐵並滿鐵其の他一切を適當に所價して滿鐵子會の清算より譲入れ及其の結果、第一回株主總會を昭和九年四月に至つたもので其の後圓滿なる進捗の模全を以て順調なる發展を辿つてゐる。製品は主として綿織物、昭和紡織所、滿洲紡織、滿洲興業株式及び滿鐵等である。

同社では更に滿洲國内產業開發事業遂行の趨勢に伴ふ資産額の増強に鑑み、其の業務種目の擴張並大を必要とするに鑑て、昨年度下半期ドラム罐工場の新設に着手し、同期末之が完成を見た外、本年二月設防用ボイラー工場を實施し資本金二十萬圓を以て大清潔工場を設立した。尚同社では工場附設並に滿員寮工場との共同出資による新會社設立に關する協議を行ふため、現資本金四百八十萬圓を一千萬圓に增資し、今回の增資額五百二十萬圓の中第一回三分の一、百三十萬圓の拂込を行ふことに決定、新會社の設立に當りかゝることゝなつた。

新會社は滿洲紡織株式會社が有限會社と称し滿洲工業株式會社五千株に相當する額で、資本金は壹拾百萬圓全額拂込済みとなつてゐるが、將來の發展を豫期し五百萬圓四分の一拂込となし滿洲に於ける紡織工業生産工場として工業界に乗出すことゝなつた。將來は現行業務分離から內外經濟事情に適應する計畫を有してゐり、認可あり次第着工し今秋までに竣工の豫定である。

奉天製鋼所

一、所在地	奉天西直門四番町約壹萬坪
二、本店	同上　分工場（西安縣西安寺門屯）
三、資本額	拾參萬五千圓
四、代表者	約本佐藤
五、組織	株式組織
六、事業種目生産額目	特殊合金（青銅、黃銅、シルジン鋼青銅）特殊機械（鑄造及鍛造）機械チルド、青銅、鑄鐵
	硬鉛パルプ及パイプ類、機械及鑄山用鑄造機械工具類、機械、機械、起重機及タンク類、
	電氣及瓦斯機械其他一般機械工業

七、一ヶ年に於ける生産額　六拾萬圓
八、使用人員　百名

合名會社東鐵北工所

一、所在地　奉天西區浦三條三五番地
二、本店　大連市日吉町九番地、東和鐵工廠　出張所（新京に設立豫定）
三、資本金　八萬圓
四、代表者及業務執行代表者　代表者　盛學晴　業務執行代表者　清生正雄
七、各業務種目　（建築、土木、上下水道、瓦斯、暖房、家具用金物）鋼構造物一式、諸鐵板製造及修繕
七、一ヶ年販賣額　約十五萬圓
八、使用人數　百人
九、工場現況　工場敷地三千四百坪　工場建物　事務所及倉庫　鋳造場　仕上場　二五〇〇坪　二〇〇〇坪
十、其他　本店開業大正十年　同工場開業昭和十年

田崎鐵工所

一、所在地　奉天西區浦西條八番地
二、資本金　五萬圓
三、代表者　田崎市太郎
四、組織者　個人
五、各業務種目主生産種目　機械製造、鑄造、鍛造、汽罐、建築材料、眞空、水栓
六、生産額　四萬五千圓
七、職工　四十五名

其他金屬工場には前田鐵工所（資本十萬圓、昨年度生産六〇萬圓、代表者前田鐵市、モーターボイラー製作、昭和八年創立、本店町八）、竹山商會奉天工場（工業量一萬瓩、昭和八年六月創立、代表者竹山吉治、鑄物クナーター製作、資本三萬圓）、鐵鋼製作所（天野通二、昭和八年創立、代表者鐵鋼大鉄、鋼骨構造物設計、資本三萬圓）、滿洲鐵機公司（五條町二七、昭和八年創立、代表者坂野實、製罐、鑄金鋳力、印刷、資本六萬圓）、東洋鐵機公司（五條町四七、昭和九年創立、代表者永倉幸一、製罐、鑄金、資本五萬圓）、朱玉貴（浦西條三番、鑄鐵工場）、外數個の鑄工場がある。

其の他目下新設計畫中の工場乃至設立後未だ機業に至らざる工場を示すと次の通りである。

滿洲電線股份有限公司

一、設立年月日　康德四年三月十九日
二、資本金　五百萬圓（全額拂込）
三、出資者　古河電氣工業株式會社、株式會社住友電線製造所、鐘淵電線株式會社、株式會社日

立製作所、大日本電纜株式會社、東京製纜株式會社、日本電纜株式會社

四、役　員　名　相談役、中川末吉（古河社長）、松本留吉（藤倉社長）、重事長、鈴木元（古河電務）
專務重事、佐伯長生（住友出身）、重事、小畑忠良（住友專務）關口善吉（藤倉取
締役）　倉田主稅（日立電線部長）、長谷川繁太郎（大日社長）、崎山刀太郎（東
製社長）、西田正一（日電電務）、監査人、大橋頼松（日電取締役）西田善藏（古治
大連店長）、竹内龜次郎（日立大連所長）、

五、製造及販賣品目　各種銅線アルミニューム線、被覆電線電纜類並ニ其附屬品

六、生　產　能　力　銅線一、四〇〇萬瓩（一二、三〇〇、〇〇〇圓）ケーブル其他七、五〇〇萬瓩（二
〇、二〇〇、〇〇〇圓）

七、工場敷地面積　一三〇、七二〇平方米

八、營　業　開　始　康德五年初頭ノ豫定

九、工場所在地（工事中）　奉天西區中央路四〇番　職工三五〇名、職員六〇名、

滿洲金屬工業股份有限公司

本會社は大阪金屬工業株式會社の奉天工場として鐵西工業地區に進出する事になつたもので資本金は五十一萬圓全額拂込濟にて愛に滿洲國當局に事業認可申請中の所四月八日附を以て正式認可指令に接したので愈々近く公司設立諸準備に掛る事になつたが同公司では、鐵西工業區に敷地借受方工業土地會社に申込み同會社で書類を受理し近く契約締結の見込みである、尙製品々種は暖房、冷凍、車輛、附屬品、精密諸材料等で其の成果は注目されてゐる。

終りに奉天に於ける琺瑯工業を紹介しやう

一、琺瑯工業の沿革

日本內地に於ける琺瑯鐵器工業は昭和八年來長足の進歩を示し、現在三十有餘の工場より海外に輸出さるゝ琺瑯製品は年一千萬圓に垂んとしてゐる（昨年度）。誠に琺瑯鐵器は世界大衆生活にとり必要品であるが、之は其の製品が洗面器皿類、ポール類鍋等吾人の日常生活と緊要必須の種類のものであるは勿論堅牢優美であり價格が非常に低廉であると云ふ特徵を有つてゐるが爲である。滿洲國も事變を契機として邦品の躍進目覺ましくその輸入額は年々一百萬圓を降らず今後益々增大の現狀にある。かゝる重要商品が一に海外よりの輸入のみに俟ち何等國內生產の重要性が顧慮されなかつたことは、些か奇異の感がするが永年の軍閥の苛斂誅求、政爭等によることは勿論、一、殆んど總ての原料を海外に仰がね

ばならぬこと、二、製品及原料の輸入關稅制度が不備不合理であつたこと、三、海關稅不統一による國內及海外よりの原料收得が極めて不利にして圓滑を欠いでゐた事等により寧ろ海外よりの輸入に俟つことが有利な事情にあつた爲めである。

昭和四年に至り小西邊門外に李西園の經營にかゝる資本金五萬圓の北寧琺瑯工廠の開業を見たが上述の如き根本的障害に禍ひされ思はしからず、事變の勃發により全くその中心を失ひ、かてゝ加へて事變後に於ける邦品流入の壓迫は遂に昭和十年に入り操業中止を餘儀なくされ當初の抱負も水泡に歸した。

昭和十年二月に至り日本鐵鋼界に雄飛してゐる大阪中山悅治氏が本來の業たる平浪板製造を鐵西工業地區に開始し着々地盤を固めたる餘勢を以つて最も困難とされた琺瑯鐵器製造の實現に着手し、年產能力七十五萬圓を以て全滿需要の過半を占めてゐる。尙本年四月末鐵西工業地區に約二千五百坪の敷地を以て滿洲琺瑯兩合公司が操業を開始するあり、飽に全滿に供給すべき確實なる根據を有するに至り、其年產三十萬圓と豫想され、滿洲琺瑯界に一波紋を投げてゐる。

二、琺瑯工業の現況

滿洲に於ける琺瑯器工業は上述の如く全く見るべきものがなかつたが中山鋼業所琺瑯部の創設により始めて呱々の聲を擧げたと言つても過言でない。同所の抱負は全滿供給の完成にあり、投下資本四十萬圓に上り、窯七基を有し從業員は現在二百五十名で、全能力を發揮して作業を續けてゐる。

同社の生產品目は洗面器を首位に、深鉢、茶瓶、鍋、石鹼入、コップ、匙、トレー、皿類外雜品で昨年度一ヶ月約十萬圓外の生產を擧げ、尙近々藥瓶、盆等の製造を開始する豫定で、目下これが準備を進めてゐる。以上の現狀よりして器物類の全滿供給の初志が略成さるゝものと期待されてゐたが、安價な邦品進出のためこれと競爭することは相當困難で同所の營業成績は大して良好とは言ひ得ない。卽ち邦品の輸入狀況を見ても昭和十年度中に滿洲國に輸入された琺瑯製品は約百十萬圓を示して居り、從つて同所の販賣も活潑でなく終始これ等邦品との競爭に脅威を受け生產過剩に惱んでゐる現狀である。

中山鋼業所及び前述滿洲琺瑯以外に琺瑯工場が二、三經營されてゐるが、その代表的の

ものとして小西關東洋琺瑯製作所がある。同工場は岡村正幸氏の經營にして昭和五年五月創設され爾來今日迄幾多の辛酸を嘗め今日の基礎を固めたもので主として看板、醫療器の製作に努めてゐるが年產額は二萬五千圓見當である。

三、輸入關稅に就て

滿洲國內の琺瑯鐵器製造工業に於ける現行關稅制度により負擔は製品稅（三十六糎を超へたるもの）の格安なること及びこれを製造するに要する原板及び多種多樣の琺瑯釉藥の原料稅の過重なる實狀より起るものにして、今日迄內地企業家の滿洲進出を計畫せるもの相當あつた樣に聞くが大概不成功に終りたることは、この負擔が到底その存在と相容れざることを物語つてゐるものである。今日折角遠大なる理想と莫大なる資本を以て中山鋼業所の出現を見又滿洲琺瑯の誕生を見たが要するに原料稅製品稅の兩者に亘り、適當なるこれが改正を行はなければ前者の轍を踏むべきことは、唯時日の問題であると思はれる。

大體昨年中の輸入高は約二十五萬圓であるが之は三十七糎物の輸入が主である。內地品の輸入關稅は、三十六糎を越えたるものは從價一〇%及附加稅五%であるが三十六糎以下のもの從量稅で此の兩者を奉天値段にて比較するにきは（昭和十一年十月調）

三十六糎物	一打	二、四二五	稅金二三錢五　諸掛二〇錢
三十七糎物	同	二、二〇	
計		二、六三五	

となり結局サイズ大にして却て格安に內地より買入れた方が有利となり、然かも此の種のものが滿洲需要の七割を占めてゐる。此の點が第三次關稅改正の要望の存する所である

當會議所に於ても一昨年來、之等業者の意向を聞き、種々其の要望を取り纏めて關係當局へ陳情してゐるのであるが、勿論關稅改正の要望と云つた所で、一、原料關稅が適宜に改正されたる場合製品關稅に對する要望、二、原料關稅が改正せられざる場合製品關稅に對する要望、三、原料關稅及び、四、調合藥品類に就ての要望がある譯であつて例へば一の場合では、當業者は直徑三十六糎を超えたる製品に就ては現行稅率の從價一〇%とあるを打當り九十四錢に引上げ方要望してゐる。尙此の詳細に付ては昨年四月當所發行の「第三次關稅改正に對する商工業者要望集錄」を參照され度い。

2、機械器具工業（車輛工業を含む）

日滿鋼材工業株式會社

一、所　在　地　本社（奉天市浪速町四八）　工場（奉天屋屋番二號一七）　撫山出張所（撫山市二條通五三）　大連出張所（大連市山縣通一八一番地ビル）　三菱工業大連支店内）　新京出張所（新京市大和通ゥ三七、三菱工業新京支店出張所内）

二、資　本　金　壹百萬圓

三、役　員　取締役社長（佐藤新作氏）　常務取締役（日野熊藏）　取締役（相馬孝三郎）　取締役（谷田千馬）　監査役（下田文一）　監査役（相馬由太郎）

四、製造種目

（一）鋼製建具　高級住宅用手洗器及鏡　工場住宅用手洗器及鏡　住宅住宅用手洗器及鏡

（二）鑄鐵工事　設計者に進行

（三）鋼製機械製作　手洗コンマキー類　ライムシャフト及用品　コンクリートミキサー及ウインチ類　手洗鏡及鏡台用品　火鑪式乘其他鋼製機械　鋼製機械付屬機工場設備

五、一ヶ年に於ける生産額

（一）ストーブ部品生産額　六〇〇、〇〇〇圓

（二）鑄鐵手洗器　四〇〇、〇〇〇圓

（三）鋼機械類　三〇〇、〇〇〇圓

計　一、三〇〇、〇〇〇圓

六、使用人員　（昭和十一年二月末現在）

（一）職員　參與員（二〇名）　技術員（二三名）

（二）工員　日人工員（四七名）　滿人工員（二一〇名）　合計（三〇〇名）

七、國社の出資金額

國社は滿洛川崎川崎竹重手鋼材株式會社の持株會社にして、國社が昭和九年滿洲興業株式會社を分割し大連の鋼材製工所を讓受し其に更らに重手鋼材會社に鋼材公團共同出資の下に昭和九年四月拾六日奉天に日滿鋼材工業株式會社として新設せられたるものである。而して工場敷地は約一萬坪、工場建築物約二千九百坪にして昭和九年機械類を開始し、開業第年度は工場建設費及の諸の機械の見るべきものが無かつたが昭和十年度は株主總會に於ける決算を挙げ昭和十一年度は株主に配當を示した。

滿洲計器股份有限公司奉天支店

一、所　在　地　奉天市浪速町拾壹番地

二、本社	新京特別市興安路一〇五番		
工場	奉天若松町四番地	奉天若松町四番地	大連市旭町五十七番地	哈爾濱道外南崗二道街三三番
	奉天若松町四番地	奉天紅梅町三十九番地	新京特別市興安路一〇五番地
	大連市旭町五十七番地	哈爾濱道外南崗二道街三三番
三、資本金	壹百五拾萬圓		
四、代表者	重藤春吉	重藤	重藤	重藤	三浦	山口	重藤
五、組織	法人		
六、主要生産品目	皮革製造業作、靴類、鞄入、鞄		
七、生産額	四十萬圓(二〇〇〇)	壹萬	壹萬	七十萬圓
八、生産能力推定額			
九、生産工場名	奉天若松町四番地	奉天紅梅町三十九番地	新京特別市興安路一〇五番地
生産能力（人員）	三三〇〇名		
年生産能力（金額）	同上	推定金額	

株式會社奉天造兵所

一、所在地	本社 奉天春日町十七番地	工場 奉天大東邊門外東塔	

昨年十月新會社成立以前の生産實績は挙げず

貴國の日下醫師宅二棟三元に十三万、七四六平方米の土地借受力申込中で現在實績が期待されてゐる

何所社は昨年十月株式會社として組織されたに過ぎず現在機械設備等の約五割を輸入してゐるが將來全滿の自給を

二、分工場所在地　安東縣六道溝
三、資本金　貳百萬圓
四、代表者　取締役社長　村瀬文雄
五、組織　日本法律に據る株式會社
六、營業種目並に生産種目
1、各種兵器及彈薬類の製造、修理、販賣
2、火薬類及其の原料品の製造、修理、販賣
3、諸器具、機械類、金屬及各種材料及其製品の製造、修理、販賣
4、前記各號に附帯する事業

大金工業所

一、所在　奉天紅梅町參拾壱番地
二、支店　新京住吉町壱丁目拾六番地　哈爾賓阿什河街二四番地、　公主嶺東本町七丁目、
　　撫順龍鳳街六番地
三、投資額　貳拾萬圓
四、代表者　野田信之
五、組織　個人
六、營業種目　特殊機械工作、鐵工製品一式
七、生産種目　モーターカー、自動車部分品　鐵骨鐵構鐵塔電氣瓦斯熔接
　　機械設計製圖一般圖面請付
八、販賣額　一ケ年に於ける　貳拾壱萬圓（昭和十年度）
九、使用人數　職員十六名、職工六十四人
十、沿革　昭和三年四月開業、當時大阪金屬工業所奉天工場と稱したりしが同六年四月商號を大金工業所と改め今日に及ぶ、滿鐵鐵路總局、軍部、滿洲航空工廠及同和自動車株式會社の指定工場である。

股份有限公司宮田製作所

自轉車は從來悉く輸入品を以て充してゐたが、昨年股份有限公司滿洲宮田製作所が鐵西區南一路二五に設立された同社は資本的に昌和洋行と密接なる關係を有し製品は直賣せず全て昌和洋行を通じて販賣する事にしてゐる。投資額二十五萬圓にて本年五月より製品を賣出したが自轉車組立年産六萬台の外に航空機部分品の製作に從事してゐる因みに工場長は島崎彌七氏である。

昌和洋行製作所

同社は富士町一昌和洋行（資本金二百五十萬圓）の工場にして鋼鐵製家具、自轉車保管庫等を製造し昨年度生産高

四〇〇萬圓にて代表者は小島和三郎氏、投資十萬圓である。

國產電機株式會社

錦西工業地區に昭和十年十一月創立され航空機部分品製造、自動車用電氣計器の組立を行つてゐる。代表者德川守禮で投資額總額十五萬圓である。

其の他中華電氣商會、雜貨工廠、日滿電線等の鑄工場がある。尤に目下設立計劃中のもの及び既立後倒産業の滿に達せざる工場を掲げると次の通りである。

滿洲通信機股份有限公司

同社は通信機器の製作を目的として本年三月關係當局の認可を得て目下設立諸準備を急ぎつゝある。日本電氣系の會社（資本金百萬圓全額拂込）で本年四月三十一日錦西北二路九及び一三の五六、〇七四平方米の地に工場建築に着手したが、滿洲に於ける通信機需要の關係上早くも三百萬圓に增資し、來年度需要一千萬圓に具へる事となつた。

芝浦製作所

電氣機器の製造を目指し目下錦西工業地區北二路三九の一三六、七四六平方米の地に工場設置方土地會社に申込んでゐる。

日本ヒューム管株式會社

本年四月國際興業を來天に派し工場敷地其他の準備をなしてゐるが、工場竣成の曉には月產約五百噸のヒューム管製造に當り、滿洲國需要の上下水道管製作販賣に邁進する豫定である。

其上の外機械工具製作の爲新潟鐵工所（申込番中央路二六、敷地、四、三二四方米）、農業機械の製作を目的とする石渡鐵工場（資本金百萬圓、三菱電機、日立製作所、富士電機等の協賛も傳へられ、金屬機械器具工業の旺盛を謳へてゐる。

同和自動車工業株式會社

同社は勅令第二十二號同和自動車工業株式會社法によつて設立された所謂特殊會社である。即ち同社は滿洲國政府が國內自動車工業の確立をもつて設立されたものであるが、これは次の樣な理由によるものである。近時世界的趨勢として世界各國は軍事的には科學兵器として、經濟的には運輸交通機關として益々重要性を昂めつゝある自動車の製作には、國家的努力を注ぎ國內の自給自足を目指してゐるのである。が漸く、國防上關る重要性をもつ自動車の我が日本に於ける生產工業は事變前までは何ら見るべきものなく、最近漸く企業化されて軌道に乘つたといふものの、これは自動車工業法の手厚い保護によつて漸く息を吹くに至つたもので、之れ迄は零細として扱くべからざる外國車の永年に亘り培はれた地盤の前には、呆然職に任ずの外なき狀態に置かれてゐたのである。こうした日本の轍を避け、國防上多大の使命を有する自動車を自給自足化すべきは爲邦の急として、滿洲國政府が設立したのが同和自動車工業である。小西通門外の同社工場は瓦斯事業部部として塗裝時代最新兵器を迫る輕砲及び彈丸の製造工場であつたものを改造したもので、三萬二千五百餘坪の廣漠たる敷地を有し、車體組立能力年約千五百台、車體製作能力千五百

台、修理約千八百台であるが、目下の作業狀態は車輛の注文殺到し相當以上多忙を極めてゐる。工場は自動車工業の過例となつてゐるコンベヤシステムを採用して居り、修理工場の如きは小修理と大修理の兩工場があり。大修理工場は車輛の根本的修理を行ふことが出來る等は著しい同社工場の特徴である。康德三年度以降の國產車の重行量增に伴つて、施設擴充の必要に迫られ過般三百萬圓の末拂込株金の增資が決定し、近く工場の大擴充を行ふことになつてゐる。同社はこれで資本金六百貳拾萬圓全額拂込濟みの會社となる譯であるが、同社の前長は即ち滿洲自動車工業の如何を反影するものであるため、其の業績は大きな注目を拂はれて居り、目下同社は順調なる發展過程を辿つてゐるが之を約言すると、國產自動車が滿洲で盛に進出してゐるといふことを物語るものであろう。この會社は漸く創業三ケ年を經過せんとしつつある際だが、今や基礎的地盤の確立期に入つた模樣で、其の前途は洋々たるものがある。然しこの際にかくれた關東軍、滿洲國政府當局の絕大な後援振りは見逃すことの出來ない點であろう。元來同社は一種の軍需工業として設立されたもので、商工省標準車、或は軍用保護六輪車の組立販賣を主目的としたものであつたが、內地自動車工業界の發達に伴つて乘用車やフォードシボレー級の所謂大衆向トラックの販賣をも行ふ樣になり、近く日產の乘用車、大衆向のトラック等の新發賣をも開始する運びとなつてゐるので、製品の種類もトラックバス、乘用車等十數種の自動車の販賣を行ふ筈である。同社今後の動向は劃る注目すべきものがあるが、五月一日公布された重要產業統制法によると國內の自動車工業は許可制度と規定されており、恐らく滿洲國內唯一の自動車工業會社として發展して行くものと期待される。

二、窯　業

一、概　說

現在奉天に於ける窯業工場の製品としては建築用の赤煉瓦を主とし、茶碗類(肇新窯業)耐火煉瓦、製場、タイルの製造等を擧げる事が出來る。其の他驛で用ふる土瓶類も造つてゐる。立等の工場は日本人經營のものと、滿人經營のものとあるが、奉天に於ては後者は全體の生產高の二三割位のもので製品は主に黑煉瓦である。

煉瓦の生產は全滿でどれ位あるかと云ふと、大體業者は一〇億個即ち一千二三百萬圓見當に見てゐるが、實際は此より多いやうである。此の中奉天に於ける生產は一億五千萬個即ち約百八十萬圓で全滿の一割五分である。奉天に於ける日本人經營の主要八工場に就て昨年度の生產高を見ると九千三百萬個と奉天生產の六割二分を占め、能力一億四千八百萬個と奉天全需要に應じ得る狀態である。滿洲に於ける斯業の歷史を見るに他工業に比べて生產販賣上に非常にむらがあつたやうである。即ち大正四頃と昭和四年頃には一般經濟界の好景氣による建築景氣に促されて非常に需要が增加したのであるが、今日までの趨勢を

見ると大體生産上二三割の消長起伏を辿つて發展して來た。今後も亦此の調子で進んで行くものと思はれる。兎も角建築景氣の指標は景氣指標の中でも最も高低の甚しいものであるが、煉瓦の需給が建築景氣に左右される以上、其の描く消長線の起伏の常ならざる事も當然である。殊に滿洲は內地と異り地質上地震の殆んざない爲建築上に煉瓦の使用さるゝ割合が多い關係上、此の影響は他に比し著しい。販路としては現在、新京大連哈爾濱其の他滿洲各地の地場で生産を營むであるから、奉天に於ける工場製品は前述昭和四年頃新京に約一千萬個貢搬かれたのを例外として、大抵奉天地場、蘇家屯其の他沿線に販路を有してゐるだけである。

原料としての滿洲の土は特に煉瓦に適すと謂はれてゐるが、是は必ずしもそうではなく煉瓦と云ふものは大極めての土で出來るものであつて、結局其の混合材料とか燃料動力其の他の附帶的條件に依て、生産上の利不利を齎す事となる譯である。此の點から云ふと奉天は前記總論に於て述べた通り滿洲の他工業地に比し惠まれてゐるが、特に生産費中最も多額を占める石炭に於て廉價に供給されると云ふ事は斯の種工業の持つ最大の利點である

尙混合材料と云ふのは煉瓦は夏季には龜裂を生ずるから時季に應じ砂を適當に混合するのを謂ふものである。

最近各種工場の新設相踵ぎボイラー等を焚いたり、又學校其の他一般家屋等でも同樣であるから、耐火煉瓦の必要が益々痛感されるに至つた關係上、奉天窯業では一昨年から此の種煉瓦の製造を始め、今後此の方面の發展を期してゐる。

次に奉天に於ける主要窯業工場を紹介しやう

二、奉天に於ける主要工場

一、煉瓦陶器工場

奉天窯業株式會社

一、所在地　本店　奉天彌生町三十三番地　出張所（新京興安大路三〇一番地）　工場（奉天鐵西擺草屯）

二、組織　株式會社

三、投資價額　貳拾萬圓

四、代表者名　專務取締役　佐伯直平

五、營業種目　（製造販賣）赤煉瓦、耐火煉瓦、滿洲煉瓦、洋瓦、日本瓦

六、一ケ年に於ける主要品生產高　赤煉瓦五千萬個、耐火煉瓦五千箇

七、使用人員　日人二十五名、滿人十名、（自四月至十一月）發燒期間滿人職工及人夫平均一日千人

八、沿革　大正七年六月資本金貳拾萬圓を以て創立し、大正九年二月其資本を壹百萬圓に增資したるも昭和四年十二月現在の組織に改組すの從來の工場は工業區地域となり奉天工業土地會社の經營地となりたるを以て、昭和七年より現在の工場たる鐵西靈草屯に拾五萬坪の土地を買收、從來の手製を廢し機械化を計つた。耐火煉瓦は從來奉天に製造工場がなかつたが、當地が原料の取寄せに地の利を有するを以て昭和十年より製造を開始し市場に供給してゐる。尙又屋根材料の改良を企圖し製瓦工場を建設、高級日本瓦、施釉洋瓦を製造事上を引受け、建築界の好評を博してゐる

滿洲窯業株式會社

同社は平安道にあり代表者京谷芳之助氏にて大正十三年設立され資本金二十萬圓（內拂込八萬圓）、生產能力三千三百七十五萬個、昨年度年產一千八百萬個、二十一萬六千圓を擧げてゐる

其の他煉瓦製造工場には淺野窯業、保龍窯業、村松窯業、松竹窯業、小川窯業、及千葉窯業がある。何れも年產約五、六百萬個の能力を擁し、最高年產の二〇〇割より五割までの能力を有して相當の成績を示してゐる。

尙先年本奉天窯業界の一部にて帶（られた同業者の統制業が昨春漸實現化し、全奉天日本人側十六工場の總意で奉天炎普煉瓦株式會社（鐵西町三十一）を創立、同業の合理的經營をなす事になり、同年四月末株金の拂込を行ひ、七月一日より製品の一年販賣みなす事になり、尙十分の業績を擧げるに至らないが、趣旨の徹底され今後の成果は注目される。因みに同社資本金二十萬圓、（內拂込十五萬圓）、代表者社長佐伯直平氏である。

奉天肇新窯業公司

同公司の陶器製造は事變前支那側の國貨提唱運動に伴つて物興したる窯業中最も成功したものの實例であつて資本金四十八萬圓（現大洋全額拂込濟）にて大正十三年創められ、其後、時に相當の苦痛を嘗めたが順次發展し大正十五年秋頃に陶器を製造せんとして增資計劃を樹て昭和三年正式に陶器窯を設け其の翌年からの東北政權の擁護と關稅改正の好影響とに惠まれ恰かも旭日の如き發展振りを示すに至つた、即ち昭和三年同公司に於ける陶器の生產高は五十餘萬個に過ぎなかつたが昭和五年には六百萬個昨年も同樣の生產高を擧げ年產能力一千萬個を有してゐる、事變後は他の新式機械工場の出現と相俟ち往年の如き恩惠もなく其の經營にも苦心を要するだらうが同社の陶器は今以て斷然來天市場を押へてゐる。

尙タイルの工場にして合資會社滿洲タイル工業所（永代町二）がある。同社は昭和九年に設立され、投資二萬五千圓にて年產タイル四百萬枚を擧げ其能力五百萬枚全滿各地に供給してゐる。

2、製瓦工場

硝子工業は品種上いろいろあるが奉天に於けるそれは製壜工場を數へる位である。大體製壜原料たる硅砂は、滿洲で產するが曹達灰は之を內地よりの輸入に仰いで居る。此の稅率擔當り一圓五十錢で、原料的には餘り惠まれないが、一般工業條件と同樣、工賃、燃料の低廉なると目下の處內地資本に壓迫さるる事なく大體需給相償つてゐる爲企業の將來は大體樂觀して良い譯である。斯の種工業としては滿洲製壜兩合公司(投資八萬圓、代表者塚越菊次郎氏)が鐵西に昨年末創立せられた。同社はサイダー壜、一升壜其の他アルコール壜等を製造してゐるが、大體日產サイダー壜一萬二千本の能力を有し近く釜を增し能力を倍增する筈である。製品は日本シトロン、八王寺啤酒公司其の他主として地場に供給してゐる。

其の他製壜工場としては穗積製瓶工場(明治三十九年創立、大西門外所在、代表者鈴木勇吉投資二萬五千圓)にて製瓶年產四萬二千圓を擧げ能力概算二十萬圓を產してゐる。其の外大連玉置硝子の奉天分工場(昭和九年三月創立、十間房第六區所在、投資一萬圓、代表者玉置竹次郎氏)が創立以來同年十二月までの試驗期間を經て昨年度壜生產約三萬六千圓を擧げてゐる。以上は主として一般市場へ販賣を目的とした製壜工場であるが、此の外自家用の製壜工場に柏內製壜工場所在地鐵西(工業地區、昭和九年五月設立、代表者柏野菊太郎)がある。同社は柏野氏の個人經營にて、加茂町の柏內洋行(化粧品製造)の自家用化粧壜の製造を行ひ年約四〇萬打の壜を生產して居り、化粧品製造業の旺盛と共に年々伸長してゐる。因みに同工場の投資は約十萬圓である。

尙自家用製壜工場設立計書中のものに滿洲麥酒株式會社用のビール壜工場がある。

滿洲ビールではビール壜の現地製造を行ふため、豫て右工場設立認可方當局に申請中のところ、このほど正式認可があつたので滿洲ビール會社直屬工場として來る六月ごろ鐵西工業區元康德ビール工場建設豫定地(六萬七千平方米)に約百萬圓を投じ着工することゝなつた。生產能力はビール壜、清涼飲料水壜、合計一ヶ年一千萬本で、技術系統は大日本キリンの內地兩工場から配置する。

3、コンクリート石灰工場

石灰工場としては奉天石灰セメント株式會社(富士町三)がある。資本金五〇萬圓(內拂込十二萬五千圓)創立大正八年四月で代表者內藤官太氏、生產能力石灰年一億斤、昨年度

のそれは二千七百萬斤を擧げ、近年はセメントの生産行はつてゐない。

次にコンクリートの會社としては新進コンクリート工業株式會社を擧げる事が出來る。其の内容は次の通りである。

新進コンクリート工業株式會社

一、所在地　奉天彌生町四十九番地

二、工場及び出張所　奉天事務所奉天彌生町四十九番地　工場奉天市外砂山南外に大連、鞍山、新京、哈爾賓、齊々哈爾及牡丹江に工場あり

三、資本金　壹百萬圓

四、代表者及業務執行代表者　社長　原安三郎　專務取締役　原半次郎

五、組織　株式會社

六、製品　專賣特許コンクリート上下水管、電柱、タイル其他製造販賣

七、一ヶ年生産額　五十萬圓

八、使用人數　五〇〇人

三、紡績紡織工業

一、綿糸紡績業

イ、滿洲の棉花に就て

先づ原料たる棉花に付て一言して置かう。

滿洲に於ける棉の産出は遼陽海城等を中心として各地に産するが、從來關東廳滿鐵等の機關によつて米國陸地棉の栽培を奬勵され、最近産業五ヶ年計畫の第二期に入つたのを楔機として更に棉花協會、滿鐵、鐵道總局産業課其の他に依り作付面積の增加、棉の增産に力を盡されてゐる。今作付面積の增加振りを昭和三年、五年及び十一年に比較すると、昨年度は次の通り昭和三年の一二倍半事變前の二倍半の膨脹である。

棉花作付面積

昭和三年	昭和五年	昭和十一年
六、三九八町歩	三四、三二五町歩	八〇、〇〇〇町歩

而して現在耕作可能地五五萬町歩であるから尙增産の餘地は十分ある譯である。

次に生産高の上から見ると、以前の統計は遺憾乍ら持合はさぬが現在前記耕作地の生産高三千萬斤であつて之を五ヶ年後に一億斤乃至七千五百萬斤（棉花協會乃至實業部にて異

る）とする計畫のやうであるが、前記耕作可能地の推定生産高二億八千萬斤より見て十分可能と思はれる。然かも現在滿洲に於ける紡績會社の棉花消費量は紡績用に六千萬斤、中入棉に二十萬斤（推定）であるから、右計畫完成後の生産量も在滿工場にて消費の見込である。而して目下滿洲に於ける棉花の自給自足に達し得る推定量は大體三億斤と見積られてゐるから之に達するに尙一億斤の不足を告げる事となる。併し乍ら棉花は尙滿洲のみの自給自足に滿足すべきでなくして、現在日本の棉花消費量十億斤餘に對し生産五千萬斤に超ぎざる現狀より、增産には一層の努力が必要と思はれる。此の目的よりして棉花協會では關東農事試驗場の選定せる陸地棉改良種の試育を試み、從來より二〇ヶ年計畫として完成の曉に於て三〇萬町歩一億五千萬斤の生産を得べく努めてゐる。

ロ、綿糸布紡績業

現在滿洲に於ける紡績會社としては奉天紡紗廠（奉天）滿洲紡績（遼陽）內外棉花株式會社（金州）滿洲福紡株式會社（周水子）及び營口紡紗廠（營口）の五社であつて錘數三〇萬錘機三千台（近々約一、七五〇台增設の見込）にて關東州を除きたる在滿工場生産高は次の通りである。

綿糸	一一四、五五三梱、	綿布	一、四三〇、〇〇〇疋

而も綿糸生産の中、中番手より太番手が最も多く一六手乃至二〇手は全體の約五五％を占めてゐる。之は滿洲に於ける消費の關係上よりさうなつたのであるが、所で此處で一考すべきは滿洲棉（改良棉）は此の太番手には向かない事であつて、大體前記工場は之を中細糸の生産に使用し、太物の原料には印度棉を輸入使用してゐる。加ふるに目下の所、値段關係より十分滿洲棉の消費が盛にならないが、之は將來の增産其の他により普及される事と思ふ。

ハ、需給關係

最後に滿洲産綿製品の需給關係であるが、第一に問題になるのは直ぐ隣に世界一の綿業國日本を控へてゐる事である。丁度滿洲製麻工業が印度の同種工業に惱まされると同じ關係である。日本綿製品は輸送日數四〇日も要する印度より棉花を輸入し乍ら、其印度に製品を輸出して然かも印度紡績業者をして悲鳴を擧げさせてゐる。之を自國に於ける棉花の生産尙十分ならざる滿洲に比較すれば誠に霄壤の差がある。之を自然に放置すれば在滿は

工業は日本輸入製品の足下に蹂躪される事は自然であり、且又關稅の問題も然かく容易に解決が付かないとすれば、是は矢張建國精神に則り日滿主業者の互讓に俟たねばならぬ所であらう。滿洲國當局にては既に此處に着眼し、種々適宜の策を講じてをられるやうに聞いてゐる。事變直後在滿工場の錘數を二〇萬に限定すると傳へられたのが、現在三〇萬錘に及び尙增產を開くのは斯工業將來の爲喜ばしき事でなければならない。

そは兎も角世界人口十五億の中、三分の一の五億が完全に衣服を着け、爾餘の三分の二中半裸體が約七億五千萬卽ち全體の二分の一を占め、殘りの約二億五千萬卽ち全體の六分の一は裸體であると云はれて居り、殊に滿洲國は氣候の關係上斯の種製品の需要增大は必然的事實であるが、現在購買力低く在滿斯工業家は一般に市場の狹小なるを喞つてゐる。殊に現在原料棉の生產が前記の通り三千萬斤、卽ち俵にして二五萬俵と日本の消費量五〇〇萬俵の二十分の一に過ぎず當分原料難に苦しむ事であらうが、將來の見透しもあり、且又在中華民國邦人紡績の歷史よりしてさして悲觀の要もなく、斯業者の機宜の誤らざる處置により將來の大成を願つて已まない。

次に參考迄に生地綿布綿糸及原料棉花の輸入貿易額を示さう

生地綿布糸棉花輸入表（自昭和七年至同十一年）

年度別	生地綿布（シャーティング及シーティング） 數量	金額	棉花 數量	金額	生地綿糸（コットンヤーン） 數量	金額
昭和七年	一、一四三、九四三疋	二、三四三、六四〇圓	三七、九三五瓩	一六、七二七、二六八圓	一三、六二三、〇八八斤	二、八四四、七二六圓
同八年	一、九八八、三四四	三、三六五、二三四	二三〇、〇三六	二、〇四六、〇〇八	二三、九八六、三〇六	一、九八八、〇九八
同九年	八四三、三〇三	一、四三三、四六六	二八一、〇〇七	三、六三三、七一七	一三、一四三、〇一九	九、三七七、二二〇
同十年	一、六八八、六四四	三、九三七、四六六	二〇三、八一三	九、四四〇、五九三	八、一一八、三八八	六、四三一、六六四
同十一年	二、八六二、七二一	二〇、七二三、七四〇	三八三、九六一	一八、六〇一、三三〇	七、八三六、六六六	六、三〇三、二三〇

註　生地綿布は日本（朝鮮を含む）が九九％、棉花は英領印度が八六％、生地綿糸は輸入國別に見ると日本（同上）が六％一中華民國が三九％（在華日本紡を含む）を占めてゐる。

此の統計表は滿洲國各地稅關を通して行はれたる對外貿易計數を蒐錄したもので、關東洲も其の貿易地帶に含まれてゐる。從て滿洲國への實際輸入額は不明であるが、滿洲國では昨年度から關東州より及び關東州巡經由滿洲國への實輸入額を示してゐるから併せて左

に示さう。

生地綿布糸、棉花滿洲國實輸入數量（昭和十一年度）

生地綿布（シャーティング及シーティング）	生地綿糸（コットンヤーン）	棉花
二、二六八、六六七疋	一八、六六七、八五一斤	二九〇、三〇〇担

是と前掲總括輸入表との差額だけが關東州内の需要である。生地綿布及び棉花に於て本表數字が前掲表より少量を示してゐるに拘らず生地綿糸に於て一千萬斤以上の多量を示してゐるのは金州内外棉花及び周水子滿洲福紡の二社の供給綿糸を含んでゐる爲である。

二、最後に奉天に於ける唯一の斯種工場奉天紡紗廠を紹介する。

奉天紡紗廠

滿洲國法人奉天紡紗廠は大正十二年十月、現在の十間房に設立せられ廠長王廣惠氏協理桜尾國治氏にて資本金四百五十萬圓（拂込濟四百二十七萬一千五百圓）にて主たる株主は滿洲國財政部である、現在職工日滿人合はせ一三二〇名を使用し年産綿糸四萬二千梱、綿布十七萬疋の能力を有し、昨年度のそれは綿糸二萬一千梱、綿布八萬五千疋にて概算五百萬圓を擧げて居り事變前の綿糸七千九百九十一梱、綿布の約十萬反に比し尙無限の餘地が殘されてゐる。同社は事變前までの經營組織に就き改善方精々當局者の努力が拂はれてゐるを以て其の基礎と相俟つて遠からず業績の上に一段の飛躍を見られるであらう。

尙外に製綿工廠として擧げられるものに東倉鳥紗公司（若葉町六、代表者鄭野義一郎氏）がある、同社は出資金十萬圓の匿名組合であつて昭和四年五月の設立に係り敷地六八〇坪に鮮滿人七五名を使用、製綿業を行ひ傳ら棉花製品に從事してゐるが日産製綿三百貫、粗製綿六百貫の能力を有し昨年度は約三十萬圓の生産額を示してゐる。

尙被服工場として滿洲國軍政部被服本廠がある同工場の内容は次の通りである

一、所在地　奉天市小東門

二、本工場及分工場

本廠工場	奉天市小東關	皮革工場	八王寺
三、代表者	陸軍少將　木村奈雄		
四、生産品目	被服類一切		
五、生産額	一ヶ年五百萬圓		
六、使用人數	昭和十年末現在		

	日人 男	日人 女	滿人 男	滿人 女	計
職員	六九	二	二九	二	一〇二
職工	一九	〇	四四九	七五〇	一、二一八
計					一、三二〇

六、沿革　民國六年十月蒼星開墾作業の創立せるものにして遼寧被服廠と稱して居たが滿洲事變に

當り關東軍の占據に歸し關東軍軍需軍倉庫の管理下に置かれた
昭和七年五月二十日滿洲國政府に移管され中央陸軍被服廠と稱し、同年十月軍政部被服
廠と改稱し今日に至る

其の他被服廠藍染に米天被服工廠(浪町四、代表者山中吉兵衛氏)があり五萬圓の投資を以て販賣高年三十萬圓を擧げてゐる

二、毛織物工業

一、滿洲羊毛の利用

滿洲は古くより支那の一部として大富は耕を上とし牧之に次ぐとして盛に牧畜を奬勵した爲め六畜の一たる羊の如きも早くより飼育せられ其の民族生活と密接不離の關係に在つた事は經書其の他文献に徵して明かな所である。

而して農業盛ならざる地方にては牧羊を專業若くは副業としたものが頗る多かつた。併し乍ら元來羊を飼養するのは其の肉を食し其の皮を採るを目的として來た爲と羊毛の利用の如きは毛筆若くは毛氈を造る位の程度に止まつてゐた。又羊毛も粗毛であつて濠洲、南阿、南米等の產毛に比し頗る遜色あるは言ふを俟たないが其の利用法に依つては夫々適應した用途があるから、炯眼なる外商等は、既に數十年前より支那羊毛に着目し、天津を根據として北支那、蒙古、青海、新疆方面に於ける羊毛の買付輸出に從事し今や彼等の支那羊毛界に扶植した勢力は、牢として拔くべからざるものがある。我國に於ては、支那羊毛の利用法に就て彙も省みなかつたが、歐洲戰爭當時の原料供給難を訴ふるに及んで、始めて其の利用法を云々せられ、又昨年濠洲羊毛の輸入制限法に依り、愈々支那及滿洲羊毛の利用の必要が叫ばるゝに至つた。之に就て滿洲唯一の毛織工業會社たる滿蒙毛織株式會社では既に滿洲羊毛の利用に就て、多年調査研究し、目下實用の域に在り、年々二〇〇萬封度の使用量を見るに至つた。

滿洲に於ける羊頭數は一八〇萬頭、產毛量は五〇〇萬封度　なりと統計表に現れて居るが正確なものでなくて概數である。最近滿洲國の建設成つてより一層牧羊を奬勵し、爲に現在にては二〇〇萬頭、六〇〇萬封度の產量に非ずやと推定せられる。其の一例は今年二月下旬、興安北省に於ける羊頭數及產毛量にして、同社の調査せる處に依れば、一〇〇萬頭、一〇〇萬斤の產毛量あり、此の一省にして既に二二〇萬封度を產出するのであるから

中部及南部を合するならば六〇〇萬封度の産毛量に達するものと推定するのが大體妥當な所であるまいかと思はれる。

二、滿洲羊毛の種類、性質及利用法

滿洲羊毛を大別して春毛及秋毛の二種に分ける事が出來る。

春毛、春毛は冬期を經過した羊毛であつて夏季の脱毒に先ち剪毛したものであつて剪毛は四月頃より五月頃迄に終了するものである。此の種羊毛は冬期嚴寒の候羊體を保護した る密毛であつて纖維長く强靭である。春毛の内市場に集散されてゐるのは錦州羊毛、ハイラル羊毛（一名北滿羊毛と稱し年一回剪毛せらる）の二種である。

秋毛、秋毛は秋分八月頃に至つて剪毛採取せられるから此の名稱がある。卽ち、春季剪毛後生長した羊毛であるから纖維が荒くて短少であるが彈力と光澤があり且つ縮絨性に富むを以て主に防寒用具のフエルト製造に使用せられ、錦州方面にのみ集散せられてゐる。

同社で使用する羊毛は主として錦州羊毛であつてハイラル羊毛は綱紐を經て外國に輸出せられて居り、其内九〇%は米國に向けられる。

同社に於ける滿洲羊毛の利用種別を擧げるとメルトン地、外套地、洋服地、毛布等にある。又錦州春毛を加工し荒毛を拔き取り蒙洲羊毛を代用として使用する事に成功し荒毛は絨氈製造用に使用してゐる。

次に滿洲羊毛の利用別は次の通りになつてゐる。

産毛量	五〇〇萬封度
滿蒙毛織利用	二〇〇萬封度
其の中地元利用	一〇〇萬封度
外國輸出	二〇〇萬封度

（以上は滿鐵吧織北村爽夫氏の寄稿による）

羊毛の增産計畫としては尙滿洲國實業部の計畫は大體現在能力の二倍近くを增産する由であり鐵道總局に於ても昭和八年より次の通り羊の貸付を開始してゐる。

昭和八年	一、五〇〇頭	昭和一一年	一〇、〇〇〇
同九年	一、五〇〇	計	二〇、〇〇〇
同一〇年	七、〇〇〇		

大體在來種とメリノー種との雜種により其の品質の改良を計るのであつて本年より每年一萬頭の貸付を行ふ方針で種羊場四ヶ所を設備し種母の育成に努めてゐる。斯くて滿蒙毛織邊りの推測では今より三十五ヶ年後には一億五千封度の羊毛が生產されるものと見てゐる。是は一頭邊り理想的產毛量七封度として、計算するに二千萬頭の羊になる譯である。

三、奉天に於ける毛織工業

奉天に於ける毛織工業と云つても滿蒙毛織株式會社が全滿に於ける斯業の唯一たるものであつて其羊毛使用量も滿洲羊毛の約半數を占めてゐる。同會社の內容を一言すると大正七年創立資本金二五〇萬圓全額拂込濟にて常務取締役椎名義雄氏を始めとし常務取締役武石惟友氏、取締役中谷庄兵衞、松浦諒助及丁鑑修の三氏を擧げ、監査役に鈴木三郎、堀義雄の兩氏外に相談役として三井清一郎氏を配してゐる。工場敷地は五萬餘坪を擁し從業員日本人約二百三十名、滿人約千七百名を使用し其の一ヶ年の生產能力毛織物約一二〇萬碼、毛糸約四八萬封度、帽子約六萬打、（製帽工業に就ては後に一言する）、而して本年三月資本金を五五〇萬圓（全額拂込濟）に增資し北支那其他への進出の外奉天にも前記生產能力の約三分の一見當の能力を有する第二工場を建設し益々伸び行く毛織物の需要に順應せんとしてゐる。

四、毛織工業の將來

先づ滿洲に於ける消費狀況を見るに、滿蒙毛織の年販賣高は昭和九年四〇〇萬圓、昭和十年六〇〇萬圓であつて一人當り洋服二〇圓として十年度の販賣高を人口に割當て、見ると三〇萬の人間が洋服を着用してゐる事になる。之は總人口の僅か一分に過ぎず勿論日本よりの輸入を見積り得るが消費の尙今後大いに伸展するのは疑問を容れない。

次に參考迄に滿洲に這入る羊毛及同製品の輸入表を示しておかう、

羊毛及同製品輸入貿易額表（自昭和七年至同十一年）

年度別	價格	年度別	價格
昭和七年	一〇、〇一六、六〇六圓	同十年	一八、九一〇、七六六圓
同八年	一四、〇七二、三〇三	同十一年	二四、七二一、一四四
同九年	一七、二四六、五七二		

而して現在尙滿洲に於ける生產が日本よりの輸入に比し採算上不利の立場にある事は一

考を要すべき問題と思はれる。其の一例を示すとサージに於ては滿洲物三圓三十一錢四厘に對し輸入物は三圓二十八錢乃至三圓十四錢四厘羅紗物は滿洲前者三圓六十二錢五厘に對し後者三圓四十錢で只毛布のみ滿洲物三圓五十六錢七厘に對し內地物三圓八十五錢三厘と太刀打ち可能を示してゐる。

此の原因は種々あるも是を檢討する事は卽ち滿洲毛織工業の將來性に重大な關係を有する點であるから其の二、三を次に示して見度い。

一、勞力、工業諸原料の勞力の項に於て述べた通り滿洲人勞働者は賃銀は安いが勞働能率低く結局採算上の不利を來す。之は前述の通り從等の性格環境を十分研究して之に適應した對策を論ずる必要があると同時に彼等の敎育に就ても十分研究の餘地がある。

二、間接費の割高なる事、之は一般工業ども同樣であるが販賣機構の整備せざる爲製品配給上種々缺陷あり、消費者の入手價格の割高を來す。

三、內地旣製品の輸入稅率の低率なる事、其他一般的の原因として經營組織の不合理現地生產の毛織物着用に對する消費者の自覺等を數へられる。從つて今後は資本家は成るべく作業の單一化を目的として糸、無地織物、サージ等の需要範圍廣き製造に向ひ綿糸布紡績と同樣の經營方法を採るべきで他の縞物柄物等の需要範圍比較的狹きものは宜しく中小工業家に委ね併せて分業の實を擧ぐべきであらうと思はれる。殊に滿洲國に於ける政治經濟上の特殊事情に應じ此の間の措置に十分なる留意を拂ふべきである。

三、麻糸紡績業

滿洲に於ける麻糸紡績業としては製麻株式會社奉天工場と目下設立計畫中の遼陽小泉製麻株式會社の二社である。大體滿洲に於ては特產雜穀の包裝用として麻袋大いに需要され年三千萬枚と稱せられるが、前記滿洲製麻の奉天工場では年產能力約七百萬枚、小泉製麻は約四百萬枚此の外滿洲製麻大連工場の生產を入れて而も尙全滿需要に應ずるには遠い。從て年々多額の麻製品を輸入してゐるが試みに事變以來の輸入額を示すと次の通りである

麻製品輸入表（自昭和七年至同十一年）

年度別	綱、索、綱 數量	綱、索、綱 金額	細麻布、地麻布 數量	細麻布、地麻布 金額	荷造麻袋 數量	荷造麻袋 金額	菰麻袋 數量	菰麻袋 金額
	瓩	圓	瓩	圓	瓩	圓	瓩	圓
昭和七年	一九、九九九	八三、九八八	五、一〇〇	四、〇五六	六四、三八〇、一八九、〇〇二	五五、〇一八	六、一〇五、六〇〇	四、〇五六

同八年	三四、七二六	一、一四七、四一七	二〇五、一三一	一〇六、九四五	四四六、八四四	二一、九二四、八四四	五五五、三九九	四、〇六六、八九八
同九年	三、三三五、八七八	九二一、九二七	九、九二五	三三、四九五	四二七、一八三	一〇、三六九、九四八	五〇五、七四四	三、七四四、〇三〇
同十年	四、二〇九、六〇八	一、九六六、二八〇	一、九三五	二、六四八	三三六、四九九	一〇、三六九、三三二	五四四、八六三	四、〇四一、二二八
同十一年	四、七八、〇四六	一、六三二、九六六	二六、四〇四	四四、七三三	四四六、三九六	九、四六七、九九九	三六八、三九七	四、三六六、七九三

註　品名は滿洲國貿易統計用語に依る。

右の外小數の麻製品を加へると年々二千萬圓に達する輸入である。其の中主要品たる新麻袋は印度の輸入が實に九割九分まで占めてゐる。之は當然の事で英領印度に於ては豐富なる原料生產を以て日本の綿糸紡績業にも匹敵すべき盛大なる麻糸紡績業が發達し强大なる資本と確固たる基礎の下に或ひはダンピング其の他の方法を以て滿洲に働ぎ掛ける爲に在滿工業家としても常に之に關心せざるを得ない立場にあり、滿洲製麻にあつても販賣政策上年々相當量の麻袋を輸入し隨時機宜の處置を取つてゐる。次に之が原料たるヂュートであるが、滿洲の現在生產能力は精々年產七百瓲であり從て五ヶ年計畫に於ても其の數次の增產を目論んでゐるのである。而して滿洲に於て增產せんとするものは洋麻卽ちケナフであつて奉天を中心とした南滿一帶に栽培せんとしてゐるが尙實際の使用に堪えず品質上種々改良の餘地が殘されてゐる。されば現在の所殆んど大部分之を輸入に仰ぐ外ない有樣である。參考までに原料輸入高を示さう。

ヂュート輸入表

年度	數量	年度	數量
昭和七年	七七、二六八瓲	同十年	一六、七六〇、五七三斤
同八年	五三、〇七八瓲	同十一年	一九、七八四、一五七斤
同九年	一六、八七四、一〇二斤		

此の九割以上は勿論印度ヂュートであつて滿洲製麻奉天工場のみでも年平均四萬俵の輸入を示してゐるが之も相場の如何に依つて思惑的賣買も行はれるから數量は一定してゐない。

所でヂュートを麻糸にする工程は綿糸紡績と同樣である。是に緯糸、經糸織り交せ織機に掛けて麻袋を製する、製品たる麻袋の長さは通常四〇吋にして其の內鐵麻袋と靑麻袋とがあり前者は通常大豆の包裝に用ひられ一枚の重量約二、二五封度あり後者は大豆以外の

雜穀の包裝に用ひられ一枚二、五封度の重量がある、而して四〇枚を一綑にして市場に出すのである。

尙滿洲製麻株式會社の內容を紹介すると大正八年二月資本金三〇〇萬圓を以て奉天製麻株式會社を創立、其の後工場の火災、財界不況其他の原因により閉鎖狀態を繼續し居たる所偶々滿洲事變を契機とする一般環境の好轉に應じ、不良資產の徹底的整理を行ひ昭和九年初頭より大連滿洲製麻と提携操業、其の後營業順調に進捗して同十一年五月大連製麻と合併し滿洲製麻奉天工場として更生今後の發展に一ポイントを劃したのである。

而して現在資本金は五百萬圓、拂込二百三拾七萬五千圓、奉天工場投資約百萬圓、二、八八一坪の敷地を擁し一、八五四名の滿人職工を使傭し昨年度は麻袋五、〇七〇、〇〇〇枚概算二、〇三〇、〇〇〇圓の生產高を擧げてゐる。

尙製麻事業の將來に付き一言し度い事は、此の事に付き最近內地工業家の關心を惹きつゝある事である。前述の如く滿洲製麻に於ては種々の經濟的事情により年々相當の印度麻袋を輸入して居り全滿の輸入額も前揭表の示す通り相當の多額に上つてゐるが、此の事と現在滿洲に於ける供給不足との事實より、他の原料製品を以てする麻袋代用論が生れ、又從來の供給不足を目指して鐘紡のケナフを原料とする製麻事業への進出も傳へられ當業者の注目を集めてゐる。從て斯業者としては之等の事實に着眼して大局を誤らざるやう着實に其の經營を進めて行く事が切望される次第である。

四、フエルト製帽工業

一、概況

今より約三十年以前に於ける滿洲の中折フエルト帽子は所謂中產階級以上にのみ需要されてゐたもので、その數量は極めて微々たるものであつた。その後文化の流入に伴ひ漸次一般大衆に需要されるに至り、現在では生活必需品と迄言はれ、この需要數量は全滿に於て年約三十萬打を下らないと謂はれてゐる。その間に於けるフエルト帽子は總て輸入品で滿洲に於ける製帽工場としては昭和四年に至り初めて奉天製帽工廠の進出を見、大衆向の製造に着手した。然るに當時は舊軍閥政治の壓迫から業績振はず殆んど採算を度外視した販賣で僅に操業を繼續して來たに過ぎなかつた。偶々滿洲事變の勃發は新國家の建國とな

り、治安の確立と共に製帽工業も漸次好轉し、昭和八年春より滿蒙毛織株式會社製帽部、同年秋には大同製帽商會の創業を見、次いで昭和九年四月滿洲製帽株式會社(現在日滿フェルト工業株式會社と改稱)は奉天鐵西工業地區に進出し、又近江製帽滿洲支店では昭和十年十月より製帽加工に着手することゝなり、玆に於て滿洲の製帽工業は飛躍的發展振りを示すに至つた。然るに一方急激な製帽工業の續出は當然の結果として生産過剩の狀態に陷り、他方日本内地輸出業者との激烈なる販賣競爭は利益率の低下を餘儀なくされ、製帽工業の將來に一抹の暗影を投げかけるに至つた。これが對應策として地場製帽工業家の有力者の主唱により本年三月頃から地場業者と内地同業者との間に生産及販賣の統制が叫はれて來たが、内地側でも當地案に讃意を表してゐることゝて近く具體的に表面化される模樣である。

次に奉天に於けるフェルト工場を紹介しやう

二、奉天に於ける主要工場

1、奉天製帽工廠

奉天宇治町十二番地の奉天製帽工廠は大阪三浦製帽合資會社の別動機關として昭和四年十月の開設で、大阪本社より材料の送荷を受け奉天工場に於て加工製造に從事してゐる。製品は總て滿人向中折フェルト帽並にパナマ帽で、地場卸賣の外沿線方面にも相當の荷動きあり、事變後業況順調を辿つてゐる。以下その内容を示せば次の如くである。

一、代表者	三浦藤次郎	二、投資額	三萬圓
三、職工數	二十六名	四、生産能力	年二萬打
五、生産高	一萬三千打(昨年度)		

2、日滿フェルト工業株式會社

同社は昭和九年四月奉天鐵西工業地區に卒先して工場を設置し、當初は第一期計畫として製帽加工部工場を經營してゐるたが製帽主原料たるフェルト帽體を日本内地より輸入を仰ぐは到底將來の需要に應じ切れないことを痛感し、昭和十一年十一月資本金を五十萬圓即ち四十二萬圓の增資を行ひ、現在の如きフェルト帽體並に工業用フェルト絨の製絨工場を建設するに至つた。尙製帽工場の擴張をも行ひ昨年十一月上旬より操業を開始し斯くし

て最高生産能力も今までの日産百二十打の倍三百打の能力を發揮する事となつた。因に同社では昨年五月株主總會を開き名稱を日滿フェルト工業株式會社と改稱し、代表取締役に串田金弘氏、取締役に野村由藏、住吉善一郎、北島通弘の諸氏を擧げてゐる。

一、所在地　奉天鐵西工業地區　二、代表者　串田金弘

三、資本金　五十萬圓　四、工場面積　二、三四八坪

五、職工數　五〇名　六、生産能力　年九萬打（一日三百打）

七、生産高　三萬打（昨年度）　八、將來計畫　バナマ帽、フェルト鞋、鳥打帽等の製造が計畫されてゐる

3、滿蒙毛織株式會社製帽部

同社製帽部は昭和八年春から同社毛織工業の副業として操業を開始してゐるが、他の製帽工場に比較して原料購入に於て有利な立場に置かれてゐる。帽體の製造能力は一日八十打を示し、餘分のものは日滿フェルト工業に供給してゐる。製品は總て滿人向フェルト帽子で、販賣は工場直賣とせず奉天豐記洋行、哈爾濱田中洋行の二軒の手を通じ全滿各地に供給してゐる。其の生産能力年産六萬打昨年度は約四萬四千打の生産高を擧げてゐる。尙同社の内容に就ては毛織工業の項目で說明して置いたから省略する。

4、大同製帽商會

同商會は代表者たる森下喜助氏並に神戸の製帽材料問屋佐藤一郎氏、同製帽材料漂白專門業島岡春吉氏、岡山帽體製造業幡中靜太氏及森光太郎氏の匿名事業で昭和八年六月設立製品は滿人向バナマ帽、フェルト中折帽の二種とし、販賣は奉天柏內洋行、哈爾濱英商アラナモンド公司を總代理店として全滿各地に販賣してゐる。以下その內容につき示せば次の通りである。

一、所在地　奉天大西門裡路南　二、代表者　森下喜助

三、投資額　四萬圓　四、職工數　三十名

五、生産能力　年一萬五千打

5、近江製帽滿洲支店

滋賀湖田町近江製帽會社の滿洲支店として昭和六年奉天加茂町十五番地に設置されたる

ものでで、加工製帽は昭和十年十月より操業を開始してゐる、帽体は總て内地本店よりの輸送を受け、販賣は支店より直賣してゐる。以下その内容を示せば次の如くである。

一、所在地　奉天加茂町十三　　二、代表者　森元良三

三、職工數　二十名　　四、生産能力　年萬五千打

三、需給關係

大體奉天に於ける製帽工場は五工場で、これ等の一ヶ年の生産合計高は約十萬打見當であるが、昨年度輸入量は次の通り大體三十六萬打であるから全滿需要量三十萬打を超過してゐる。殊に最近内地斯業者間の競爭は激甚を極め原價を度外視した滿洲向投賣りから當地當業者を惱ましてゐる。特に各工場が全生産能力を發揮した場合には需要量を超ゆること十萬打にて需給の不均衡が益々擴大する事になる。因みに最近數年間に於ける帽子の滿洲輸入量及び奉天驛到着數量を示せば通りである。

フエルト帽子輸入表（自昭和七年至同十一年）

年度別	輸入數量	年度別	輸入數量
昭和七年	二四、九七六個	同　八年	二五九、二六五個
同　九年	四四二、一三六、	同　十年	二、八八九、二一三
昭和十一年	三、〇七二、三六一		

フエルト帽子奉天驛到着數量

昭和五年	四三、三九五瓩	昭和六年	一三、六八二瓩
昭和七年	一五、一七七	昭和八年	四六五、五三二
昭和九年	三四九、一六七	昭和十年	三五八、二五八

昭和十一年八月迄の到着數量を示せば次の如し

一月	四二、八四六瓩	二月	五五、九九〇	三月	三七、九四〇
四月	一四、五六八	五月	三一、〇三八	六月	三、四四八
七月	一四、六七二	八月	六〇、七五四	九月	二三、四二六
計	二八九、六八一				

而して右表の帽子はフエルト帽以外の製品も含まれてゐるが、大部分は同フエルト製の帽子と見ても差支へない、日本品の製造元及輸入先は主として大阪、東京方面である。

次に地場製造家と内地斯業者の滿洲市場に於ける競爭上兩者の利害を考察して見るに、

地場業者の有利なる點として加工賃及び動力たる石炭代が內地に比して安價であること、裏地製造の場合運賃負擔が少なく、品損みが少く、得意先の信用狀態が比較的明瞭になり代金決濟に堅實味があり、其の上輸入品に比し運賃其の他の有利なことである。又問屋筋から見る時現地製品を仕入れる場合は內地から輸入する樣に現品ストックの必要がないこと等が擧げられる。一方當地製造品の不利な點は製帽部分品に對して四割乃至五割の高率關稅を負擔せねばならぬ、製品販賣市場が滿洲のみに限られ內地業者に比し市場的不利益等が擧げられる。以上の如き利、不利はあるが、大體に於て當地製造家は販賣方面より見るとき有利な立場に置かれてゐることは爭はれない事實である。

四、關稅問題に就て

フェルト既製帽子の現行輸入稅率は一割五分であり、これが材料たる帽體は製造原料たる理由にて一割であるに不拘、帽子の製造原料にて他に全く使途なきこと明かなる鬘皮リボン裏地等にありては二割五分乃至五割の高率關稅に苦しめられてゐる。

即ち國內製造業者の輸入原料品に對する現行課稅率を示せば次の如くである。

（イ）中折帽子卷用リボン　品質は人絹交織品を主として巾一吋半乃至二吋迄のものを使用する。これが通關に際して課せられる現行輸入稅率は三割五分課稅のときは稅率第一一四號「別號に掲げざる絹織物」の（己及庚）を五割課稅のときは稅番第一一四號の（甲乙、丙、丁、戊）を課せられる。

（ロ）中折帽子用裏地　品質は人絹綿交織品を主として原反の儘輸入せられるもの乃至當地着の土裁斷し得るが如く適宜に裁斷したるもの及裏地仕上げたるものの三種何れかを輸入使用する。これが通關に際し課せられる現行輸入稅率は三割五分課稅のときは稅番第一一四號（己及庚）、五割課稅のときは稅番第一一五號「衣類、同部分品及附屬品」を課せられる。

（ハ）中折帽子用鬘皮　品質は主として綿布に防水ゴムを塗布し眞正皮の如く皮革の型を押したるものにしてイミテーションと判別し得る品を全體の九〇％以上を使用し、一吋半乃至二吋巾に裁斷玉緣飾を一方の邊に付したるものである、これが通關に際し課せられる現行輸入稅率は二割五分課稅のときは稅番第六二四號「擬革布及び油布製品」の乙（擬革

布及び油布製品）を、二割五分五厘のときは稅番第六二五號「リノリューム及別號に掲げざるその他の敷用敷物」より課稅される。

右の如く國內同業者がこれ等附屬原料品を輸入使用せんとする場合は誠に矛盾したる高率現行稅率を以て課稅されてゐる。卽ち上記の現行稅率による課稅原料品を以てしたる國內生產品は到底輸入既製品に對抗することは不可能である。依つて當地斯業者は第三次關稅改正には此の輸入既成品に課せられる稅率同樣程度の關稅を以て課稅されんことを切望してゐる。

六、染色工業

尙紡織工業の一種として染色業を擧げる事が出來る

染色工業が滿洲にて起り得べき理由は、動力其の他の原因の外主として綿布の輸入稅關稅に因る。例を生地綿織物と漂白又は染色綿織物輸入稅に取つて見ると次の通りである。

生地綿織物輸入稅

生地の金巾（シャーティング）及粗布（シーティング）

幅四十吋長四十一碼を超えざるもの

（甲）重量七封度を超えざるもの　反當り　四八〇

（乙）重量七封度を超え五封度を超えざるもの　反當り　一、一〇

（丙）重量九封度を超え十一封度を超えざるもの　反當り　一、二〇

漂白又は染色綿織物

漂白したる無地織の金巾（シャーティング）及粗布（シーティング）

（甲）幅三十七吋長四十二碼を超えざるもの　反當り　一、四五五

（乙）巾四十一吋を超え四十四吋を超えず長四十八碼を超えざるもの　反當り　一、九〇

右にて生地の綿布輸入と漂白染色した綿布の輸入との利不利は一見明かである。

奉天に於ける主要工場としては第一に鐘紡系の康德染色股份有限公司、滿洲染色廠（小西關）を擧げるのみで外には福增湧染色工場（紅梅町三五、投資二萬圓）位のもので營口紡紗廠の第一分廠でも生產能力綿織一萬六千梱、織布一萬五千梱、染色布九萬枚を有してゐ

るが昨年より操業を休止してゐる。

康德染色股份有限公司（日滿合辦）

同社は鐵西南一路に工場を有し昭和十二年一一月の創立に係り代表取締役倉知四郎氏奉天工場長に寺本義一氏を擧げてゐる。投資金五十萬圓にて二千坪の敷地に職工約二百五十名を使用し、各種織物の染色加工業を行つてゐる。其一ヶ年に於ける生産額約六百萬圓を擧げ最近頓に業績の好轉を來し職工の優遇等を實行してゐる。尙原料織物は約八割まで內地鐘紡其の他工場より輸入し地場では奉天紡紗廠より買入、染色を行ひ販路は全滿に及び主として滿人向無地織である。

合資會社滿洲染色廠

昭和八年創立され代表者西尾茂頭氏、投資額十三萬五千圓月産能力五萬反を有するも昨年度約十五萬反の生産高である。

其の外纖維工業會社として目下設立進出を傳へられてゐるものに日滿亞麻股份有限公司がある。同社は長に帝國製麻と原料供給契約を締結して滿洲における亞麻栽培に力を注ぐことになつたが、何分滿洲國の亞麻事業は同國産業五ヶ年計畫中、棉花と並んで主要なものであり、同國所要衣服原料の半分は近い將來において亞麻を以て代替せしめんとしてゐるので、同社としても同地に製品工場を設立し原料から製品への一貫作業を確立すべく今回奉天鐵西に工場を新設することになつた

四、化學工業

1、塗料工業

一、概況

一個文化の發達は交通並に建國の整備に俟つところ多大である。されば滿洲國建國以來建設諸工作の進行に伴ひ塗料の需要は著しく增加し、その輸入數量は目覺ましい激增振りを示してゐる。現在滿洲國內に方ける塗料は奉天鐵西工業地區に工場を有する日本ペイント株式會社奉天工場製品、及滿洲ペイント株式會社ハルビン工場製品を除く以外は外國品の輸入を仰いでゐる狀態である。而してこれを輸入地別に擧ぐれば日本、關東州、中華民國、英、獨、米等であるが、その大半は日本品にして英、米品等は特殊の塗料に限られ數

量に於ては日本品に比較にならず特筆すべきものはない。その輸入額は昭和七年度三四〇、七六八圓(國幣)、同八年度五一八、八九七圓、同九年度八六二、七九二圓、同十年度八五〇、三五六圓、同十一年度八八六、九五五圓を示してゐる。尙塗料原料の輸入年額は昭和七年度一三九、九六八圓、同八年度一八二、八九二圓、同九年度三二七、四九〇圓、同十年度五八一、八八一圓、同十一年度六四四、四四三圓である。上述の輸入額の示す如く滿洲事變後の土建界の活況及各種工業の勃興に伴ひ塗料及塗料原料の需要は著しい增加率を示してゐる。

次に奉天驛に於ける輸移入數量を示せば次の通りである。

昭和七年	四三八、九六〇瓩	昭和八年	九七〇、三〇七
昭和九年	二、三一五、六一〇	昭和十年	二、七〇〇、六六四

十年度輸移入數量を仕出地別に示せば

東京	二、五三〇瓩	大阪	五六一、三五二	神戸	二八、六〇九
內地其他	三六、二四六	朝鮮	一五、八〇六	大連	一、四七五、六一七
安東	三、七五七	營口	三一五、二九一	撫順	四九、四六九
新京	四、九六七	哈爾濱	三七〇	其の他	二〇六、六五〇
合計	二、七〇〇、六六四				

尙每年奉天に於て集散される日本品、滿洲國土產品並に外國品等の集散總價格は約六百五十萬圓に及ぶと謂はれてゐるが、その內約六割五分見當は奉天省、吉林省、濱江省、龍江省等の各省に移出されてゐる模樣である。今奉天驛に於ける昭和十一年度仕向地別發送數量を示せば次の通りである。

新京	一五〇、五三四瓩	哈爾濱	九四、八三六	北滿線	一〇八、一四二
撫順	九三、〇五一	安東	五八、七八五	吉林	四六、二六六
京圖線	二七、三二二	營口	一八、三五〇	大連	三五、二四八
其の他	三五九、六六五	計	九九二、一九九		

奉天に於ける塗料はその殆ど大部分が日本ペイント株式會社奉天工場製品、滿洲ペイント株式會社製品及關西ペイント及東亞ペイント等の日本製品で、諸外國品は特殊なるものを除き見るべきものはない。尤も學良時代には銀關係で日本商品の高値から輸入杜絕し、一方上海方面より主として歐洲品が輸入されてゐたが事變後幾何もなく中絕し再び日本品の獨占舞臺となつた。事變直後の奉天に於ける塗料は滿洲ペイント株式會社製品最も多く市

場を牛耳つてゐたものであるが、昭和八年春日本ペイント株式會社は奉天に出張所を設置し、次いで東亞ペイント、關西ペイント、神東塗料、オリエスント塗料等の各社の進出を見た。一方日本ペイント株式會社は昭和九年九月奉天鐵西に於ける日滿塗料株式會社奉天工場を合併繼承し、現在では從來の富士町出張所を工場に合併し極力外來塗料と鎬を削つてゐる。

二、地場製品と日本品の競爭狀況

奉天に於ける唯一の塗料工場たる日本ペイント株式會社は、昭和八年二月資本金百萬圓(二十五萬圓拂込)の日滿塗料株式會社附屬工場として設立されたるものを、昭和九年九月十一日日本ペイント株式會社が合併し同社滿洲工場と改稱されたるものである。現在の資本金は六百萬圓(拂込三百七十五萬圓)で、當地鐵西工場の投下資本は五十萬圓である。工場面積は建坪數一、二五〇坪、總坪數七、五〇〇坪、工場設備は亞鉛華製造工場、ペイント工場、製罐工場、油ワニス工場、カストル油工場、水瓶工場の六部に分たれてゐる。使用職工數滿人二十二名で、同工場の製品は近時航空機、車輛製作方面に新用途を求めつゝある硝化綿塗料及合成樹脂塗料を除くの外一般建造物塗裝用塗料は凡て同奉天工場に於て製造し需要の大半を充しつゝある。各種塗料原料は植物油は奉山、奉吉兩鐵線方面よりその他の原料は主に日本內地より仰いでゐるが、遠く滿洲、歐米各地よりも輸入してゐる。未だ創業時代のことであり、加ふるに原料輸入關稅の高率、製品輸入關稅の低率及州內品の特惠關稅等の惡條件から輸入製品に壓迫され、現在の生產量は年生產能力八千罐程度に過ぎない狀態である。尙現在奉天には原料を生產すべき油房なき爲同社では將來自社にて原料供給をなすべく折角研究してゐる。

而して現在奉天及その附近沿線に於ける塗料需要年額は約八十萬圓(九萬罐)と見られて居り、各社製品の競爭狀態は之をパーセンテイヂで示せば滿洲ペイント四〇%、日本ペイント三〇%、關西ペイント二〇%、神東、東亞、オリエントペイント合計一〇%であるが、賣上金額より見たるパーセンテイヂは特種高級塗料の賣上高に依り差異を生ずるが日本ペイント四〇%(硝化綿塗料一〇%)、滿洲ペイント三〇%(滿商向安價品大部を占む)、關西ペイント二〇%(硝化綿塗料一〇%)、神東、オリエント、東亞ペイント合計一〇%と見られてゐる

上述の如く現在奉天に於ける二大塗料は古い地盤を有する滿洲ペイント及日本ペイントの兩者にして、日本ペイントの製品は槌印、萬歳印、花印の三種なるもその中萬歳印(白色)の需要は最も大量を占めてゐる。滿洲ペイントは當地千代田通亨和洋行を代理店としA、B、C、Mの四等級あり、從來の販賣關係から滿洲人側に多大の顧客を有してゐる。關西ペイントは稻葉町十八純地岩井商店に出張所を設け扇印ペイントを取扱つて居り、東亞ペイントは千代田通り八番地加藤洋行を代理店とし、神東塗料は同じく千代田通八番地に出張所を設け販賣擴張に大童になつてゐる。尙同社は最近鐵西に工場設立を傳へられてゐる。

三、第三次關稅改正の要望

奉天に於ける唯一の塗料製造工場たる日本ペイント株式會社は操業日淺き今日現行輸入關稅制度の障害の爲め採算覺束無き現狀で第三次關稅改正を控へ、塗料原料の輸入關稅々率の引下げが叫ばれてゐる。言ふまでもなく塗料はその種類多く從つてその原料も多種多樣にして現行關稅率も一樣には斷じ難きも以下塗料の三大原料に就き現狀に基き工場側の希望を述ぶれば次の如くである。

亞鉛華　一ヶ年製造能力四百瓲(十四萬圓)、原料品名亞鉛、原料產地濠洲、加奈陀、原料輸入關稅稅番及稅率第二〇八號一〇%にして、製品輸入稅稅番及稅率第四七七號一二、%五である。

亞鉛華は白亞鉛ペイント用原料として使用し、他にゴム、マッチ、化粧品、醫藥用に供せられる白亞鉛ペイントは該工場製亞鉛華及滿洲產油脂を使用し、普通品との競爭は比較的有利なるも現在此の種高級塗料は免稅輸入多きため該工場の需要は少ない。

鉛　丹　製造計畫せしも採算不引合に付中止してゐる。計畫能力四五〇瓲(十一萬圓)、原料品名鉛塊、原料產地米、濠、加、輸入關稅稅番及稅率第一九〇號、百斤に付四圓二十九錢從價三五%に當るが、製品輸入關稅稅番及稅率第四六六號百斤に付六圓六十三錢從價三五%に當る。

上記の比較よりすれば原料及製品從量稅は一見原料に對する方輕きも從價よりすれば變りなく採算不能である。國內に於ける需要は相當に上るも右の如き稅率の不合理により地場建設を中止した。而も免稅品多く之に對抗するが如きは絕望にして又一度設備完了後は

恒常的に相當數量を生産するに至るが國内需要のみに依存するは危險なるも昨年十一月二十日、國内に保税制度施行せられ幾分愁眉を開くに至つた。

油性ワニス　原料の三五%を占める松脂は現在東印度及蘭領印度より輸入されてゐるが、輸入税率は百斤に付き二圓七十二錢從價二〇%に當り、その他植物性ターペンチン從價三五%鑛物性ターペンチン從價四五%の高率であるが、製品輸入税率は僅かに一五%に過ぎなく採算絶望で現在では半製品及製品のまゝ日本本社より送付を受けてゐる現狀である。以上の次第から及原料の輸入税率はワニスの一五%に對し少くとも從價一〇%迄引下げられんことを希望する。

以上の他各種ペイント原料及容器原料たる薄鐵板及鐵力板に對する過重なる輸入關税の引下げが叫ばれてゐるがこれ等の詳細は後日改めて説明することにしこゝではその一例を示したに過ぎない。

尙滿洲國内に於ける塗料工業の前途に横たはる困難は前述せるが如き製品に對して割高なる現行原料輸入關税率のみではない、現行の原料に比し割安なる製品輸入關税すら國産原料使用の空名の下に免れてゐる關東州内同業者の存することである。この實證困難なる國産原料使用の條件の下に特惠關税の恩典を關東州内工業者に與へ、さなきだに不利なる生産條件と苦闘しつゝある國内工業の萠芽を摘むの結果を來しつゝあるが如き、一日も早く國内工業助成の見地より此の不合理を是正されん事を切望してゐる次第である。而も國内工業にとり不利なることは現在軍用諸材料に對して與へられつゝある免税運賃半減の制度の存することである。即ち此の恩惠は原料品には及ばないので國内工業を壓迫することは主要原料の多くを海外に仰ぐ塗料工業に於ては特に大なるものである。此の苦境より國内工業を救出する爲前記の通り保税制度の實施された譯であるが尙其の不備を免れず一層の完備は今後に俟たねばならない。

四、國内塗料工業の將來

言ふまでもなく滿洲國は大豆、小麻子、大麻子、蘇子等の植物性油脂の世界的寶庫にして、此の内乾性油たる蘇子油、小麻子油、大豆油等の種子は塗料原料用として主要なる位置を占め年々日本及歐米諸國への輸出は多額に上つてゐるのであるから、此の豐富なる原

料を利用する國内塗料工業の將來は實に有望なりと言はざるを得ない。顧るに日本の塗料工業が顔料の原料である亞鉛及鉛と油脂の三大主要原料を總て輸入に仰ぎながら、明治維新後の一般的經濟發展の波に乘つて鐵道、海軍兩省の國產奬勵政策の下に僅に半世紀の間に外國品の輸入を完全に防遏し、而も近年海外市場に進出し昭和九年度に於ては年額二ら百七十餘萬圓に達する輸出高を示すに至つたが如き目覺しき躍進を遂げた次第を考へるなば、今後滿洲國に於て亞鉛及鉛の二大原料乏しとするもこの豐富なる油脂を利用し得る我が塗料工業は國家の工業政策、關稅政策が當を得るならば躍進滿洲國の軍需重工業、鐵工業、その他の諸工業の發達並に文化の向上と相俟つてその將來は誠に有望極りないと信ずる次第である。

2、藥品工業

1、大同生藥株式會社

同社は大同產業株式會社が其全株式を所有してゐる子會社であつて資本金百萬圓全額拂込、社長に大同產業の川本靜夫氏が當り、專務取締役は秋野公顯氏である、鐵西工業地區に二四、〇〇〇平方米の工場を擁し、七〇〇馬力の動力機三台を以て一〇〇名の職工と二〇名の從業員を使用してゐる、今同社の主要產品並に昨年度生產高を揭げると次の通りである。

精製蓖麻子油	四五、〇〇〇瓩	精製花油	五五、〇〇〇瓩
油粕	一六〇、〇〇〇瓩	キフエドリン製劑	二、五〇〇瓩

而して主要製品は蓖麻子油であつて主として航空工廠に納入してゐる、尙同社の特に誇りとしてゐる所は、之等の製品の悉くが自社の農場にて自ら生產したものであつて農工一貫作業を行つてゐる事である。而して農耕地一五、〇〇〇町歩に及び小作人六、〇〇〇名を使用し主として科學的經營を行ひ一般農業を啓發せしむべく努力してゐる、此の事は尙未だ規模少なりとはいへ農場の工業化延いては滿洲國の自給自足に示唆する所ありとして同社の今後の活躍を期待されてゐる

2、股份有限公司乾卯工業廠

同社は投資額一〇萬圓、代表者に平松石男氏を擧げ鐵西工業地に五、〇〇〇平方米の工場を有し、昨年四月操業を開始し、豐酸二五萬封度、硫化曹達一〇〇萬封度、甘草エキス一〇萬封度の生產能力を有し、味噌醬造原料其他の需要範圍廣く將來を嘱望されてゐる。

3、鶴原藥房工場

鐵西南四路三に工場を有する鶴原藥房は投資額三十八萬圓、代表者鶴原文雄氏を擁し、アストマトール、電池用蒸溜水其の他工業藥品を生產し、能力年産算十萬圓に達し、奉天藥品工業界に於ける一方の覇者である。

3、石・鹸工業

滿洲に於て供給される石鹸は歐洲大戰前までは歐米品を以て占められてゐたが同戰爭が勃發するに及んで本邦商品之に代り其の後一時排日貨の影響を受けて本邦品は壓迫せられたが昭和六年の滿洲事變後は日本品は輸入品の九割九分迄を占むるに至つた。而して其の輸入貿易額は次の通りで昨年度總額洗濯化粧石鹸併せて約三百萬圓に達し、滿洲の需要の過半數は輸入品を以て占めてゐる現狀である。

洗濯石鹸及化粧石鹸輸入金額　（單位圓）

年度	洗濯石鹸	化粧石鹸
昭和七年	九九四、九八〇	九九四、七八〇
昭和八年	三八六、六七〇	一、一八五、六〇七
昭和九年	八九一、四〇二	一、一三〇、一五二
昭和十年	九一二、八九六	一、二九三、八一九

然らば滿洲では石鹸工業は成立しないものかといふと目下の所遺憾乍ら肯定せざるを得ない。是が原因は原料生産其の他の自然的條件もあるが、大部分は輸入關稅の引下げと云ふ外的條件によるものである事は疑ふ餘地がない。滿洲事變當時の奉天には相當多數の石鹸製造者あり是等は着々基礎を固めつゝあつたが、滿洲國成立後の第二次關稅改正は在滿石鹸工業者の期待を全く裏切つた。改正前の稅率は

化粧石鹸	稅番第五〇〇番	正稅 從價	三〇%	附加稅 從價	五%
洗濯石鹸	同 第四九九番	正稅 每瓩	大洋九元拾七錢	附加稅 正稅の	三%
	同 第四九九番	甲號一個の重量七オンス以上のもの			
		正稅 從價	二〇%	附加稅 正稅の	五%
		乙號其他のもの			
		正稅 從價	三〇%	附加稅 正稅の	五%
		正稅 從價	一〇%	附加稅 正稅の	五%

であつたが然るに現行稅率は

斯樣に洗濯石鹸の輸入稅率は一率に引下げられて打擊を受けたに對し、原料品の輸入稅は反對に引上げられたが爲に斯業者は將來の希望を失つた、今原料品の新舊稅率對照を示

せば次の通りである。

		新稅率	舊稅率	附加稅
油脂類	正稅捨	二、圓七三	二、圓七三	各正稅の五%にして新舊同率なり
鄭子油	正稅捨	五、二七	二、七〇	
松脂	正稅捨	二、七三	一、四〇	
苛性曹達	正稅捨	二、九三	一、五〇	
硅酸曹達	正稅捨	一、九五	一、〇〇	

斯の如く不利なる情勢に陷つた石鹼製造業は全く崩潰の一途を辿るべく餘儀なくされた

今改正前に於ける在奉天工場を示せば次の通りである。

1、日本人關係のもの

奉天末廣町一二　同和石鹼製造所　奉天十間房二區　平安公司工場

奉天皇姑屯沙子溝　大丸石鹼製造所　奉天紅梅町三三　新光合石鹼工場

奉天末廣町　新田石鹼工場

2、滿洲人關係のもの

奉天小西門外　振昌公司外十三軒

3、改正當時の新設工場

若松町四六　河田商會　奉天芳野通　奉茂石鹼工場

奉天皇姑屯　野島石鹼工場　奉天南埠地　加藤石鹼工場

奉天青葉町　寺原石鹼工場

合計　二十四工場

處が前記關稅改正後は

1、日本人關係のもの

奉天末廣町一二　同和石鹼製造所

若松町四六　河田商會

2、滿人關係のもの

奉天大北關　瑞光工廠　奉天小西關　福泰長

奉天大西關　泰合廠　奉天大北關　南茂魁

奉天小東關　東興和

となり在奉天石鹼製造業の廢退の狀況は實に慘憺たるもので之は畢竟前述の通り外的條

件の然しむる處に外ならず、爲に新業者にありては之が改正の急を切望してゐる。

尙之が切抜策としては製品關稅上洗濯石鹼の製造を中止して化粧石鹼の製造なれば採算引合はざるやとの意見もあり研究も行はれてゐるが、何を申せ之には五萬乃至六萬圓の資金を要する事であり早急に着手も困難の模樣である。其の他副產物としてグリセリンの製造等も考へられぬ事はないが何れにしても資金の問題で兎も角目下奉天に於ける斯工業者は近く公布を見る第三次關稅改正の結果を見た上態度を決する見込で本年は何れも生產を見合はせてゐる。

尙現在奉天に於ける主要工場を紹介するに末廣町十二の同和工廠は工業油脂大連株式會社の出張所で昭和八年四月に創立され資本金五十萬圓(拂込二十五萬圓)で代表者松村隆祐氏を擧げ昨年度は各種洗濯石鹼五、九八八箱、二五、五五〇圓、蠟燭四、二七二箱、二〇、五〇五圓を擧げたが本年は休止の模樣である、因みに同社生產能力は概算十七萬圓である。

其外には河田商會(昭和十年創立、代表者河田政信氏、投資五千圓)あり昨年約五千圓の生產にて能力概算十八萬圓なるも本年は同じく生產休止の模樣である。

以上の外化學工業としては次の諸工場を擧げることが出來る。

1、柏內化粧品製造所

一、所在　奉天加茂町十三番地　六、營業種目　化粧品製造
二、本店　奉天小西門裡　七、一ヶ年製造高　金七十五萬圓也
三、資本金　金參拾萬圓也　八、使用人員　百二十名
四、代表者　柏野菊太郎　九、製品のマーク　三塔碑
五、組織　合資會社

2、奉天酸素製造公司

一、所在　若松町三八　五、營業種目　空氣液化分溜法による酸素瓦斯製造
二、資本金　五十萬圓　六、一ヶ年製造高　二十二萬圓
三、代表者　谷井嘉次　七、使用人員　鮮滿人　二五名
四、組織　合資會社　八、沿革　大正十五年八月創立

尙アミノ味の素製造工場として伊豫組化學工場(若松町四八)があるが昨年來操業を休止してゐる。

五、醸造業

一、麥酒醸造業

(一) 概說

從來一般に酒や麥酒は內地の本場製でなければならぬと云はれてゐたのであるが滿洲事變を契機としての情勢一變は資本家をして漸く此の方面の事業に着目せしめ今や奉天には滿洲麥酒、亞細亞麥酒の二大工場設立せられ斯業の基礎確定せられるに至つた。

先づ需要方面より見るに事變前年度以來の增加振りは次の通りである。

年度	消費數量	割合	年度	消費數量	割合
昭和六年(事變前年度)	一七〇、〇〇〇(函四打入)	一〇〇%	同 七年	三六〇、〇〇〇	二一二%
同 八年	四三〇、〇〇〇	二五三%	同 九年	四八〇、〇〇〇	二八三%
同 十年	五四〇、〇〇〇	三一八%	同 十一年	六〇〇、〇〇〇	三五三%

實に三倍半の激增振りである、是は次の通り在滿邦人の異常なる激增に依ても當然肯かれる所である。

年度	人數(內鮮人を含む以下同じ)	割合	年度	人數	割合
昭和六年	二九、五二五人	一〇〇%	同 七年	四〇、二六二	一三六%
同 八年	五五、五一四	一九二%	同 九年	六〇、〇六二	二三六%
同 十年	八七、三四七	二九六%	同 十一年	八九、九六〇	三〇五%

尙滿洲人の需要をも見込めば前揭消費率の增加原因の一班が窺はれる。勿論今後とも此の率を以て年々增加するとは考へられないが消費百萬箱に達するのも近い將來と信ぜられる。

然らば此の需要に應ずべき工業條件は如何であるか。消費者存在するとて必ずしも其の土地に工業の發生するとは限らない此の點に於て滿洲殊に奉天は水質、動力、勞力、交通、背後關係の諸條件に最も惠まれてゐる。此の點は既に總論に於て詳述したから省くが只原料關係に於て稍々缺くる所あるは遺憾である。麥酒の原料は主として大麥、ホップ、碎米であるが此の中碎米は豐富なる生產を有する滿洲米を以て十分其の需要を充し得るから只其の品質の改善に留意すれば良い。

處が前二者の大麥にホップは滿洲に於て產出しない事はないが其數量微々たる上に品質不良であり、從て現在の滿洲麥酒及亞細亞麥酒の二社も之をチェッコ、スロバキア及ドイツ

邊りより輸入してゐる現狀であるが、今後の需要量を百萬箱とすれば毎年滿洲に如何程の原料が輸入されるかを示すと次の通りである。

ホップ	八〇、〇〇〇瓩	金三二〇、〇〇〇圓
大麥	七、〇〇〇瓲	五六〇、〇〇〇
計		八八〇、〇〇〇

是は勿論金額の上よりすれば微々たるものであるが此の推定消費量も尙現在大阪に於ける一ヶ年需要量百二十萬箱に及ばざる點及將來滿洲の國境を越えて出づる時期に到れば二百萬箱に達する事も考えられて居る現狀に至る以上之が自給自足を考究し置くも決して徒勞ではとない信ずる。

從て現在實業部當局並に事業家に於て近年熱心に原料研究試作中であり不遠國產を使用し自足の實を擧ぐるに到る事と思はれるが此の所、當分の間は日本の麥酒業と同樣內地產及外國產を使用してゐる有樣である。よつて先般來滿洲產業開發奬勵の爲公私產業團体に於て麥酒の原料材料全般に亘り輸入稅金の請願運動が開始され關係各當局へ陳情中である

最後に稅金關係を述べると石當り十八圓弱一本當り約六錢二厘となる。日本產麥酒を滿洲に輸出する場合既納造石稅は拂戻しを受けるが、滿洲にて四打一函當り六圓以上の課稅を受ける、之に反して滿洲產は一函當り三圓の造石稅のみである。此の外運賃荷造費等の差異より日本產の輸出は採算上到底不可能にて又現在滿洲にては國外輸出に對し造石稅拂戻の法規はないが將來この制度が出來れば北支其の他國外進出には益々有利の立場を供せらるゝ事となるであらう。

（二）奉天に於ける麥酒釀造業

從來奉天に消費される麥酒は總て日本內地より輸入されてゐたが、昭和九年五月奉天鐵西工業地區にはじめて大日本ビール、キリンビール合同の滿洲麥酒株式會社設立され十一年四月から製品を上市した。次いで昭和十一年四月亞細亞麥酒股份有限公司の進出を見、本年五月には製品を販賣する豫定でめる。一方サクラビール側ではサクラビール資本系の康德麥酒株式會社を鐵西工業地區に設立して開始すべく工場用地約三萬坪を借地契約し、滿洲麥酒界に活躍せんと事業許可方を當局に申請し、工場設立の準備を進めてゐたが、當局統制方針上遂に事業認可とならず、鐵西工場用地に關する一切の權利を滿洲麥酒株式會社

に譲渡し、滿洲麥酒界への進出は中止することになつた。

今參考迄に奉天驛に於ける輸移入數量を年別に示せば次の通りである、（單位瓩）

昭和六年	九六四、三三七	昭和七年	四、七一三、三九九
同　八年	六、二五九、八二〇	同　九年	四、一五二、五八五
同　十年	四、八四三、五八三	同十一年	三、五〇五、四二九

備　考　十一年度數量中十二月分は推定による

該年度の數量の減少せるは同年四月より滿洲ビール製品の上市されたるに關聯する見越減少によつたものである

(三)　以下奉天に於ける麥酒工場内容を示せば次の通りである。

一、滿洲麥酒株式會社

同社は大日本麥酒株式會社とキリン麥酒株式會社の合同出資による昭和九年五月二日の設立で、資本金二百萬圓（全額拂込）で全株の約九割は麥酒共同販賣會社が所有してゐる。工場を奉天鐵西工業地區南五路に設置し工場敷地總面積は一〇〇、七五〇平方米である。同社の役員は專務取締役淺野長藏、高橋龍一郎、取締役永井熙八、山岸長之助松本新太郎、毛見信治、監査役大河原太郎、片岡隆起、高橋眞男の諸氏で奉天第一工場長（サッポロビール工場）に廉生重行氏を第二工場長（キリンビール工場）に津田武治氏を配してゐる、而して第一工場は昭和十年十二月より仕込を開始し、十一年四月中旬より衆知の通り豊醇なる地場製品としてサッポロビールを上市一般の好評を博したが第二工場は既に機械の据付を終了し昨年十一月二十九日より仕込を開始し既に本年三月中旬より滿洲產のキリンビールを一般市場に販賣してゐる。其の外清凉飲料水一ケ年一五萬函を生產してゐる。而して同社生產能力は滿洲國内統制上第一工場十萬箱第二工場十萬箱、となつてゐた所處に鐵西進出を企圖した康德ビールの權利を買收生產能力三十萬箱（兩工場各十五萬箱）に對し當局の認可を申請中にて滿洲國ビール需要の激增と共に國内ビール統制に伴へて愈々近く日本法人を滿洲國法人に改組積極的に乘り出す事となつた。

二、亞細亞麥酒株式會社

麥酒共同販賣會社の純然たるアウトサイダーにして一般から其成行を嘱望されてゐるのに亞細亞麥酒股份有限公司がある、會社は昭和十一年四月三十日の設立認可により滿洲國法人として七月一日の創立總會を經て、七月八日設立登記を完了したもので工場は奉天鐵西工業地區に五八、三七平方米の敷地を擁し資本金は現在百萬圓（全額拂込濟）であるが本年中に倍額二百萬圓に增資の豫定である。同社の役員を見るに社長森脇松一郎、專務取締役橋本專藏、常務取締役八幡行策、取締役安本敬造、助川直人、花田卯造、監査役藤家六郎、沼田正一、三宮茂原吉雄の諸氏で奉天工場長に東武雄氏を配してゐる。而して工場の建設は昭和十一年五月二十八日より百萬圓の工事費を以て着工したが既に工事の竣工を見同年中に機械の据付其の他の諸設備を完了し本年一月操業を開始し六月迄には嶺新

なら商標地球儀を配したる新製品アジアビールを上市する筈で一般上戸當より待望されてゐる、而して同社は生産能力四十萬箱を有するも統制關係で十二萬箱となつてゐるが將來此の倍數二十四萬箱の生産許可を申請中であつて・從々今後の發展に拍車を掛けるべく豫想されてゐる

二、日本清酒釀造業

一、概　說

大體滿洲に於ける諸工業は總論に於ても述べて置いた通り事變後格段の進展を來したのであるが、日本酒の釀造業に於て殊に然るを見る、特に事變後の斯業新設が殆んど奉天を中心としてゐる所に其の特異性があるのだが事變前の滿洲に於ける日本酒の釀造は大連滿洲清酒株式會社（明治三十九年設立、資本金百萬圓、四分の一拂込）公主嶺淺野釀造場外二、三の酒造場で爲されたに過ぎなかつた、然るに當時清酒の釀造は水質の研究十分に行はれず氣候の關係や、酒槽材料蒐集の不便等あり他方主觀的理由として日本酒は本來在滿日本人間のみに消費せらるゝものであるが、在滿日本人の多くが理由なしに內地釀造の酒を好む關係上滿洲の日本酒釀造は一般に不振を免れず特に前記滿洲清酒會社は創立以來常に缺損續きであつて大正十四年來殆んど廢業の形にあつた。併し乍ら滿洲に於て日本酒の釀造業が不可能かと云ふに是は現在奉天に櫻屋酒類株式會社外數個の工場が事變以來着々業績を擧げてゐる事からして寧ろ其の將來性を持つてゐる事が肯かれる。一體釀造工業に就ては水質に原料米供給如何が最も重要要素であるが水質に付ては工業條件の所で詳說したから省くとして原料米の供給に付き一言する。

滿洲は從來產米に適する事は衆知の通りであつて殊に奉天以南は其の產出豐釀を證され奉天に於ける主要精米工場の精米高は昨年度年產約四〇〇車六萬石であつて供給は十分であるが遺憾乍ら日本清酒の釀造には今の所不向である。尤も奉天には滿洲米を原料として釀造してゐる工場もない事はないが大部分は朝鮮米乃至內地米を輸入して原料に充してゐる從つて將來滿洲米の品質改良さるゝに到らば、兎も角目下の所輸入米に俟つ外はない。そこで問題になるのは此の輸入稅であるが之は事變前より無稅であつて此點頗る惠まれてゐる。

參考迄に昭和七年より十年迄、日本及朝鮮よりの米及籾輸入數量を示すと次の通りである。

米及粃輸入數量表

年度	數量	年度	數量
昭和七年	一三六、一八八	同八年	二九八、九六五
同九年	三一五、〇一四	同十年	三六九、五五四

次に需給關係であるが消費者は勿論在滿日本人が主であつて近時日滿兩國人の交歡頻繁を加ふるに及んで嗜好の同化傾向よりして漸次滿人に消費が見られつゝあり又當業者は其の方面の努力に怠りないが未だ尙前途遼遠である。

そこで現在の所日本人の消費であるが、一人當消費量は內地に於ては七升であるが、滿洲は約一斗であつて事變當時より二升乃至三升減少してゐる、之は滿洲社會狀勢の落着くに從ふものであつて內地と氣候其他の異る關係上大體此の程度の消費量が妥當と思はれる之により全滿消費量を見ると次の通りである。

昭和十一年度全滿日本人及朝鮮人々口　五九〇、七六〇（滿洲帝國年報）

一人當酒消費量一斗として　全滿消費量五九、〇七六石

滿人の消費階級を總人口三千萬の一厘とし消費量を日本人の半分として　一五、〇〇〇石

計　七四、〇七六石

約七萬四千石の年消費量となる。

之に對し生產としては先づ奉天に於ける十三工場の昨年度生產は二〇、二六〇石である奉天の生產は大體全滿のそれの半數を占めて居るから全滿生產は約四〇、〇〇〇石である

次に供給方面にして重要なのは內地酒の輸入である。

試みに事變以來內地及朝鮮よりの清酒輸入數量を示すと次の通りである。

日本清酒輸入數量

年度	數量（單位升）	價額（單位圓）
昭和七年	一、九五四、七六七	二、六二八、一三四
同八年	二、四二一、九四八	二、四三三、〇〇二
同九年	二、四二六、五二八	二、二一六、〇六七
同十年	三、四〇八、七三七	二、七三三、三七六
同十一年	三、〇五八、〇〇二	二、四九六、八七〇

註、百立を五斗五升、百斤を四斗として換算せり

右の輸入量と在滿工場生産高を合計して全滿清酒供給量は約七萬石となり大體需給償ふ程度である。

將來に就て考へると在滿邦人の增加するにつれて需要も亦增加を辿る事は疑なき事實であると同時に商品の大衆的嗜好性を有する以上企業としての將來性は約束付けられてゐるが差當り企業家の關心事としては右の統計によつても分る通り滿洲釀造の清酒に邦人の嗜好を轉換せしむる事と膨大なる消費層を占むる滿人の需要を換起する事でなければならない。

次に日本地酒の輸入に就ては第一次關稅改正に於て樽入のもの担當り三五圓一〇錢が二四圓になり瓶入のもの十二升當り一七圓九四圓、一升當り一圓四四九錢五厘が一立當り四十錢(一升當り七三錢)に低減され此の結果は前掲輸入統計にも現はれてゐるのであるから企業家としては徒らに輸入數量に囚はれず專ら嗜好の轉換に注意するべきであらう。

以上で概說を終り次に奉天に於ける工場を紹介する。

二、奉天に於ける釀造工場

1、嘉納酒造株式會社

同社は本店を青葉町二番地、工場を鐵西南四路三三及三五號地に置き資本金五十萬圓、拂込三十萬圓である、同社は白鶴の嘉納合名會社々長及其の社員の出資により昭和九年八月設立せられたものであつて從て關係當務者も亦同社員が業務經營に當り釀造方法は總て白鶴式に行つてゐる。原料米は內地朝鮮より輸入し釀造貯藏其他にも種々設備を講じ在滿邦人の嗜好に適さんと努力してゐる。建物坪數二千五百坪を擁し年生產六千石の能力を有し昨年度は尙約二千五百石の生產にて尙十分の餘力を有してゐる、因に製品は金鶴の商標にて產出し一般の好評を博してゐる。

2、株式會社本嘉納商店

本社は兵庫縣御影町にて奉天工場は鐵西南二路二九、及び三三號に昭和十年一月設立し約一千六百坪の敷地を擁し年生產五千石、昨年度一千六百石の生產を擧げ滿洲菊正宗の商標を以つて廣く在滿邦人の嗜好に投じ販路は南滿を始め北滿にも及んでゐる。尙同社は資

本金五百萬圓全額拂込にて奉天工場投資は約三十萬圓、代表者に嘉納治郎右衛門氏を擁し奉天工場代表者に田口新八氏を擧げてゐる。

3、櫻屋酒類株式會社

奉天紅梅町四一に工場並に事務所を置く同社は昭和九年十月の創立に係り、同十年六月第一回定時株主總會を開き取締役社長田中卯三郎、專務取締役長坂雄二郎、同上西勝二の諸氏監査役に芦田作太郎、岡田信太郎の兩氏を擧げた。

同社は昨年四月にて營業第二年度を迎え同年度より清酒慶典の外に滿洲櫻の新商標の下に新酒を販賣したる處大體豫期以上の好評を博し生産高同年度三千三百石を擧げてゐる。而して其生産能力は六千石であつて昨年度生産は約其の半數であるが、同社では能力に拘泥せず堅實なる經營を行ふ爲販賣事情に應じた醸造を行つてゐる。因みに同社では上記製品外燒酒、味淋、洋酒を醸造し販路は全滿に及んでゐる。

4、千代乃春合名會社奉天工場

同社は本店を廣島縣に有し奉天支店は昭和八年九月の創立に係り、昭和十一年二月末迄千代乃春奉天支店と稱し本支店の關係にあつたが、同年三月組織を變更し千代乃春合名會社とした。投資額二十五萬圓、代表者竹尾三郎平氏業務執行代表者黒住孫市氏にて清酒金冠千代乃春及び、千代乃春の外に旺盛、祥福の清酒、布袋燒酎、千代味淋等を製造し生産能力五千石、昨年度は二千一百石の生産を擧げてゐる。尙同社工場は若松町五〇にある。

5、株式會社滿洲千福醸造場

同社は昭和八年十二月に創立され若松町七二番地に工場を有し、投資額五萬圓全額拂込にて二千三百坪の敷地を擁し清酒千福の醸造能力八千石昨年度は約五千石の生産を擧げてゐる。

6、中野醸造工場(若松町六(三))

同工場は中野種一郎氏の個人經營に係り、昭和七年八月二十日を以て創立せられ醸造期には日本人二十名滿人十名を使用し一ヶ年三千石の清酒を醸造してゐる。

其の他旭酒造合資會社(加茂町十、投資二萬二千圓、代表者岡松虎市)では、旭鶴旭正宗の醸造を行つてゐる。

三、高粱酒製造業

一、概　況

從來奉天は滿洲に於ける高粱酒の主要生產地であり且集散地として重要なる地位を占めてゐた。卽ち淸朝時代に於ては吉林南方諸縣、法庫、鐵嶺、楡樹、八面城等の各縣の生產高粱酒は何れも長途馬車で一旦奉天に搬入され、更に營口に移出し此處より南北支那各省に輸出されてゐたものである。中華民國初年(大正元年)頃に於ては奉天城內を距る二十滿里以內に約十五軒の釀造業者あり、其の生產能力は各工場共大體日產四五班(註一班は高粱六石乃至七石を以て燒酒六百斤乃至七百斤を生產す)を以て操業してゐたが年生產高は一千萬斤以上に達してゐた模樣である。當時の高粱酒販賣業者は百八十餘軒の多きに上り事實上高粱酒釀造業の旺盛時代を現出してゐた。然るに事變以來農村の疲弊、匪賊の跳梁、支那海關稅の束縛並に價格昂騰に依る輸出不振等の關係から斯業者は大打擊を蒙り倒產廢業するもの續出するの到つた。

然るに事變後滿洲國の機構漸く整備さるゝに從ひ、一昨年は年產七八〇萬斤であつたが

現在實業部の調査に依れば昭和十一年々產八千萬斤(能力一億三千斤)を算し滿洲全體の生產一億五千萬斤(定推能力三億斤)の五割を占めてゐる。從て今の所需給一杯々々の模樣で餘力は漸次中華民國邊りへ輸出してゐる。試みに昭和七年より昨年までの輸出狀況を示せば次表の通りで此の中大部分中國仕向けである。

高粱酒輸出表

年度別	數量(斤)	金額(圓)
昭和七年	三、〇五八、五〇〇	六〇六、五二八
同　八年	一、五四七、一二八	二七七、九七二
同　九年	二、八三三、五三六	三五〇、二〇七
同　十年	三、五四九、四四〇	四四三、八一五
同十一年	三、七八四、九四一	五五一、二七一

現在奉天に於て日本人經營工場としては鐵西の滿洲造酒と加茂町の隆泉海の二である。之に對し滿人側では前述の通りの盛衰を續けて來てゐるのであるが、近時彼等は資本の行

き詰りより稅金支拂期前に急いで投賣する傾向がある爲に市場を攪亂する事が一再でないの其他或ひは脫稅其の他の廉賣等を行ひ、其の不規則な經營振りは日本人工場としていろ〳〵迷惑を受けてゐる。尤も之等の工場を適當に整理すればよいのであるが、彼等の生活或ひは面子より無理な事も出來ず、從て滿洲造酒邊りでは之が指導者たるを以て任じ斯業界の改善を計つてゐる。

二、新酒稅法の影響

從來は牌照稅(販賣許可稅)一軒當り年三十二圓と一班に對し十四圓六十錢の酒稅が徵稅されてゐたが、新酒稅法に依れば牌照稅は全廢されたるも一班につき二十五圓乃至二十七圓見當の課稅に應せねばならぬことゝなり、釀造業者は從來の約倍額の負擔を余儀なくされた譯である。尙高粱酒の消費者は一般農民、勞働者階級が大部分を占めて居る關係上新酒稅法による價格の値上りは高粱酒の消費數量を著しく減少せしめたと謂はれてゐるが、さなきだに苦境に喘いでゐる斯業者の前途實に慘たるものがある。

以下奉天附近に於ける日本人及滿洲人側斯業者の工場調査を示せば次の通りである。

三、奉天に於ける主要工場

(イ) 日本人側工場

滿洲造酒株式會社(滿洲國法人)

同社は昭和八年八月鐵西南二路に資本金六〇萬圓(全額拂込濟)を以て設立され、代表者赤司初太郎氏奉天工場代表者に本村仁一氏を擧げ敷地一、六九一坪從業員八〇名を擁し年生產能力高粱酒二萬石、紹興酒(寶友、菊泉)五百萬斤にて、昨年度は高粱酒の方は前年度持越量の爲休止したが紹興酒を百三十六萬斤生產してゐる。販路は全滿及關東州より更に東京、大阪、長崎方面にも擴げてゐる。尙同社では紹興酒を以て滿洲地場に於ける紆理に最適のものとして種々販賣に努力し近來好評を博してゐる。

隆泉海燒鍋

加茂町一〇番地、大正十三年設立されたる合資會社にして代表者木村千卷。氏投資額一〇萬圓にて日產高粱酒三班の能力を有し、昨年度生產高三千二百石と事變前の二、〇八七石より一割五分の增產である。

滿洲特產工業株式會社

理研酒（樂天）日產三十石、昨年度六四五石、概算二八、八〇〇圓、高粱酒日產四五石昨年度一、一九九石、概算四八、〇〇〇圓を擧げ目下相當の成績を收めて居り、尙ウキスキーの試驗醸造をも行つてゐる。尙同社の內容は製粉工業の項にて詳說する。

（ロ）滿人側工場

主要八工場の少しく詳細に調査したものがあるから之を一括して次に示さう。

工場名	所在地	資本金	生產高（昭和十一年度）	生產能力	職工數
東興泉	小東關	十五萬圓	八五〇、〇〇〇斤	五班每日三、二〇〇斤	九二名
義盛泉	城內木廠	五萬圓	一、四〇〇、〇〇〇	三班同 二、〇〇〇斤	六三名
永成源	北市場	五萬九千圓	一、三八〇、〇〇〇	三班同 一、九〇〇斤	七〇名
萬隆泉	小東邊門外	六萬圓	一、一五〇、〇〇〇	四班同 二、五〇〇斤	七〇名
永興海	小新民屯	四萬圓	一、二五〇、〇〇〇	三班同 一、八〇〇斤	五三名
醴泉湯	平羅堡	五萬圓	九五〇、〇〇〇	五班同 三、〇〇〇斤	七三名
乘隆泉	城西沙嶺	六萬五千圓	九九〇、〇〇〇	四班同 二、四〇〇斤	六二名
永隆源	大西門外	六萬四千圓	一、二〇〇、〇〇〇	二班同 一、二〇〇斤	四四名
計		五十三萬八千圓	九、一三〇、〇〇〇	二九班同一八、〇〇〇斤	五二七名

四、醬油味噌釀造業

一、沿革

醬油の原料は大豆、小麥、食鹽の三種であつて、何れも滿洲に於ては豐富に產出する。たゞ此原料の內大豆と小麥は日本內地に比較して割安であるが、獨り食鹽は鹽稅として百斤につき國幣六圓を徵收せらるゝから、非常に高價となるのである。

滿洲國に於ては、今から三十五年前には全く醬油と稱するものがなかつた。光緒二十六年（明治三十四年）に至り奉天習藝所（監獄）は浙江省紹興地方より杜氏を招聘し囚人を使用して南方式醬油の釀造を開始した。是れ我滿洲に於ける醬油釀造の嚆矢である。而して其以前は如何なるものを使用して居つたかと言ふに、醬油の類似品に靑醬があり味噌の代用品には大醬があつて、現今に於ても都鄙を論せず各家庭には必ず此の大甕が排列してゐるのを見受くるのである。併しながら之等の釀造法は極めて原始的であつて製品も亦た一

種の臭氣を有し甚だ劣等と言はざるを得ない。

光緒三十四年（明治四十二年）浙江省人姓王なるものが、初めて奉天大東門外に大同醬業公司を創業した。恐らく官業に於ては奉天習藝所、民業に於てはこの大同醬業公司が我醬油醸造業の滿洲に於ける鼻祖であらう。南式醬油が、青醬や、大醬に比較して頗る美味であることが一般に認められるやうになつたけれども比較的高價であるために未だ大衆的に普及するに至らなかつた。其後民度の向上と共に醬油の需要は著しく增加し、斯業の有利なる事が知れてから民國九年（大正九年）以後には殆んど毎年一、二工場づゝ增設せられ、滿洲各都市に於ける著名なるもののみでも既に滿洲側九十九工場、日本人側三十八工場を算するに至つたのである。

又邦人經營の工場に就て見るに明治三十七年十月、日露戰役當時御用達商より滿洲軍倉庫に對し「滿洲に於て味噌醬油を醸造し軍に供給せば甚だ有利なるべき旨」の稟申を可とし直ちに陸軍大臣の許可を得て同年十一月滿洲軍倉庫自ら之を直營する事にした。當時遼陽西關に於て先づ味噌の醸造を開始し、翌明治三十八年二月更に醬油の工場を設置したが、其

後如何なる事情であつたか同年六月頃には之を閉鎖し器具類仕込桶等を民間に拂下げたのである。當時仕込桶九十本、釜廿五個程あつて此拂下げ品が滿洲各地に利用せられ、民間に於ける斯業の勃興を見たのである。即ち旅順醬油會社、奉天伊豫組、營口東萊醬園其他二三の設立があつた。滿洲に於ける邦人醬油味噌の濫觴が陸軍である事は洵に面白き奇緣である。以下各原料に就て述べて見やう。

二、原　料

醬油味噌の原料たる大豆、小麥、碎米等は滿洲到る所に產出せられ、比較的低廉に且自由に得られるのであるが、關東州外にあつては食鹽に對し前述の如く鹽稅を徵收せらるゝのであるから、關東州內、州外との價格は醬油壹石當り五圓內外の差を生ずるのである。然しながら關東州內より州外に醬油味噌を輸出する場合には關稅として從價三割の正稅と關稅五步の賑災附加稅が課せられるから之によつて鹽稅との調節がとられてゐる。今各原料に就て說明せば、

大　豆　滿洲大豆の種類を大別して白眉、金元、山豆の三種があり、近年に至り滿鐵農

事試驗場の奬勵による改良大豆が市場に散見される。味噌には白眉、改良大豆が賞用せられ醬油に金元、山豆を使用する向が多い。之は値段の關係もあるが白味噌の如き着色を厭ふものには白眉或は改良が適當であり、醬油の如く着色を欲するものは金元又は山豆が好適であるからである。

小　麥　南滿地方に於ては遼河一帶及奉吉線一帶の地より産出する。之を北滿産に比すれば品質に於ても産出量に於ても頗る遜色があるが、我々同業者は多く其地々々の産物を使用して何等支障を來すやうな事はない。南滿地方に於ては不作の場合稀に北滿産を使用することもある。又大連方面は山東省産を使用することもあると言ふ。

碎　米　其の年の籾の出來高及品質の良否によつて産出に相違があるが、大體滿洲に於ける精米の生産量は一ヶ年約七十萬石内外であるが、其の三%を碎米と見れば約二萬一千石の碎米が出來る筈である。此内味噌用として消費する量は大約一萬五千石内外であるから殆んど全産額の三分の二は味噌用に供せらるゝのである。

食　鹽　原鹽と精鹽（再製鹽）との二種があつて醬油には多く原鹽を利用し味噌には精鹽を使用する。而して前述の如く關東州内には鹽稅の負擔がないが、州外には總て鹽務署の嚴重なる監督の下に鹽一石（六百三十斤）につき國幣三十七元八毛の鹽稅を課せらるゝにより鹽百斤につき鹽稅國幣六圓を支拂はなければならぬ。之がため州内に於て原鹽百斤七十錢内外のものが一たび州外に出づれば百斤國幣七圓の高價となるのである。

最近五ヶ年間の各原料の價格を示せば次の通りである。

種別	昭和七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
大豆（一石）	四七、七七圓	四八、六八圓	八、二四圓	一一、四二圓	一四、四〇圓
小麥（一石）	一〇、八〇	三、〇七	一〇、八六	一一、七三	一一、四一（上半期） 一七、一一（下半期）
碎米（一石）	一一、三四	一二、七三	一二、四四	一六、六六	一八、六九
原鹽（100斤）	六、一六	七、〇〇	七、四〇	六、六五	六、六一
再製鹽（100斤）	六、九〇	八、八〇	九、四九	九、二〇	八、五八

（備考）本表は奉天營口實入の一ヶ年平均價格

三、製造方法

一般滿洲人家庭に於て廣く自家釀造せらるゝ大醬は秋季大豆を煑熟し味噌玉を造り、粱

木上の柵に放置し自然に麹菌及雜菌を蕃殖せしめ、春季鹽水中に投じ三伏を通して醱酵せしめ秋季食用に供する。又青醬は秋季高粱と大豆を煑熟して味噌玉を造り、大醬と同樣の方法により秋季之を壓搾して醬油を造るのである。以上は何れも庭前に一石乃至二石五斗量位の甕を並列し、之に尖形の笠を着せて雨水を防ぎ晴天には除きて日光に曝射し時々灌入れをする。又南式醬油の製法は春季大豆を煑沸し之を麥粉と混合し麹室に入れ溫度を利用して一週間放置し麹菌の蕃殖を圖るのである。而して大醬と同じく庭園に甕を排列し鹽水に漬けて溜りの狀態とし、夏季に至れば折々上下入れ替をなして日光に曝し熟成せしめ秋冬の頃更に二番醬油を加へて諸味狀態となし布袋に入れ壓搾機に掛けて醬油を壓出する此外麵醬と稱するものは饅頭に麹菌を蕃殖せしめ、鹽水に漬けて醱酵せしめたものである之は其儘使用することもあり、又醬油の調味料として使用する場合もある。本邦の醬油釀造法とは多少の差はあるが原理に於ては大差がないのである。

日本醬油の製造法は既に周知のことであるから之を省略するが、近年に至り各釀造家がアミノ酸を製造し之を添加するもの甚だ多く、殊に滿洲の如き新鮮なる大豆粕を容易に得らるゝ土地にありては、アミノ酸工業の發達は將來頗る有望であり、追々化學的に混成醬油の時代に到達するのではないかと思はるゝのである。

四、現況概觀

遠隔の地は調査困難なると各工場とも實際の釀造石數は秘密を守るので精確な數字は得難いが、大體に於て滿洲側が南式醬油のために年々消費する大豆の數量は大約二萬五千石內外と見て大差がないであらう（青醬又は大醬の自家釀を含まず）大豆二萬五千石と假定せば之に約同量の麥粉が加はるのであるから之を日本式諸味に換算すると約八萬石の諸味を得る。此諸味から最上醬油及二番醬油に合して約九萬六千石の醬油が得らるゝ、又此外に本邦人經營の醬油釀造業者から約二萬一千七百石を滿洲側に供給してゐるから之を合すれば十一萬七千七百石となる計算である。滿洲在住民を三千六百萬と假定し一人當り一ヶ年間消費量五升と見るも尙ほ百八十萬石の需要はある筈であるから、現在の供給高は漸く十五分の一に達するに過ぎず、斯の種業者の前途尙ほ遼遠であると言ふべきである。

又本邦人經營の諸味仕込桶の總量は關東州內二萬八千石同州外四萬八百五十石であるが

此内七千石は味噌仕込桶であるから之を控除し差引六萬千八百五十石が諸味仕込桶となるのである。此仕込桶から一ヶ年約三萬一千石の諸味を汲出し得るから之を精製すると最上物及二番醬油四萬三千四百石を得るのである、内二萬一千七百石を滿人に供給し殘り二萬一千七百石を本邦人に供給して居る計算であるが此の外昨年度に於て大連、安東、營口、圖們の四稅關から一萬三千石の醬油が輸入せられてゐるから之を合算すると三萬四千七百石内外が本邦人によつて一ヶ年間に消費さるゝ量である。在滿日本人六十萬人が一ヶ年一人當りの消費量は五升八合に該當する計算である。

味噌は滿洲國人には全然需要がない。在滿邦人六十萬人が一ヶ年需要する量は、大約百七十二萬貫内外である。而して味噌を專門に製造する工場は關東州内四、同州外二計六ヶ所である。この專門工場から一ヶ年供給する量は七十萬貫内外で殘餘は醬油と兼業の工場から供給せられて居る。

五、奉天に於ける釀造工業

奉天に於ける釀造工場は現在六工場、投資額計六三四、〇〇〇圓、昨年度生產額八八八、〇〇〇圓、能力一、四九五、〇〇〇圓であつて全滿工場數に於ける地位は次の通りである。

1、邦人經營の主要工場分布及能力

地名	工場數	容器總石量	地名	工場數	容器總石量
大連	一七	二六、六〇〇石	奉天	六	二五、三〇〇石
營口	一	三〇〇	四平街	二	二五〇
鞍山	一	一、〇〇〇	旅順	二	一、四〇〇
安東	二	三、〇五〇	新京	二	二、六五〇
遼陽	二	六、三〇〇	哈爾賓	一	五〇〇
撫順	二	八〇〇	公主嶺	六	七〇〇
計	四四	六八、八五〇			

2、滿洲國人經營の主要工場分布及能力

地名	工場數	一ヶ年大豆使用量	地名	工場數	一ヶ年大豆使用量
奉天	一二	五、二〇六石	營口	一二	六八八石
吉林	三	九三七	安東	一三	一、一七五
間原	四	四一三	西安縣	一	一〇〇

撫順	二	六七五	新民屯	一
新京	九	二、八五〇	哈爾賓	二二
四平街	三	二三八	山城鎮	一
鐵嶺	九	一、五六三	調査不明	
洮南	四	五二五	錦縣	三
計	九九	二五、〇〇〇		

二五〇
七、八二五
一〇〇
一、八七〇
五八五

以上に依つて見ると邦人奉天工場では工場數は全滿のそれの一割三分六厘であるが、容器總石量は同じく三割六分七厘であつて大連の三割八分六厘と併はせ全滿の過半數を占めてゐる。滿人工場では工場數は全滿數の一割二分、一ヶ年の大豆使用量では二割八厘であつて、哈爾濱の三割一分と合はせて全滿の半數を使用してゐる。

次に奉天に於ける邦人經營の主要工場の概容を述べやう。

1、奉天醬園

同社は資本金一百萬圓、拂込三十六萬圓で大正八年八月西塔大街の一千六百餘坪を擁する現敷地に設立せられ、山田三平氏を代表者に西卷豐之助氏に業務一切を擔當せしめてゐる。工場は現在職工約八〇名を使用し、其年產能力醬油二萬石、味噌三十萬貫を擧げ、昨年度の概算生產額二十萬圓に及び事變當時より其優勢を持續してゐる。製品の仕向先としては醬油は三割を日本人向、殘七割を滿人向として全滿各地に積出し味噌は大部分を日本人消費に充てゝゐる。

2、伊豫組

合名會社伊豫組は明治三十九年十月の創立に係る奉天屈指の老舗であつて、代表者峯八十一氏にて化學工場と合はせ投資約十五萬圓、同じく工場敷地一、八五〇坪を樹し、職工約五〇名を使用して年產醬油六千石、味噌十五萬貫の能力を有し、昨年度の生產額概算二十一萬圓を擧げ滿洲事變後二倍の增加を來してゐる、尙化學工場はアミノサン年產能力約一千五百石を有するが現在操業を中止してゐる。

3、島屋合名會社

事變後斯界に進出せる新式工場があつて工場投資十五萬圓、鐵西工業地區に約七千平方米の敷地を擁し職工從業員三〇名、代表者に戶島作太郎氏を擧げ年產味噌三六萬貫、醬油

五千石、福神漬二十萬貫其他の能力を有し昨年度概算十二萬圓の生産を擧げてゐる。

4、其他内地に本店を有する會社にして奉天にも工場を有するものとしては野田醬油株式會社と大連醬油株式會社の兩工場がある。前者は昭和七年の創立にて投資約十萬圓、代表者茂木芳次郎氏、七四〇坪の工場敷地を擁し、年産ほまれ味噌三十五萬貫の能力を有してゐる。後者は昭和六年創立、代表者松田尙三氏、投資約十萬圓にて六百坪の敷地を擁し、年産醬油三千石、味噌二十萬貫の能力にて昨年度概算二十八萬圓に及んでゐる。

六、本工業の將來

醬油味噌が單に邦人の需要を充すに足るものとせば在滿邦人僅かに六十に充たざるものに供給する數量は餘り大した期待はなく、五萬二千石の醬油と二百三十二萬貫内外の味噌があれば全部の需要を充し得るのである。併し乍ら將來滿洲人の生活樣式が進歩して不完全なる自家釀よりも寧ろ低廉にして美味なる調味料を容易に得らるゝ事を自覺して來る時代があるならば、其需要數量は相當多量のものがあるであらう。大正の始めに滿洲人に賣行く醬油の量は僅かに一ヶ年二、三千石に過ぎなかつたものが、二十年後の今日既に十一萬石に達し、今後尙ほ加速度的に一段の需要が增加する狀勢を示してゐる。殊に品質粗惡の調味料によつて馴されてゐる彼等の味覺は本邦人の如く銳敏ではない。

今や前記當業者に於ては、此の點より低廉にして而かも美味なる調味料の創製に成功し以て滿洲人の自家釀を自滅せしむる事に努むべく只管研究してゐる。

終に本項資料に付奉天醬園西巻豊之助氏より資料を賜はりたる事を厚く謝す。

六、食料品工業

一、製糖業

(一) 需給關係

1、各國糖の消長

由來滿洲に於ける砂糖市場は之を三期に劃する事が出來ると思ふ。第一期は支那土産糖の全盛時代、第二期は香港糖の全盛時代、第三期は日本糖の全盛時代である。第一期及第二期のことは不明であるが、第三期の日本糖が香港糖を覆へして滿洲市場を掌握したのは日露戰爭後の事である。即ち大日本製糖會社が戰爭直後大里工場の製品を大連に輸出し、三

井、鈴木、湯淺の三大商店の手によつて滿洲市場に喰ひ入つた時であるが、其の後香港糖との間に勢力上の高低はあつたが、今日に於ては種々の努力精進により牢固拔くべからざる地盤を築き殊に建國後の發展は特に著しきものがある。左に其の消長を示す統計を掲げる

滿洲國仕出地別砂糖輸入及國內消費累年表

仕出地＼年次	昭和五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年
日本	五〇五、六二九	五四五、五四四	一、〇二〇、〇五九	一、二八八、四五九	一、〇四〇、〇三八	一、二四〇、〇五八	八〇〇、一〇八
朝鮮	二六四、八四〇	二〇九、二八八	三四七、六七七	四四五、一四三	二九五、〇四六	五六二、一七七	四四〇、四二四
支那	二、二八九	四、六三五	七、四三三	九、三四九	四一、三七九	一〇、一六一	一〇、二九〇
香港	四八三、八八九	二三一、一三四	一、六六、二六三	一、四四〇、四〇〇	一一〇、二一四	六六、〇四二	九〇、二九
爪哇	一四、二〇二	—	九、〇三〇	八四、八五六	四二、二四〇	六二、八八九	二三二、四二六
國內消費高	一、六二一、五六四	一、〇五五、四四三	一、四二九、三三八	一、六二九、六一九	一、二四七、八〇一	一、五六九、二一〇	調査未了

香港糖は昭和十年迄僅か六ヶ年間に八分の一に減じ日本糖は斷然頭角を現はして了つた而して支那土產糖の如きに至つては今日全く姿を滿洲市場より消し了つたのである。尙昭和十一年度輸入統計中には日本糖の減少が目立つが之は關東州輸入分を含まないもので

あるから此の分を大體三〇萬担に見積ると前年度と大差ない事となるの併し滿洲國內に製場工糖が出來た關係上今後の日本糖の輸入に影響のあるのは當然であらう。

2、奉天市場の概況

日本糖が其の市場に現はれたのは明治四十年五百担輸入されたのが最初りで亞いで四十一年に三千担を入れた。次第に香港糖を驅逐して日本糖は玆に獨占の市場を作つたが大正六年南滿製糖會社創立され作業を開始するや其の需給糖は殆んど全部同社製品を以て置き換へられ輸入日本糖及び香港糖の取引は跡を斷つに至つた。

南滿製糖閉鎖と共に市場は再び輸入日本糖の勢力圏に入り今日に至つたが昨年三月下旬から舊南滿製糖工場は新たに復活され滿洲製糖會社の手によつて作業を開始し製品を賣出したから、市場は以前の南滿製糖會社當時の如く再び奉天工場の支配下に移されるだらう而して今日迄は奉天は單なる砂糖消費地であつたが今後は奉天工場の運轉により生產及び配給市場たるの色彩を濃かにし來るであらう。大正十二年頃には一ヶ年平均一萬瓩內外の到着量があつたと云ふ點から見て相當の消費化力持つた市場であるが、最近の情況は次表

示す通り購買力の著しき增大を現はしてゐる。

昭和十一年度奉天驛砂糖發着數量表

（到着之部）

月別	白砂糖	赤砂糖	氷砂糖	角砂糖	双目糖	白砂糖	赤砂糖	氷砂糖	角砂糖	双目糖	黑砂糖
一月	一三、八七三	九二三	一五六	二六	—	四七三	一六	八三	五〇	六	—
二月	八、二八三	三、八二九	三三	九一	二九四	六八	二八九	一三七	五五三	一〇	—
三月	五、四八六	二、二七	二四七	五四二	六	五九七	五四一	二三〇	一八〇	—	—
四月	八、六八	一三、三四一	一八三	四一四	—	四三一	二九四	二六	一四二	一	四
五月	八、九一八	一一、八四六	一八四	四二七	—	二三三	二三二	六四〇	一五二	四	一
六月	四、三四四	三、六五九	—	二五七	九九九	五、六〇一	六二	—	二八	一四	—
七月	四、八二七	七、六六〇	六八〇	一六	—	七、一六五	三三八	六〇	五六	七四	二
八月	四、一六二	一、一四四	二	—	—	五、八一三	二九〇	一四四	五二	二五九	二
九月	四、八八五	二四、一〇二	二二〇	一四四	五九〇	五、七五九	一〇八	五六	二二五	一	—
十月	五、七六一	二、一四八	—	—	—	四、三三一	五〇九	一四五	二五	九	—
十一月	五、四三五	一、二六七	—	—	—	八、五七九	四六〇	二二九	四七四	三、五六六	—
十二月	三、五六六	四、七二〇	二八	四〇〇	—	三〇、〇一四	五三〇	二〇七	七六	二、四四〇	七
合計	六、一六六	七七、一〇五	二、三三三	二、一二七	一、六八九	五九、六九三	四、三三三	一、八二七	一、八九〇	七、〇三	一四
昭和十年度	八七、九四七	一四、二〇〇	四、八六三	四、一八九	二九三	六、一六八	三、四三三	一、五四七	一、六〇四	二三	—

註　上表に依るに昨年度は一昨年度に比し到着の減少、發送の增加が顯著に現はれてゐるが之は滿洲製糖の製品が昨年より市場に出廻はるに至つた爲である。

尙大正十二年頃の記錄に徵すると南滿糖が第一位の勢力を占め香港糖日本糖が之に亞ぎ勢力伯仲の間にあつたが最近では勿論全部日本糖の占むる所となつてゐた。併し今後は滿洲製糖品が腕を伸ばし來るべきは明かなる所である。

二、滿洲殊に南滿洲に於ける甜菜栽培業

大體滿洲に於ける製糖事業は氣候其の他の關係上北海道と同樣甜菜の壓搾によるのであるが、それも南滿と北滿とは其栽培上に幾分の差異がある、一般に專門家は南滿が甜菜が不適であり、北滿の方が良いと云つてゐる。

併し乍ら南滿製糖會社の失敗は甜菜が不出來であつた爲ではなくて他の原因に依るものであつた。同社營業時代に於ては甜菜栽培の成績は創業以來日尙淺く、栽培當事者たる農民に於ても經驗淺く、時に旱魃或は降雨過多等の天災に禍され、未だ十分發達の域に達しなかつた。而して當時輸入せる獨乙種子が褐斑病に弱かつたにも不拘、南滿甜菜業に此の病氣が多く且又之が消毒に注意を拂はなかつた、更に幼苗時代に地蚤や黃金虫が附いて之

を喰ひ切つた爲株數に不足を來した等の原因によるのである。

そこで南滿が事實甜菜に適するや否やを檢するに就て先づ其氣候降雨量を述べやう。

成程奉天氣溫は九、十月の成熟期に於て四平街、公主嶺、新京、哈爾濱、齊々哈爾の六個處の內で一番高い。九月の平均が一六、七、十月の平均が九、〇であつて哈爾濱の方は九月一五、二、十月が六、七である。併し乍ら氣溫といふものは甜菜栽培にそれ程影響すべきものではない、之は米國甜菜糖業地の中心地がバナナ、椰子の茂るコロラド及びカリフオルニヤ州であるといふ一事に於ても明かである。

次に降雨量は次表の通りである。

滿洲累年平均降水量表

地名	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	自五月至十月合計
奉天	二六、七	五五、三	八七、一	一四六、〇	一三五、三	八四、八	三八、二	五四六、七
四平街	二一、六	七三、二	二一三、七	二一一、二	七〇、九	五九、五	二六、一	六五四、六
公主嶺	二〇、五	五〇、二	九四、六	一八七、七	一五一、六	七四、三	三八、一	五九六、五
新京	二二、一	五六、一	一二六、一	一九二、六	一二〇、五	一六四、〇	三四、五	五九三、八
哈爾濱	二九、一	五五、二	一〇三、一	二〇三、一	一一一、二	五九、九	三八、七	五七一、二
チチハル	九、九	四〇、七	一〇八、六	一三九、六	一〇九、二	六一、九	一〇、五	四八五、六
海倫	一七、六	八五、九	一五六、四	一二四、三	七三、二	一三一、九	八八、四	五五七、四
札幌	六五、三	六三、六	六四、〇	八七、九	九八、三	一二八、九	一一一、九	五五四、六

總量に於ては北滿や北海道邊りに大差なく又七、八月の生育期は滿洲では先づ多い方である。

南滿製糖時代の一町步當收量は大正十四年に二萬五千斤の記錄を得てゐるが、普通は先づ二萬斤內外であつたやうである。現在の滿洲糖の昨年度作付面積二千三百町步、の收穫量五千萬斤、從て一町步當二萬一千七百四十斤となり大正十四年當時に大差がない。之は同社に於て本年度の作付面積も四千五百町步に增加し益々努力してゐるから理想の四萬斤は兎も角として北海道同樣三萬斤に達せしめる事も茲二、三年のことであらう。

尙步留であるが最近の資料を缺くから大正六年より同十四年迄の南滿製糖會社原料根糖

分析表に就て左の表を掲げる。

南滿製糖原料分析表

年次	根中糖分	壓搾 全固形分	壓搾 蔗糖分	壓搾 純糖率	製糖率	品種
大正六年	一五、二一	一九、八八	一六、〇一	八〇、四七	一二、七五	露西亞
同七年	一三、五二	一六、六〇	一四、二三	八五、七三	一一、五九	獨乙
同八年	一二、四九	一四、九九	一三、二一	八八、一二	一〇、六九	同
同九年	一四、三八	一八、六八	一五、〇一	八〇、三五	一二、〇〇	同
同十年	一一、〇二	一四、七八	一一、七四	七九、五九	八、九三	同
同十一年	一三、一九	一六、三四	一三、八三	八四、六八	一一、二一	同
同十二年	一二、二〇	一五、四七	一二、八一	八二、七五	一〇、一八	同
同十三年	一〇、四九	一四、〇六	一一、一九	七八、九八	八、四二	同
同十四年	一四、四三	一七、八七	一五、一四	八四、六七	一二、三五	同

大體に於て含糖率一三%内外、歩留は一割内外であつたやうである。併し今度の新會社滿

洲製糖の下に於ては其指導宜しきを得て平均一七%の含糖率が現はれ、歩留最低一割二分の成績を擧げてゐる。

要するに南滿製糖の失敗は未經驗を主因とし水害旱魃等の天禍が其副因を爲したのであつて南滿の地が本來栽培に適してゐる事は右述べた所に依て十分明かであると信ずる。

三、滿洲甜菜の農民に及ぼす影響

大體に見て滿洲に於ては全人口の八割迄農民に依て占められゐるが、此の二千有餘萬人の農民の土臺とする農業の現狀は如何であるか、高粱、大豆、粟等を其特産としてゐるが其經營の一方的なる爲に過去年々農民の生活を脅かした事は一再でなかつた。近時北滿に於ける小麥亞麻の栽培が奬勵されてゐるのも其多角化經營が如何に農産物の利潤を多からしめ以て彼等の生活を安定せしめるかゞ不明であるからである。此の點に於の甜菜の如き高等農産物の栽培は如何に有益なるか贅言を要せざる處である。

元來甜菜は四年目に一回の輪作を必要とするのであるが、今北海道に於て昭和元年より五年迄五年間甜菜耕作指導地に於て得た他作物に對する影響に就て次の成績表を示す（單位石）

作物種類	甜菜ヲ輪作ニ入レタル畑地ニ於ケル數量	甜菜ヲ輪作ニ入レザル畑地ニ於ケル數量	增收率
大豆	一、三九〇	一、一三四	二五、六〇%
小豆	一、五〇〇	一、〇〇〇	五〇、〇〇
燕麥	三、六三三	二、八七一	七六、二〇
裸麥	一、四一六	一、一〇〇	三一、六〇
大豆	一、二二七	、九六〇	二六、七〇
小豆	一、四〇七	一、一一八	二八、九〇
菜豆	一、〇六九	、七九七	二七、二四

即ち畑作農業上甜菜の利益大なる事は北海道が證明證を發行した譯である。

甜菜栽培上の特質は家畜に對し圃場の莖葉、根頭部及び製糖副産物たるパルプを利用する事が出來、同時に勞力又は乳肉を生産し農家の經濟を豐かにし、他面に厩肥の增産施用によつて地力の維持を圖り一面甜菜の深根作物たる所を利用して土壤の耕耘整理を周到ならしめ更に肥料に對する感受性大なるを利用して肥培管理の智識を向上せしめる等栽培技術上に訓練的進歩を計る事が容易であるから、甜菜糖業が起つて同道の農業組織は合理的に改善せられて確固たる生産の增加を示し窮迫に頻してゐた農家の私經濟を挽回し從て農村自治の根帶を固からしめたのである。

右は北海道廳の云ふ所であるが滿洲に於ても確かに同樣の事が云ひ得ると思ふ。現と北滿阿什河、呼蘭の二工場が煙を吐く事によつて運輸、肥料、農具の需要、工場必要品の販賣、工場關係者による日用品の動きは盛になり、工場の前貸制度により農民の生活は豐かに安定度を增した。

現に滿洲製糖は昭和十一年度より操業を開始し現に同年下半期製品を上市したのであるが其の農民との栽培契約によると一天地（約六段歩）には約三〇圓を貸付ける外種子及び肥料を供與し更に其の半額に相當する金額を補助し同年度の此の補助額のみにても六萬五千圓に達してゐる。之等の補助は北海道、臺灣は元より諸外國悉く政府の手により行はれてゐるが滿洲國に於ては建國尙五年、漸く產業五ヶ年計畫の一期に入つた許りで甜菜の助成にまで及ばず、同社にて之等の一切を負擔してゐるのである。而して同社では前南滿製糖の舊轍に鑑み耕作指導其の他に指導宜しきを得てゐるから農民の同社に依賴する心强く生

活の改善を謳歌してゐる。

四、滿洲製糖股份有限公司の概要

最後に滿洲製糖の內容一般を述べやう。同社は昭和十年十二月二十六日本工場の經營主たる滿洲製糖會社及び滿洲製糖股份有限公司の創立總會を終り、二十八日、設立登記を濟ませた。資本金一千萬圓第一回拂込二百五十萬圓である。此の滿洲製糖會社と公司とは何う云ふ關係のものかと云ふに同社は直接製糖は行はず滿洲國法人たる公司が經營する。而して同社は單に公司の株式を所有して事業の監督を爲すと云ふ形である。滿洲製糖會社の役員は社長赤司初太郎、取締役藤山愛一郎、有島健助、後宮信太郎、松江春次、槇哲の諸氏、監査役は武智直道、望月軍四郎の諸氏、股份公司の方の役員は董事長赤司初太郎、常任董事高橋德衛、董事には齋藤茂一郎、庵谷忱、前田政市、常焜彝、叢樹楷の諸氏、監察人は武智直道、崔恩培の二氏である。而して奉天工場に鷲山義直氏を配してゐる。同會社の規模は奉天工場の外に鐵嶺工場を所有してゐる。之は水質其他を調査し近く操業の筈でゐる。其外に最近北滿呼蘭工場の拂下げを受け本年十月より操業に決定してゐる。

奉天工場は五百屯の甜菜壓搾機に百屯の精製糖裝置とを兼有する工場であつて、昨年度生産は十二萬六千擔であつたが、一割二歩の步留で一年二十六萬擔の生産能力を有してゐる。而して鐵嶺、呼蘭二工場の製造能力を夫々十萬擔とすれば滿洲製糖だけでも三十六萬擔の砂糖を市場に出す事になる。之は滿洲の全消費に對しては二割二分五厘に當り滿洲の自給自足を見るには尙大なる活動と擴張とを必要とする譯であるが此の滿洲製糖が出來て滿洲甜菜事業を復活させたと云ふ事は滿洲産業開發上重大の意義が有り貢献淺からざるものがあると信ずる。

尙本項の統計其の他材木信治氏著「滿洲糖業を語る」に依り、之に最近の統計を以て補ふ事とした。

二、菓子製造工業

菓子工業は總論工場生産現勢の所でも一寸述べた通り、釀造工場と共に事變後新設工場數の割合に多く古くから製造と販賣とを兼ね行つてゐるものはあるが新式機械工場は總て鐵西工業地區に新設された。其の新設四工場の投資額概算百五萬五千圓昨年度生産額百十一萬圓で販賣兼業の地場工場の投資額七萬九千圓昨年度生産十萬七千圓に比べて十倍以上

の相違である。

何故急に期を同じうして製菓工場が設立されたかと云ふと大體技術作業が簡單な上に消費する者が日本人のみならず滿洲人口の九割以上を占める滿人も含まれてゐるからである。尤も滿人需要の菓子は從來地場滿人工場でも造つてゐるが之等は所謂一種の砂糖菓子に類し頗る低級のものである。そこで右の諸工場では主としてビスケットを彼等消費の爲に生産してゐるが、大體將來の需給は樂觀して良く現在大體全滿消費の二割位の供給量である

次に在滿工場としては、地場で生産する品種と輸入品種とは異つてゐると云ふ事も有利な點である。試みに菓子の全滿輸入貿易表を見ても掲げられた項目の中之に類するものは乾葡萄か鮮乾製菓子のみであつて昨年度の輸入價額は前者が二五〇、〇七一圓、後者が二、七九〇四九九圓を示して居る位のものである。尤も鮮乾製菓品と云つても多く果物や洋菓子が大部分である。之に反し奉天の工場は悉く和菓子專門であるから其の間競爭の心配はない、只明治製菓とかグリコ工場とか內地資本の進出せる工場では此の點寧ろ內地で生産し輸入した方が有利と思はれる。殊に關稅に於て原料の砂糖が大體一三〇斤當り八圓に對し製品菓子が從價一割五分と却て原料より割高となつてゐて特に左樣な考へも起るのであるが、之は前述したやうに右の工場にても內地と同じ品許りを造つてゐる譯ではなく、滿洲現地の嗜好に應じた例へば滿人向ビスケット等を製造してゐる。又他の原料たる小麥粉は滿洲產を使用して割安であり石炭等も內地と比較にならぬ程の廉價であり、水質其の他工業條件に惠まれてゐる關係上、奉天に進出して決して不利と云ふ譯ではないやうである。

次に奉天の主要工場を紹介やう。

1、三立製菓株式會社

事變後錦西に新設された工場から見るに先づ三立製菓株式會社（所在地南二路、昭和九年九月創立、投資額十萬圓、代表者岡瀨傳次郎氏）を擧げる、同社はビスケット日產七百貫の能力を有し昨年度生產概算五〇萬圓で相當の成績を擧げてゐる。

2、日滿製菓股份有限公司

日滿製菓有限公司（設立昭和十年二月、所在地（南二路二四代表者岡田重吉氏投資額二五萬圓）ではビスケット及水飴の生產を爲し日產能力ビスケット七〇〇貫、飴三〇〇貫を有し、昨年度はビスケット二萬六千貫飴一萬二千貫概算十萬